曹洞宗修証義説教全書

洞宗大學林教頭折居光輪老師題字并閲
明道人安達達淳老師題字并閲
鴻盟社編輯局編纂

東京
鴻盟社發行

019682-000-5

特18-568

曹洞宗修証義説教全書

鴻盟社

M29. 9

ABG-0476

特18
568

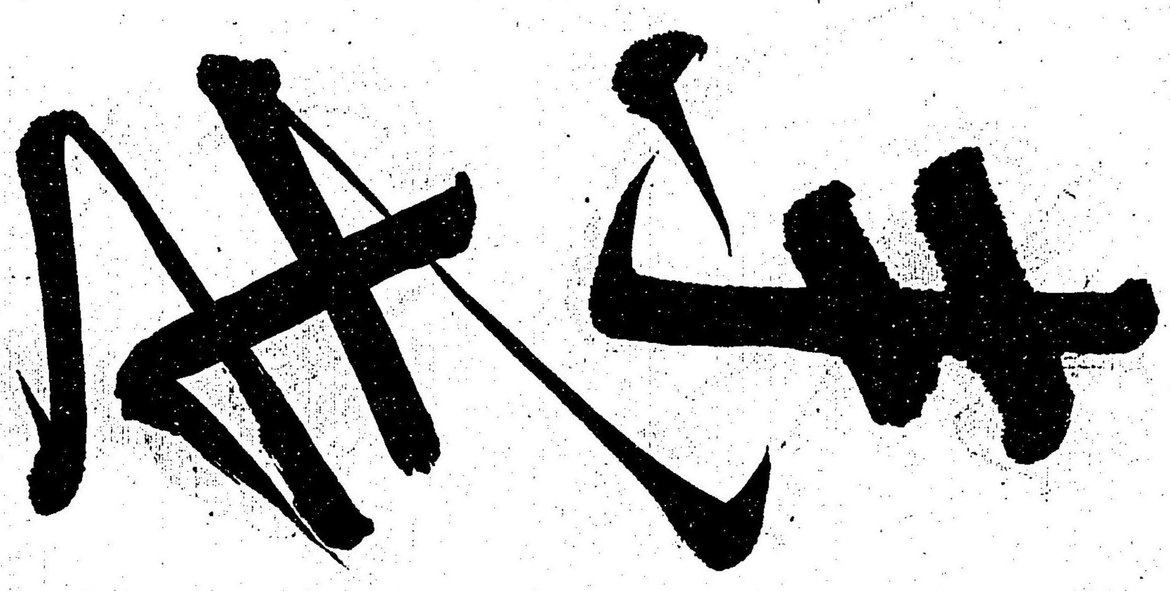
曹洞宗大學林教頭折居光輪老師題字幷閲
妙明道人安達淳老師題字幷閲

鴻盟社編輯局編纂

曹洞宗 修証義 說教全書 全

東京

鴻盟社發行



蒙求

中堂

光緒東瀛

宗妙吟

心源

第一席

◎曹洞宗修證義說教全書

◎第一席（曹洞教會修證義第一章總序第一節）

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因緣なり

サテ今回は曹洞教會修證義の說教を致すところ得でござります。それで。まづ始めに曹洞教會といふ名は。どこから持つて來たものか。如何なる仔細によりてつけた名じやかといふに。もと曹洞宗第三次の定期大會議において。「曹洞扶宗會の編纂にかゝる洞上在家修證義を採收して。曹洞教會衆安心の標準となすこと」といふに基づき。在家に安心のいたしかたを定められたのじや。ソレから修證といふは久遠實成本來妙淨明じやから。殊更に修も證も少しも借るところのないやうなものじやけれども。修せんければあらはれん。じやからこれを妙修と名づけ證さんければ明らめがつかぬ。じやからこれを本證と名づくるのじや。丁度鏡の曇りをぬくふやうな次第じや。

メレから總序といふのは。我が曹洞宗ばかりの唱ふるところではない。佛法一般の通説にいたして。どの宗旨でも。どの宗派でも皆な唱ふるところじや。第六節までは。各宗派共有の寶物である。ゆゑに生を明らめ死を明らむるは。我曹洞宗のみが特有するところでなく。何れの宗派を問はず。これさへさとり得られたならば。それで我が佛法修行の事は終つたのじや。これが實に大目的じや。僅かに此の一行に足らない二十二文字のお言葉が。自由自在に運轉が出來て。時間の道中に關門がないやうに。盡虚空明けはなしのごとくに。無礙に取りあつかふことが出來れば。夫れでそのまゝに諸佛とおなじ境界じや。我が曹洞宗に之れを即心是佛といひます。サテいよ〳〵御文にうつりまして。頭まから生を明らめ死を明らむるはと仰せらるゝ。これは總序第六節までの糸口でありて。其糸口から解きひろげて見ると。第二章懺悔滅罪「第七節より第十節、」第三章受戒入位。「第十一節より第十七節まで」。第四章發願利生。「第十八節より第二十五節まで」。第五章行持報恩。「第廿六節より第三十一節まで」。此四章二十五節の總躰を通じて居る。メレでまた段〳〵とつゞめて來ると。又生を明らめ死を明らむ

るの一句に歸して仕舞ふ。それから生を明らめ死を明らむるといふは。如何なることかといふに。すべて何事によらず。一寸一つの顏を出して。拙者は卿で候拙者は木で候。又は虫で候鳥で候と。世の中に姿た形ちをあらはして居るものには。必らず原因といふ種があつて。結果といふ實を結んだにちがひない。然らば生といふには何か生ずべき原因がなければ叶はぬ。先づおのれが斯のごとく此世へ顏を出したは。そも〳〵何によりて來たものか。父母の未生以前に逆のぼつて考へて見にやならん。何が種で何が用事であつたかそれをよく〳〵究盡して見ると。そろ〳〵と分つて來る。生死は因果の道理の法則じや。厭でも應でも仕方がない。三毒に牽かれて廻り前生又前生。來世又來世。何方より來たりて何方におもむくのじや。忽ちあり忽ちなし。刹那にあらはれて。刹那にかくれる。闇に闇をかさね夢に夢を見る。天上も家なり地獄も栖かなり。六道の輪廻始めもなく終りもなく。父よ母よと呼び。子よ孫よと慈くしみたるもの幾億萬人。而して生死のつきることがない。是れ因果の法則であるから。何とも早や致しやうがない。大きく考へればこんなものじやが。少さく考へれば生も一

時死も一時。刹那〳〵に生死して居る。ところで法華經の方便品には。諸佛世尊は唯一大事因緣の故をもつて世に出現すと說きたまひて。生死を明らむる爲めに出現なされたとある。去れば生死によりて佛となるのであるから。生死ほど大切なものはない。若しも生死といふことがなかつたなら。佛になる道がない。是れでは面白くもなんともない。ソコデ生死即涅槃と明らめの付た時が生死の中に佛あれば生死がないと仰せらるゝのじや。シテ見れば。生死を離れて佛なく。佛を離れて生死はない。生即不生。滅即不滅で生死のまゝが佛法の大切なところじや。譬へば家の改革をするやうなものじや。あちらにも借金が出來た此方にも借金が出來た。最早や首が廻らなくなつた。イヤ下女が悪いからじや下男が悪いからじやと。散々氣を揉んで其のあげ句に。いよ〳〵身代限りをするやうになつた。然るに風と思ひかへして。イヤ是はしたり何のことじや。我れながら氣が付かなんだ。何にも誰れといふて悪いものはない。私しの怠慢が一番わるかつた。オ、善し。稼ぐに追つ付貧乏はない。ソーじや明日とも言はず。今から稼ぐべしと氣が付て見るといふと。下女が悪いでもなく下男が悪るいでもない。

忽ち身代が直つて來て。安穩な月日を送ることになるやうなもので。下女が里へことかしたでもなかつたし。又下男が盜み貯へて減したでもなかつた。是れが丁度厭やじや〳〵と思つた生死が。厭やどころの沙汰ではなく。却つて皆な涅槃寂靜の奏たなので。厭ひ捨つるやうな馬鹿〳〵しきことではなかつたのじや。ヲヤから餘門他宗のやうに極樂へゆくことも願はず。灰身滅智して生れて來ぬ工夫もしない。只生死の中に居りて生死に動かされぬから。涅槃寂靜と名が替つて來るまでのことで。却つて生死を佛のお命とするのじや。扨て口でこそかやうに容易すくは言はるゝけれども。これが諸佛諸菩薩の。酷いお骨折かあつたところで。此生即不生。滅即不滅の妙理を御研究の爲めには。皆いづれのお方〳〵でも。身命を抛うちての御修行であつた。それを今は疊の上で易〳〵と聞かるゝとは實に果報目出度きことである。昔し釋迦如來因位にまし〳〵た時。其お名を雪山童子と仰せられた。ある時雪山の中にさまよふて居らせらるゝと。風と谿の間だに何やらの聲があつて。諸行無常。是生滅法。といふ二句の偈文を唱えました。ハテな面白きことかな。まかしこれでは何だか物足らぬや

うな心持がいたす。必らず此後の句があるに違ひない。これを求めて聞かんものをと。谷を下りて見たまふに。鬼が一疋立つて居りました。童子問はせたまひて曰く今の二句の偈はお前が唱えられしことか。左やう拙者が唱えたに違ひない。ハヽ左やうに候か。只彼の二句のみにては。未だ理を盡したるものにわらざるやう考がへらるゝが。果して如何のものにや。オヽまだあるのじや。然らばその後の句を聞かして貰ふわけにはゆくまいか。イヤ聞かせることは聞かせたいが。甚深にして理をつくしたる。中〳〵高尚な偈文であれば。小根小智の者には聞くことが出來ぬ。身命を抛ちて法を求むる大根機のものでなくては聞かしても無益じや且つ拙者は久しく生物の肉を喰ひたくて居つたが。未だに其肉が喰へぬ。今後の句を唱えたくても飢て居つて力がないから。其後を唱へられぬ。オヤ左やうで御座るか。然らば我れ此身を以て其食に當り申さん。速やかに說きたまへと迫らせられて。身を抛げ出してのお願みじや。鬼神はよろこびて唱ひますには。生滅々已。寂滅爲樂と。童子は聞きをはらせられ。甚深の理を開悟いたされました。シテ約束なれば仕方がない。鬼の口に身を投げられたと涅槃

經本行經等にありますが。生をあきらめ死をあきらむるがごとき。容易ならぬと云ふは此因緣を以ても知れるのじや。タヾタ一句か一偈の法のために。此通り身命を惜まず御修行遊ばされたのじや。サレば銘々も先佛曩祖の御修行に倣ふて不惜身命に發心修行致さねばならぬ。生を明らめ死を明むることは。則ち別の樣子ではない一寸の光陰は一寸の法身なれば。今生の勝因緣を貴び急ぎ釋迦牟尼佛の御誓願に乘じて。受戒得度の本懷を遂げ。治生產業。悉く佛家の行持より働きかけて。得がたき人身を空しく過すことなく。逢ひがたき佛法を徒らに見ることなく。此身今生に向て度せざれば更に何れの生に向て度せんと。念々回向に怠りなく。釋迦牟尼如來の哀愍納受を願ふのが。セメテはの思ひ出に今生後生の肝要である。偖て餘り長座になれば後の因緣は後席と致して、生死の根本を第一に明らむるのが。人々の無常なる明日をも知らぬ露の身に。最も第一の肝要なる心得であります。

◎第一席（第一節）

生死の中に佛あれば生死なし但生死涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ぶべきもなし是時初めて生死を離るゝ分あり唯一大事因縁と究盡すべし。

前席のお言葉をおうけなされて。生死の中に佛あれば生死なし但生死即ち涅槃と心得て云々と。如何にも生即不生。滅即不滅と分つて來たら。生死即ち涅槃と相成るのじや。シテ見たらば生死として厭ふべきことはなからふ。此身此まゝにして。此娑婆に居てよろしいのじやから。遠離穢土欣求淨土などゝ。迷ひ出さんでもよろしい。娑婆即寂光じやから。我〳〵は此娑婆より外に宜いところはないのじや。憂いことじやつらいことじや。情けないことじや悲しいことじやと酷くなげきて見たり。突然ものか起つて來たやうに驚ろいて見たり。那樣でもない此樣でもないと理窟張つて見たり。兎角我がまゝにならぬことを悲しんで居たのが。それがそつくり其まゝに。反對の境界になつて來るから。憂いつらいこともなく。情けないの悲しいのと泣くこともなくなるから。娑婆即寂光と明らめのついた時は。萬事萬物が一個〳〵に光明を放つて居ることが見える。生死に光りが放つて見ゆるに依つて。生死として厭ふべきもないのじや。又生死に光りが放つて見ゆれば。それを名けて涅槃といふのじやから。涅槃として欣ぶべきもないのじやらふ。乃はち生死即涅槃と明めがついた時。この時を初めて生死を離るゝ分ありとはお示し下るゝのじや。只口ばかりてなく。心底一大事因縁と究盡して。生死を離るゝ分にならねば。此娑婆國に出やう〳〵と思つて折角出て來た甲斐がないのじや。譬へば我門の真つ只中に。大きな石が幾個もあるやうなものじや。扨この石を取り除けるには。鹿島の要石もよろしくであるに依つて。何人手間のかゝる事やら。根か何處までも入り込んで居つて。迚も人間の力では掘れぬやうな大きな石を。出這りに邪魔になるからと言つて。ドーしても取り除けやうとするやうな次第じや。夫れを一ッ勘考仕かへて。イヤ此石は至極見付のよいところにある。若し此石かなかつたなら。此門の風致がないが。願ふでもなき面白い石の向きじや。是れを思へは先祖の高祖父なんぞは。余程風流氣があつたと見える。宜ところへ家を構えた。感心なものじやと。かやうに考へたら何樣なものじや。いくら厭やじやの嫌ひじやの言つて。生死を滅盡して仕舞ふ譯けにはゆかぬ。何でも是が一ッ出來な

いと仰せられたことのない。釋迦牟尼世尊におかせられても。三不能といふことがあり て。生界を盡すこと能はずとある。然らば生死の滅盡するといふは。金輪際あることじゃない。ゆゑに諸佛諸祖の研究仕上げて下されたのが。此佛法じゃ。佛法とは萬事萬物法理本然のまゝにして。少しも手のつけやうのない妙々不可思議の無上道をいふのじゃ。而して無上道は生死の外にないのじゃ。じやから無理矢理に石を取り除けるといふやうな。ヘマなことを考へてはならぬ。昔し過去久遠劫に一人の仙人がありました。其名を最勝と申されて山林の中に在して五神通を具へさせた。常に慈心を行じて一切を化益されて居りました。時に念じて曰く。但だ慈心のみを以て衆生を救ふときは。未だ殊勝とするに足らず。多聞を以て能く衆生の煩惱を滅して正見を生ぜしめば。是れ正に眞實の慈悲なるべしと。即ち城邑聚落ところ〳〵に於て。說法の師を求めたもふ。爾時に天魔ありて。來下して仙人の前に語りていふには。我に今佛所說の一偈あり。汝ぢ能く身の皮を剝きて紙となし。血を刺して墨となし。骨を折りて筆となし。此偈を書寫することなら。方に汝ぢが爲めに說くべしと。仙人聞て念ひまするには。我れ無量百千劫の中に於て。常に惡業の爲めに流轉し。身分を截割せらるゝこと無量なり。又重苦を受けたることも無量なれども。都て一分の利益なし。今此不堅の身を捨てゝ妙偈を書寫するときは。是れ法の爲めに身命を惜しむものでもない。利益がないとは言はれまいと。即ち利刀を取りて身の皮を剝き。血を刺し骨を折りて。而して偈を說くのを待せられてある。時に天魔その至信なるに恐れて逃げ去りて仕舞ました。仙人唱へて申しまするには。我れ衆生の爲めのゆゑに。是の如く薄福にして師なきとは何事ぞ。我が此至誠むなしからずば。餘方世界の大慈悲者。願はくば現前したまひて我が爲めに正法を說きたまへと。至心に念じたまふところに。此時東方三十二の刹土を過ぎて普無垢世界といへるあり。其國の佛を淨名王如來と號す。忽然として仙人の前に現したまふて。大光明を放つて最勝仙人を照されますと。仙人の苦痛即ち除きて平復いたされて故のやうになりました。淨名王如來廣く爲めに。集一福德三昧を說きたまへば。仙人即ち法を聞きをわりて無碍辨を得られました。如來は隱沒いたされて見えずなりました。仙人は一切衆生の爲めに妙法を說かれて三乘の

道に住せしめ。千歳の後に命終りて普無垢世界に生れました。此昔しの最勝仙人は。今の釋迦牟尼佛であると集一福德三昧經に說かせられあるが。此の如きも骨折の結果が。終に釋迦牟尼世尊とならせられて。而して漸やく贊題御本文の通りとわらわれ來たのじや。實以て有難いことじや。是れ諸佛世尊の謂ゆる一大事因緣の爲めに世に出現したまふ所にして。銘々の一大事因緣と修行すべき用心の場所であれば。生死の中の諸佛は則ち吾等のことゝ覺悟して。生死そのまゝ眞如涅槃の明月に歌ひ。煩惱即菩提の花に吟して。一大事因緣と修行するこそ肝要なれば。一念の回向。一枝の花も此の用心こそ發心修行の平常であれば。何卒懈怠なき樣に精進することこそ。一大事であります。偖て此一節の因緣は是迄と致し後席の第二節に移りて說きましよう。

南無釋迦牟尼如來哀愍納受〳〵

◎第三席（第二節）

人身得ること難し佛法値ふこと希れなり。今我等宿善の助くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみに非す遇ひ難き佛法に値ひ奉れり。

この御贊題のおもむきは。人身の尊といことをお示し下さるので。如何にもこれを味へて見ると中〳〵おそろしいほどの結構な此身じや。無始劫來六道に輪回して。其輪廻して居るうちには。たまさかには人間界へ生れたこともあらうが。扨生れたからと言つて。畜類とあんまり隔たりのない境界にあつて。唖しか聾にでもうまるゝか。扨は愚鈍で仕方がなく。佛法には遇はなんだと見えて。今日まで凡夫で居つて。何か何やら少しも分らんであつたが。今生に幸ひにまた人間に生れて來て。又幸はひに佛法に値ふたのじや。此佛法もそうでございます。佛法逢ふこと希れなりで。佛前か佛後。佛法滅盡の時でゝもあつた日には。迚も佛法を聞くことが出來ぬ。善し佛在世の時であつても。佛けの御出世をも知らずに死たものも少なくない。それは御誕生あつた天竺の國のことじやか。其余の國々に生れた人〳〵は。尙ほ更御出世などを夢にも知らん。それを今日から考へたらどんなものじや。西洋あたりの或る野蠻國や。南洋とか北洋とか無佛法の地に生れたら。佛法を聞くことが出來なかつたが。幸に佛法國

の日本へ生れ合せたとは。よろこびても尚ほよろこばねばならん。譬へば親をたづねて郷里を出た子のやうじや。親は天涯流離の身であつて。何處に落ついて居らるゝか知れないものを。子供は當てもなく東西南北とさがして居るうちに。風と宿屋に泊り合せて。目出度親子の名乗が出來たら。大層うれしいことではあるまいか。若しこれがグレ濱になつて居たら。いつまでも遇はるゝことかないのじやが。ヒタリ途中に出逢ふといふは。實に宿善の助くるによりて。已に受け難き人身を受けて。又遇ひ難き佛法に値ふたと同じことじや。昔し唐の温渾といへる人。家貧しくして母を養ふに苦しみました。何やかやと孝行に念はありつれとも。如何んともすることが出來ん。困つたものじやと月日をおくるうちに。母は歸らぬ旅路におもむきました。温渾ひたすらに歎きて母と共に坑に入らんと企だてゝ。先づ母の亡骸を坑に入れ。扨坑の端に諸肌を押しくつろげ。水も溜らぬ一劍を引き拔きて。アヤヤ切腹といふところに一人の異人あらはれまして。劍もつ手を確かと把らへて。汝が心ろは察したり。今死ぬるは孝に似て孝にあらず。幸に宿善の助くるによりて受け難き人身を受け。少しも用ゐるところなくして。今殞しては孝行の甲斐がない。我れには正法がある。汝が孝行のこゝろにめでゝこれを授くる程に。存らへて能く孝行せよと。異人に止められし温渾は。泣く〳〵劍をおさめ異人に從がつてゆきました。正法を研究すること六年。終に大悟して衆生を化益したとあるが。受け難き人身と。遇ひ難き佛法に逢ふた身の上を知らば。宿に目前に坑に入るの愚かは勿論。存らえて追孝するの大なるを知つたであらふ。實に受け難き人身を受けて。シテ値ひ難き佛法に逢たをよろこばねばならん。在座の皆樣よ。過去は過ぎ去つたことで仕方がない。今生こそ大切なところじやから。今の人身をおよろこびなされよ。佛法を敬ひたまはれよ。切角尊き佛法に逢ひ稀なる人身を受けて。一生空しく過しなば。千生萬劫の悔ひ恨となりて。何日生死透脫の時もなく黑暗世界の衆生にて暗から暗の輪廻流轉。必す〳〵心して此の因緣を餘所に見ぬことか何よりの肝要であります。

◎第四席　（第二節）

生死の中の善生最勝の生なるべし最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ

前席のこゝろをおうけなされて。生きとし生けるものには。すべて生死あるは知れたこと。上王公貴人より下匹夫野人を始めとして。六趣の衆生みな生あり死あり。其生死あるものゝ中におゐて。人身は何ほど尊といか其尊とさがわからん。じやから生死の中に最勝とて。最も勝れた此上のない生なるべしと仰せらる。此勝れた善生の身命を徒らにして。おのれが仕たい三昧をやりとげて。佛法などは遠國の火事のやうにおもつて。少しも心ろにとゞむることなく。露よりも脆い此の命ちを。「明日ありとおもふこゝろの仇ざくら夜半にあらしのふかぬものかは」。あすどころではない。出る息が引くをまたぬとあるものを。百年も千年も存ふへるやうに考へて。少しの功德も知ることなく。無常の風に任すること勿れと。御懇切なお言葉じや。サテ此の無常。これは誰れもよくいふことで。能く分つて居るやうじやが。それに少しも氣かつかぬものが多い。世の中のことは無常でないものは一つもない。刹那〳〵にかはつてゆく。實

に諸行無常であるけれども。そのありさまを少しも知らぬから。佛菩薩の慈悲心から。をり〳〵大變なことをして見せたまふ。それでも無常に氣がつかんとは。よく〳〵罪障がふかいのじや。譬へば地震のやうなものじや。お經の中には。澤山に出てあるが。その震動に四因八緣がある。これは無常を知らせる方便じやそうだ。龍動あり金翅鳥動あり佛の出世動あり。入滅動あり。四天下を動することあり。皆なそれ〳〵の受持の神や佛けが。大きな無常をおこして。感じさせて下さるといふ。明治二十八年一月十三日。アフカンといふ滊船が横濱を出まして濠洲の非支島へおもむきました。抱儈の友達も同島へ往つて居るものが病氣の爲め。同船に乘り込みました。太平洋の波は靜かだと申せども。年の二月に至りますと隨分靜かでゐりません。滊船アフガン號は此年の最惡の時期にあたりて濠洲非支島にむかひましたのであります。在島の日本人が病ひに苦しむと聞きまして。同島の日本人保護者たる吉佐會社は。百難を事ともせず。病人を迎んとして分秒の時間をあらそひ。急命を下して横濱を解纜したのじや。扨明治廿八年一月十三日にいよ〳〵解纜しましたが。海上靜かな日とては更になく。

黒雲怪雨常に波上に張りて。晝は雹を打つの涙が激して帆を洗ひ。夜は窓を叩くの水奔りて夢魂を驚ろかし。月牙へて千島友を呼び。風怒りて信天島翼を收めて鳴く。麻里亞那の沖に出づるに及びて。風浪の暴悪なること。うたゝ人をして水上の苦を思はしめました。加呂林群島を左りに見たるは。廿一日の頃であつたが。いつか難難を經過して。同島に着きましたは三十一日でありました。在同島の日本人は。アフガンを待つこと一日千秋も曾ならずであります。船は喝采に迎へられて。二月四日に日本移民を載せて同島ランペサ港を出帆しました。十五晝夜の間は無難に進行しましたが。十九日には風甚だ悪しく。此夜怪雲海上をおほひ。黒暗々の中に百千萬の燐火明晃々として迸ばしり。日中は日中で暗中白波のありさま青く光りを發して。宛から鬼火を散ずるに似たり。波奔騰。船漂搖。實に名狀することが出來ません。大島を去る南み二百哩にして西北風いよ〳〵吹き荒れ。舟子は此風の容易に靜まらぬを說きて。人はます〳〵苦しむ。廿日の夕方に至りて晴雨計は下降して三十度を下りました。船の動搖は既に一定動搖を離れまして。縱横不規則の動搖となりました。忽ちにしてア

ロペラの空轉を聞て。身は前の方へ倒れんかと思へば。又忽ちにして帆檣は水上を叩きて深く水中へ入る。此の如くにして廿一日の眞夜中に至り。人も我も昏睡に陷りました。是れ風波の少しく緩るみたるに依るものなるが。時に又船室の物品が踊り出し。身は九天の上に刎ね上げられしと思へば。又九地の底に沈むが如し。船底の荷物は轟々と觸れ合ひ。轟々と音して其凄ましさ言はんかなし。洗動物は汎濫して其臭きこと鼻を掩ふに堪ゆ。室内の窓かけは天井へ密接して踊り翻がへり。凄然たり慘然たり其樣名狀することが出來ない。忽ちにして船員は大警報をいたしました。船底に穴が出來て。水が盛んに進入して來る。ア、乘込の人々の運命は最早や瞬間に迫つて來た。一同最早や顏色がありません。船長は事務長を呼ひまして。滿面憂ひをふくみなから。霰のやうな涙を流して申しますには。總ての狀態は我等の運命にかゝはります。願はくは諸君に於ても確とお覺悟あんことを命じました。イザと言はゞ一同起立して。陛下の萬歲を三唱して。靜かに海底に赴むかんと。一秒一分を待ちて皆な〳〵覺悟を定めた。如何に心ろ細いことであらふ。

ア、天地悠〳〵我と關せず。我等は水底に葬むられて。千秋萬古人の知ることなく。波沼々〳〵風轟々。悲慘の極たゝあるところは海底か。廿一日午後四時最期の時は來たれり。船は激しき音を發して三四度飛びあがれり。暗礁に觸れたるものならんと。一同起立して陛下の萬歳を唱えんとしたるに。船は右舷に傾むきなから。尚ほ進行いたします。暴風暴雨と戰かつて其日も暮れた。如何にしけん爆竹に宛も似たる大響か耳をつらぬく。走りて外面を見れば帆が裂け破れて雨と戰ふの音なり。二十二日の朝になると浸水を排除せんとて一同舶の船底に赴くに石炭の中に潮水浸入して。黑溟を打つて居る。最早五分間を待たば沈沒に垂〳〵すべし。總がゝりで必死となり。先づ材木を擧げ喞筒をかけて水を排す。水は先づ避くるを得るも。燃料の石炭は最早や五十噸に過ないといふ。去れは今は二日間に足らざるなり。何れにしても死なねばならぬことは。目前に知れ切つて居る。石炭つきなば船は一哩も進行することが出來ない。行〳〵波上に漂ふて居る時には。食料も欠乏すべし。沈沒するか餓死するか。二つに一つは免かれない。そうして七尺以上もある浸水は迚ても排除しをわることは。先つ絶

望といはねはならぬ。然れとも總員必死の盡力。一時間ことに其度を減する樣子。廿三日の朝になりて機關室に至り見れば。一等機關手は火夫となりて頻りに石炭を釜の下へ投げ込んで居る。二等三等機關手は銘々鋤をもつて石炭庫の中の浸水四尺にも及ぶ中に居て。僅かに一塊二塊の石炭を採りてこれを一等機關手に渡す。船は一秒一分毎に蒸氣力を減して。進行の度を段〳〵と減ずる樣子。危ふきこと實に幾々な次第じや。然れども浸水は段〳〵と溜れて來て石炭も充分に用ゐらるゝに至つたから。一同思はず各自の運命の强きを祝せざるはなかつた。斯くて此日は稍々平穩であつたれば前夜八丈島に避難せんといふ提議もうち消されて神戸直航と定まつた。廿四日熊野沖にかゝると忽まち内地を吹荒らしたる惡風に逢ひ。今は根氣もつき果て只〳〵死を待つの覺悟より外なし。而れども時々刻々は其危急を逃れて其日の夕方に至り無事に神戸に着したるは。實に僥倖なことであつた。今顧りみて前日の事を思へば。覺めて居たのか夢で居たのか。其境ひがつきません。惡雨惡風狂濤暴波の聲。尚ほ今ま耳の底を去りませんと。おそろしきありさまをかたりました。どうです。無常を感ぜられま

したかッ。我〳〵は常に此やうな無常と戰かつて居るのですよ。それを知らないものじやから。斯樣な目に逢ふと忽ち驚ろく。我れ〳〵人間と生れて。此無常の中へ押し出したら。厭やでも應でも無常と戰爭をせねばならん。サァ戰爭するには勝つといふ目的がなければならん。其勝つといふ目的は。即はち此無常の風に動搖されないのじや。茲が佛あれば生死なしと勝算をつけるところじや。無常の風に任すること勿れの一句。まことに諸佛如來の大慈大悲なる御誓願のある所であれば。生死事大無常迅速。時人を待たず。此會座の中も御同樣に無常の大敵に攻められて居るのじや。去れば此無常の大敵と戰ふことは諸佛如來の妙法より外には善き戰具はない。銘々覺悟して生死無常の大敵に勝ち煩惱菩提の本懷を遂ぐるのが肝要であります。惰餘り長座になれば今日は是迄と致します。

◎第五席（第三節）

無常憑み難し知らず露命いかなる道の草にか落ちん身已に私にあらず命は光陰に移されて暫らくも停め難し紅顏いづくへか去りにし尋ねんとするに蹤跡なし熟〳〵觀する所と往事の再び逢ふべからざる多し無常忽ちに到るときは國王大臣親族從僕妻子珍寶たすくるなし唯獨り黃泉に趣くのみなり己れに隨ひ行くは只是れ善惡業等のみなり

サテ前席におきて無常の有りさまをお噺しいたしましたが。世の中の萬事萬物はすべて無常ならぬものはなけれど。今はこれを死ぬことにお當へなされ。此の命ちを露にお當へなされて。わかりよくお示し下さるのじや。無常のたのむに足らぬことは。必竟かやうなわけじやが。其無常の中に居る此命は何處の道ばたの草におちるであらふ。身已に私くしにあらず。自分で自分の身躰を何樣することも出來ん。何程年を拾ひたくなうても。厭でもおうでも年を取つてゆく。少しでも休んで居る間はなく。お正月が濟んだとおもへはまた早やお正月じや。奇麗な娘じやと呼はれて。何處からも此處からも嫁の口か多かつたが。昨日ふの夢と消えて仕舞つて。今は髮も飾りもなく子供五六人も育てあけて。紅顏はいづれにか去りにし。たづねどもあともなし。能く〳〵

おもへは過ぎ去つた光陰は迚も取りかへしがつかぬ。サア死ぬことになつて來る。可愛の子供も尊い父母も。如何に財がたんとあつても。何の役をもなさばこそ。唯ひとり黄泉へいかにやならん。其時のお供になるものは。唯善と悪との業法はかりじや。譬へは火事に逢ふたやうなものじや。金殿樓閣眼ばゆきまでに美麗であつたが。昨夜の火事で。跡なく焼けて仕まい。殘つたものは灰はかりじやとは。何となさけない有樣じやないか。丁度此やうなことゝ同じ噺しで。おのれの造つた善やら悪やらの種が殘るじや。昔し美濃の國土岐郡に開元院といふ寺がありました。こゝに佛智といふ盲目の人が寄宿いたして年來住んで居りました。常に人に申しますには。われ盲目にしていと貴とき日月の光りさへ拜むことが出來ぬ。是れ過去の因によるであらふ。今生に其果を得たるに違ひない。今よりは善事を修行いたして。必らす來世を助からんとおもひ廻らせども。身まづしくして心ろにまかせず。殊には盲目のかなしさには。何をするにも不自由でかなはぬ。かなはぬながらも初一念は徹したいものじやと。かやうなこゝろがけから。諸方の信者にすゝめて。鎮守堂と門とを建てました。元來盲

目の此一擧。なか〳〵たやすいことではありませぬ。實に寢食もろく〳〵いたしませんで多年の苦辛をつみ。終にこれを成就したのであります。斯くて天年を果しましてこの世を辭しました。里人等これをあはれみまして。うちつどひて葬送萬事をすましました時。其中に一人ありまして。佛智か生前の大功德は筆や口には述きれないが。かやうな善人こそ未來は善所に生るゝじやらふ。物は例しといふことあり。お寺の坊さんが因果〳〵といふて。常によく言はれることじやが。佛智が何處へ生れるか一ッやつて見やうじやないか。若しも佛智が生れた先きが分ッたら。此方等も因果の道理を信じて。那の世への土產を拵らへやうではないかと。少さき紙に美濃國開元院の佛智と記して。これを確かりと握らせて一堆の土となしましたが。丁度佛智が身まかりまして十月ばかりも立つといふと。信濃の國諏訪の郡諏訪村といふところの最と有福な人であつて。指折りの大盡じやといふ龜右衛門といふものが尋ねて來て。この御寺に佛智といふがありましたか。いかゝでありませうやと問ひますから。それは仰せの通り佛智といふものがありまして。昨年の何月何日に身まかりました。何事の用ありて

これを尋ねたまふやと問ひ返へせば。龜右衛門の言はるゝには。近頃おのれが妻なるものが男の子を產みましたが。その見左りの手をひらかず。ハヲ不審しさよとおもへども。無理にひらかすわけにもゆかず。スルと七日を經ちますと。獨人でひらきましたから。オ、能く手をひらいて呉れたと喜こんで中を見ますると。何やら握つて居る樣子。取りあげてこれを見ますと。美濃國開元院の佛智とありますから。去らば是なるにやと尋ねてまゐりました。有增しかやうな次第でと。一伍一什を聞りますから。其由里人に告げまして。龜右衛門に引き合せ。始めて因果の道理を知り。爰がひそはらして皆な〳〵佛法に歸依したりといふが。實に此やうな因緣と同じことで。死んでゆく時のお供になるのは。善と惡との業因ばかりじや。じやから善因善果惡因惡果といひまして。善惡の業に順ふて輪廻することなれは。無常の風は時を嫌はず吹き來る生の緣の盡なれは。同じ業因に順ふことゝして惡業に引かれて惡趣に生ずるの苦報なるは。今の因緣にて知らるゝことなれば人々急ぎ善根を植へ功德を積で。生死透脫の本懷を遂げ。自未得度先度他の誓願を起さねばなりません。返す〳〵も信心堅固にして無常の風に誘はるゝ時に。後悔のなき樣に。平生の用心が第一であります。

◎第六席

（第四節）

今の世に因果を知らす業報を明らめす三世を知らす善惡を辨まへさる邪見の黨侶には群すへからず。

前席にお噺しに及んだ次第を。おうけなされて。若しも今の世に因果を知らず。業報を明らめんで。ナニ業がのこるの果報が何樣だの。其樣なことがあるものか人間はいつまでも人間で威張つて通るは。犬や猫になつてたまるものかなど。斯樣なことをいふものには交はつては相成らぬ。因とは種。果とは實のことじや。種があれば生へて繁つて實を結ぶは。世の中の草木に考かへてもわかるじやないか。業報とは種次第で何樣な實でも結ぶことじや。三世とは過去現在未來のことじや。言葉をかへて言つて見ると。昨日と今日と明日のことじや。モ一つ言へば先刻と今と後刻じや。此三世にわたりて因果が立ち。業報が立つのじや。此の道理は今古いつでも變ることがない。

然るを邪見してヨコシマに見て。信ぜんからこれを一ッの闘提といひます。又信不具といひます。かやうなものに交はると。矢張りかやうな考へになりますから。謂ゆる朱にまじはれば赤くなるの譬へで。よくないことじやとお呵りになりますのじや。譬へば御機嫌を損ねぬ爲めに。時〳〵おべッかをするやうなものじや。始めは心ろにもなく。其人の好く道を眞似して見たり。習ふても見たりして。終には自分が本ものになるやうな鹽梅じや。獵が好きじやといへば此次の日曜にはお供をしますと。有りもせぬ苦しい錢を拵らへて。鐵砲をかひもとめて鳥り獸のを打ちにゆく。終には面白くなつて獵師もよろしくになつて仕まふ。甚はだよろしくないことじや。じやから撥無因果の惡き人をば成丈避けんければならぬ。怨親平業といはるゝ佛けさまたちでさへも。邪見をおこすやからには群すべからずと敎えたまふではありませんか。明治二十九年五月十七日の讀賣新聞に。男の中の一人娘と票題を付て。面白い噺しを書きさした。其文に曰く。小石川水道町に住める山川某と呼ぶ紳士。男の子に富みて年はいづれも二ッ違ひ。人も羨む程數多かる中に。萬綠枝頭一輪の花と咲出でし一人の令嬢千

佐子は。早や十五の春を迎へて。先つ頃よりお茶の水橋向ふの學校に通ひけるが。千佐子元より悧發の質眉目容貌さへも。醜からず。況いて女の子五人も有ちたらん人の事を思へば。懦弱の袖のみにても一疋の友禪は。ズウ〳〵に裁り裂かねばならぬ道理。左りとは一人娘の世話の輕きよと。子煩腦なる兩親が。慈愛に光る服裝は何時も綺羅びやかに。學校の往來にさへ人の目を惹くほどの風情なれど。可惜美玉に一點の疵と云ふは。男兄弟の中に生育ちしことゝて。幼き時より男の爲なる遊技を好み。或は竹馬に跨り或は庭樹に攀ぢ。果てはフートボール戰爭事なぞに身を入れて。をさ〳〵兄弟に瞠若を取らず。其の言葉使ひさへ暴々しく。君と呼び僕と呼ぶは愚か。折に觸れては此ん畜生。ザマー見やがれなど〵。野卑しくも不作法なる言葉の出づるを。母親氣の付くごとに嚴しく之を叱りもしつ。誡めもしつるほどに。今は千佐子自身が年齢の効と共に。ヒタと其の遊戯を愼み。言葉使ひにも朝夕意を用ゆるやうになりたり。去れども深く染みたる積年の習慣は。中々其の病根の除れぬものにや。此の頃學校よりの歸途。江戸川の畔に差掛りける折しも。十四五間も前つ方を二人連れにて。通る

其の中の一人の書生の。足駄踏かへしてパッタリ轉がるを見て。千佐子後より覺えず高聲揚げてヤーイと嘲り扨は笑ひ出さんとせしを。ハッと氣付きて我から口を抱へ飛んでもなきことを言ひしものかなと。俄かに恥らう心出でしが。件の書生は彼言葉を聞くより千佐子を振り顧て。ハッタと睨み何んだ女の癖に。生意氣なことを吐すなと云ふ聲聞きも了らず。千佐子は逃るが如く横町に隱れ。直に辻車に飛び乘りて。我家に歸りしが。母親は千佐子がけたゝましき素振を怪み。如何にせしかと尋ねれば。今は包むに由なく。實は斯く〳〵と有りし次第を語れば。母親ッンとして。夫れだから眞實に困るよと。酷く小言をいはれたるを。千佐子は如何にもして直さんとて。日々學校の作文には。おのが身の修身ばかり書き居るといふ。サテかやうな道理のもので。實に朱に交はれば赤くなるから。決して邪見な人には。交はらぬやうにするがよいじや。業因の善惡は過去今生の作業の次第に依ることなれば。祖師の戒しめたまふことは斯く御叮嚀に。善を勸め惡を避けさせたまふたのじや。必ず〳〵用心堅固に惡慣習のつかぬ樣に朝に夕に。心掛て諸佛如來の冥護を仰ぎ奉り。一念の善は萬劫の善。一

念の惡は千生の惡。善友に近づき惡邪見のものを避ること毒蛇を恐るゝが如く致さねばなりません。此御叮嚀なる御垂示を努をろそかに思ひて邪見人に近づきてはなりません。銘々屹度發心して御垂示に順はねば證得菩提の本懷は遂げられませんぞ。返す〳〵も決定信心が肝要であります。

◎第七席（第四節）

大凡因果の道理歴然として私なし造惡の者は墮ち修善の者は國る毫釐も忒ばざるなり若し因果亡して虛しからんが如きは諸佛の出世あるべからず祖師の西來あるべからず

サテ朱に交はればあかくなるで。邪見なものに交はるといふと。ドーも能くない癖がついて。中〳〵取り除くに大骨折じゃ。それで取りのぞけて仕舞れば結構じゃが。多くはそれを能いことに思ッて。生涯あかりを見ずに仕舞ふものじゃ。じゃに依ッて恐親平等と仰せらるゝ佛けさまが。かほどまでにお氣をつけて下さるのじゃから。交は

らんやうにして。修證義にお示し下さるおもむきを。能く〳〵承知せねばならん。先づ能く考がへて見られよ。因果の道理ほど惜かなものはなく。僞りのないものはない。ゆゑに御文に。大凡因果の道理歴然として私しなしと仰せらるゝので。歴然とは「あり〳〵と暗ますところのなきこと」である。悪事を働らくものは悪の實をむすび。善事を修むるものは善の實をむすぶ。それからこの。善事にいたせ悪事にいたせ。必らず身におこなふて。形ちにあらはれて。是れが善。あれが悪と。人の目に見ゆるとばかりでない。人の目に見えぬのみでなく。おのれの目にも見えず。唯一のおのれの心ばかりが承知して居る。決して外にあらはれぬものでも。寸分のたがひもなく。歴〻とあらはるゝものじやから。私しなしじや。遠慮も會釋もない。親じや勘辨をしてやるの。女房じやから許してやるのと。そんなお情けは決してない。毫釐も忒はさるなり。毛ほどでも用捨はない。もしも此因果の道理がないといふて。それで世間を押通せるならば。利發な怜悧な。大智慧な大覺な。最早や此上のないといふ。最尊最上な。佛菩薩をはしめ。祖師方のお骨折はない。何にも御出世なさらんでもよろしけれ

ど。天竺あたりから遙〳〵と。お出かけ下さらんでもよろしい。然るに御出世下さうたり。西來なされたりして。口が酢くなるほどおさとし下さるのに。それを熱だの潰れたのと。自分勝手な利屈をつけて。其おほせに從がはれぬとは。何たる因業なものであらふ。譬へば大きな板を肩にのせて往來を往くやうなものじや。自分の目に見ゆるほうは確かに見認て知つて居るけれども。見えない片々の方は知らないから。人かの町は兩側共に奇麗な町だと云ふけれども。おのれは一方外ないと思つて。イヤ那の町は片側はかりじや。即はち那の町は片側往來で。右のかたには人家はないと。何と言つても承知せぬやうなものじや。これを名けて擔板漢と言ひます。何と馬鹿〳〵しいものではありませんか。造悪のものは墮ち修善のものは昇る。毫釐も忒はさるなり。少しも油だんはなりませんぞ。昔し殷の末第二十九代目の君主を紂王と申しましたが。位につかれましてから大ひに矜りおごられました。妲妃の美貌に迷はれまして。醋くこの女を愛されました。鉅鹿といふところに回り三十里の庫をつくつて米穀を積み込み。朝歌といふところに高さ二十丈の臺なを作りまして。財寶をたくはへ。世の

歎き悲しみ人の憂ひ苦しむを知らず。只々妲妃の申すとほりに。何事でも致さるゝといふ君さまじゃ。沙丘といふところに。周り一千里とある廣大もない苑をつくりまして。其中にいろ〳〵な臺閣をつくり並べ。前に池のやうに酒を湛へさせ。酒の糟をもつて土手を築せ。林の枝にはいろ〳〵な獸の肉をかけさせて。其中に男女の君いものともを六百人裸かにして入れ置き。長夜の宴といふことを爲して。晝るでも夜るでも嫌ひなく。亂行なあそびをさせ。虎舐牛飲とて肉は手にも取らす林にかけたまゝに喰らひ。酒は盃を用ゐることなく。口を差よせて牛の水を飲むやうにして飲み。亦たは炮烙の刑といふことを始めて。南庭に五丈の銅の柱を二本たて。上に鐵の繩を張り。其下に炭を起して。罪人の脊中に石を負はせて。繩のほとりに責めのぼせ。渡らせる罪人が力ちつきて火の中に落ちて焦死するのを。妲妃は見てよろこび臭ずるから。後には咎なきものまでも。妲妃の心ろを慰さめんとて。捕へて此刑に行なひました。だから野人村老。毎日〳〵此害に逢ふもの幾人といふ數が知られません。此時周の文王がまだ西伯といはれましたが。此事を聞かれまして。天下の歎き亂世のもとゐ

なりとて。吐息して痛心されました。スルト崇侯虎といふ人が悪い人で。此を紂王に言ひつけましたから。紂王は怒られまして西伯を捕へて。羑里といふところの獄舍へ入れました。スルと又西伯の家來に閎夭といふ人があつて沙金三千兩。大苑の馬百疋美人百人を紂王にたてまつりまして。西伯の囚はれをゆるさんことを願ひました。西伯はお蔭をもつて歸りましたが。尚ほ人民の燒き殺さるゝを悲しみまして洛西の地三百里を妲妃にたてまつりまして。砲烙の刑を止めて貰らひました。妲妃は尚ほも欲心が止まないから西伯に武を練る官を授けまして。そこらこゝらを掠き騷がせるつもりでありましたが。此時は早や西伯已でに渭濱といふところの陽に大公望といふ軍師を見付けまして軍法の太師といたされ。德をおこなひ仁をほどこし。天下皆な其德澤に歸します。其子の武王といふ方も紂王を憎んで居りますから。つゐに殷を討ちまして紂王を責め亡ぼし。目出度周の世といたされて八百年を保ましたとが史記といふ本に書てありますが造悪のものは墮ち。修善のものは陞る。毫釐の忒ひもありません。因果歴然として斯の如くなれば。銘々が一日の修業。一時の善根も。斯の如くなれば凡夫

の今日こそ成佛得道の修行時であれば因果の理を信じて。念々に昇沈の道理を辨まへ善惡の果報を知りて。佛菩薩の敎により祖師のお示しに從ふことが肝要であります

◎第八席（第五節）

善惡の報に三時あり一者順現報受二者順次生受三者順後次受これを三時といふ佛祖の道を修習するには其最初より斯三時の業報の理を倣ひ驗らむるなり爾わらざれば多く錯りて邪見に墮つるなり但邪見に墮つるのみにわらず惡道に墮ちて長時の苦を受く

因果を信じ業報をあきらむるには。先づ三時業報の次第を能〳〵呑みこまねと。佛法のお斷しがわからぬ。顏回が善道を行うたるにも拘はらず。貧乏で若死をして仕舞い。盜跖が惡道を働らいたにもかゝはらず。暮しむきが都合よくて長生をするほどの趣むきがわからぬ。じやから最とも先きにこの三時の業報を知らないでは多くあやまりが出來て來て。闡提の仲間に入ります。併し闡提で濟めばよいが。惡道とて地獄餓鬼畜

生修羅に墮ちて長らく困苦をうけねばならぬ。それで此三時業報をお示し下さるのじや。一ッに順現報受とは。今の生に造つたことか。今の生でうくることじや。譬へば今とし植えて今年收める稻のやうなものじや。二ッに順次生受とは來世にうくる報ひのことで。今生を仕舞つてから。次ぎの生にうくるのじや。譬へば今年のうちに種を下して。來年に收める麥のやうなものじや。三ッに順後次受とは來々世又來々世千歲萬歲後の後でもうくるのじや。譬へば今年植えて來々年から市へ出さるゝといふ。ック芋のやうなものもあらうし。今年植えて七八年も經つてつから生り盛る柿や蜜柑のやうなものじや。すべて罪の輕重に從がつて拘留とか懲役とかあるやうな鹽梅で。爲したことは屹度うける。是非とも一度は來るのじやから。この樣子を大地を打つ槌は外るゝとも。此報ひは屹度あるといふのじや。丁度職人が働らくやうなものじや。今日參十錢の稼ぎをしたから。下げ錢で今日とるか。扨は又月給で月末にとるか。又は月末にとれんでも盈か暮には屹度とるやうな次第じや。佛俱舍論をお說なさるゝ中に。十二因緣をお說きなされてあるが。これを車のめぐるに譬へて。無明。行。識。名色。

六入。觸。受。愛。取。有。生。老死。の十二をお示しじゃが。此無明が始めで老死が終りになつて居るのは。始めのところが直ぐ終りで。終りのところが直く始めである。シテ此十二の中。無明と行との二つは前生の二因といひ、識名色六入觸受の五つは現在の五果といひ愛取有の三つは現在の三因といひ。生と老死との二つは來世の二果といふて因が果となり果が因となりまして。あともさきもなく。常にグル〳〵と廻るのじや。ソコデ無明といふのは智慧もなく分別もなくいたして。いつまでもさとることの出來ないありさまをいふので。くらやみのごとくなりし前きの生をいふのじや。夫から行といふのは前生に無明であつたから。無明のところより悪念をおこして。煩惱にからまれ。さま〳〵の悪るさを働らいたことをいふのじや此二つが前生の因で。そうして此世へ生れて來たのじや。次に識といふは前の無明と行とを種にしまして。今生の母の胎内に宿るといふのじや。名色とは胎内に居りて肉づくことをいふのじや。次きに六入とは六根のことで目鼻などが出來揃ふことじや。觸とは生れ出でゝいまだ苦樂の分境も分らず。暑い寒い痛いかゆいを知るまでのことじや。次に受とは目に見る物は欲しかりて直ぐ取らふとすれども。更に執著のこゝろなく其座かぎりの有りさまをいふのじや。これを五果といふ。これが前生に無明と行との種を蒔て。今生に受けた果であるのじや。故にこれを五果といふ。次に愛とは三四歳の頃ろより物に愛欲を生じて來ることをいふのじや。取とは八九歳の頃より貪欲もだん〳〵とふかくなりて物を取り求めんと工夫することじや。有とは十四歳のころより煩惱を盛んにして。諸〳〵の悪を作りまして。當有の果を牽くことをいふので。これが未來の種の熟して來る間だなるゆえに。現在の三因といふのであります。次に生とは今生にありながら未來の生をうくる約束の識名色愛取有などの次第まで。みな備はることをいふのじや。老死とは次の生にうくる身柄も定まり。死ぬる年死ぬる日までも定まりて。次の生へうつりゆくことじや。ゆえにこれを來世の二果といふのじや。然れば前生は前々生の果といふことも分かりて又來世は來々世の因といふことも分る。此のごとく車のまわるやうに始めもなく終りもなく。因果轉々するのじや。誰人か此區域をぬけられませうや。じやから善根を植えて佛道を修行いたし。決して邪見などおこして。因果をのゝしるが如きは。

長く悪道の苦しみを受けますから。能く〳〵因果の道理をあきらめて下さい。シテ又斯く因果の道理は歴然として昧すことはありませんが。兎角に凡夫の悲さには三時業の次第を知らぬ所から。性質の優しきものは常見の外道となり。性質の猛きものは断見の外道となり。常見の者は世界はいつも同じことに思ひ。断見の者は死後の因果を恐れぬ様になりて。世界を常住と思ふものは欲に足ることを忘れて悪を作り。死後の因果を恐れぬものは我慢に迷ふて非道を踏み邪見断善根の衆生となりて。地獄受苦の業因を造ります。實に此の三時業の道理は大切なことであれば高祖大師も正法眼蔵九十五卷の中に三時業のことを殊更に叮嚀に示されて。之を三時業の卷と申すことであるが。各々撥撫因果断善根の難化の衆生とならぬ様に。此一節の道理を深く明めて生々世々の光明と致さねばなりません。偖此段のことは一朝一夕のお話で盡されることでなければ。又の因縁をまちてお話を致すことゝ致して先づ今日は大躰のことだけを申して置きます。返す〳〵因果の道理を信ぜられよ。

◎第九席

（第六節）

當に知るべし今生の我身二つ無し三つ無し徒らに邪見に墮ちて虚しく悪業を感得せん惜からざらめや悪を造りながら悪に非ずと思ひ悪の報あるべからずと邪思惟するに依りて悪の報を感得せざるには非ず

サテ此席で總序をおむすびに相成るのじやから。當に知るべし第一節よりのおもむきを知りて見よ。今生ほど大切な命はないぞ。それが二つも三つもあるのじやない。只ッた一つ外ない此からだを。徒づらに空しく日をおくりて。邪見の信不具なものに均しいやうな。下らぬものになつて仕舞ふて。悪業を働らいて悪報をうけるやうでは。實に惜しいことではないか。悪るいことをいたしつゝ。悪でないとおもふて居つて。ナニ報ひも罪もあるものか。おれが身躰でおれが好なことをするのじやと邪思惟して曲り屈つた考がへを起すに依つて。悪の報をかならずうくるである。若し此道理がなかつたら。ソレこそ悪るいことをせぬものは損じや。ところがそれが妙なもので。他

から言はんで自分で白狀になることが多い。譬へば悪るいことをしたものが石地藏に向つて何を言ふかとおもへば。モシ〳〵地藏さん。今おれが人殺しを仕て金を奪つて來たが。お前さん饒舌ちや厭だよといふと。地藏さまがおつ仰るには。イヤそれは大丈夫だ。この私は石地藏じやから。言へと言つても決して言はないけれども。お前の口から言はないやうにしろと。かやうに宣まふたといふことがある。サアこれが自業自得じや。二つも三つもない身躰を悪業に働らかせてはつまらぬじやないか。昔しもろこしの南北朝のころに。秣陵といふところに大した親不孝なやつがあつて其名を朱緒と言つた。親不孝も世間に澤山あるが。こんな親不孝なやつはたんとない。その母久しく病みわづらひまして。火箸にぬれ紙といふやうに疲せやつれましてあるけれども。朱緒は藥り一劑さしあげることをしない。死にそこないの業つくばりのと。勝手なあくたいもくたいをぬかし居る。或る時母親は朱緒の前へ兩手をつきまして。重きまくらを離れ。枯れはてたる聲をいだして。あらふことか血を分けたる母親が。怜れや。われ久さしく病みほうけて今はあすにも知れなくなつたから。お前が常にいふて

呉れた。業つくばりも死にそこないも。モー〳〵長くはあるまいから。今生のおもひ出に。たつた一ッの願いがあるが。どうぞ叶へてたもるまゐか。朝夕の食ものも。少しも欲しくはおもはぬが。どうしたことか今日は松茸を喰たいとおもつたら。矢も楯もたまらない。どうか喰さして下さるまゐかといへば。朱緒はオヽそうかへ。おれも何ぼ親不孝でも今日をも知れない命ちと聞ちやア。ッッとしても居られまい。松茸はたべさせたいが。今は松茸の時刻でない。おまいも病みほうけて。松茸の頃を忘れてお仕舞と見える。何かまつと甘いものをかんがへて御覽よ。外にいくらもあるじやらふと。常にかはりし挨拶じやから。母も大層よろこばれて。オヤ〳〵そうかい。今朝も寢て居て聞て居ると松茸賣が過つたやうじやから。ッヒそうおもつたのじやが。デはわたしの聞きそこないか。年を取たり病んだりすると。いろ〳〵のことが聞こえてならぬ。時刻でもないのに喰べて見たいなどゝいつておまいに心配をかけて済まなかつた。堪忍して下されやといへば。朱緒の妻はあるにもあられぬおもひ。ナセとんなに親不孝な夫であらふ。長くもあらぬ一人の母親に。差上たらよからふものを。妾

しがかげにまわり日向にまわり。何ぼ孝行をしてあげたうても。お錢はあづけて呉れるでなし。また呵られては夫への道がたゝぬと。厨のほうに泣て居りましたが。私かに夫を呼びまして。今朝松茸賣が見えましたは。實に母さんの聞かるゝ通り。眞成のことでありましたが。ながくもない一人の母親。妾しが市へ往つて見てまゐりますから。どうぞ差上げて下さりませと。涙だと共にたのみますと。朱緒は何とおもひましたか。そんなら往つて來て呉れといつた。妻はよろこびに堪へられません。早速市へおもむきました。スルと朱緒は母親の前に來て。おつ母さん。今妻を市へやりましたから。何か見てまゐりませうから。少しの間だ待つておいでよ。オヽそうかい。それは賊にありがたふと。禮を言ひつゝ待つて居る間に。自分も外へ出かけまして。一升徳利をぶらさげてまゐりました。其中に妻もかへつてまゐりましたから。どうだ松茸があつたか。ハイ松茸は賣り切れて仕舞ましたが。滋茸ならありましたが。おつ母さん如何なものでございませうと。姑とめに聞きますと。オヽ其滋茸が何ほ好物じや。それをたべさして下されと言はるゝから。妻は又〳〵出かけてまゐりました。間もな

く歸つてまゐりまして。母の望みの通り。能く煮て糞のにこしらへて。サアおつ母さんめしあがつて下さいと。母親へまゐらせんといたしまするを。夫の朱緒はこれをとゞめて。コレ待て。總じて茸といふものは。甚だ毒の多いものじや。息才な人でさへも時〳〵は毒にあたつて。苦るしむこともあるものだ。苦しむばかりで濟めはよいが。二つとない命を取られることもある。それを病みほうけた母親へすゝめるとは大した不孝ものじや。ドレおれが毒味をして其上で差上げるから。此方へもつて來い。馬鹿ものめと叱りつけて。おのれの手許へひきとりました。いつの間にやら酒も燗をつけておいて。母親の眼の前で。ムシヤ〳〵と糞ものを賞翫いたします。妻は泣きたをれて仕舞ひました。朱緒はどこまで不孝な奴じや。母親の口を干してもおのれの腹を肥やさんとする不孝の骨頂。妻か折角世話をして鹽梅した糞ものを。母の眼の前で見せて置きながら一人して賞翫するこんなやつがどこのいづくにありませう。母親にはすこしも甜らせもいたさぬ。母親はこれをつく〳〵と見つめて居りまして。さても〳〵世の中には。自から飢を凌ぎてさへ親をやしなふ人もあるに。たま〳〵好んで

食べたいとおもふたのに。わしの口へは少しも入れさせず。奪ひ取つておのれの口をあましとするとは。世間廣しといへども何處の里にかありませうぞ。それに嫁が折角の丹誠。わしは死んでも忘れぬぞや。斯る不孝の子を持つたも。如何なる前世の報ひなのか。天道まことの慈悲あらば。何とぞ怜れの不孝の魂しゐ。孝行の魂しゐと入れかへて。人間並みにしてたびたまへやと。心ろにこめて天道をいのり。悪い我が子と知りながらも。見かぎり捨てぬが親の慈悲。何とぞ心ろの直れかしと。神に祈り佛けに念じて。泪をうかべて見て居りました。朱緒はよい心持に酔つて來て。オヤ〳〵いつの間にか皆んな喰べて仕舞つた。アハ、、これはおつ母さん相濟みませんと。滅らず口を叩きながら。一滴ものこさず甜つて仕舞ました。爾るところに不孝の悪人。現罰たちまち至りまして。みる〳〵うちに腹さしこばりて來る。唇びるは晴れて來る。大熱おこりて悩亂すること凄いやうじや。手足をもがき汗をながして。胸がやける喉がこげる。アラ苦るしやと悶絶して目口鼻から血を出して苦るしむこと甚だしい。一日一夜絶へ間もなく苦痛して。翌日ついに狂ひ死をいたしました實におそろしいことではありませぬか。二つなし三つなし。大切な此からだを。邪見のためにおとしました。これが悪の報を感得せざるにはあらずといふのじや。悪業の恐るべきは朱緒の現罰で解りますが。唯だ悪業を作らぬ計りては人間に生れて佛法に逢ひし甲斐もなければ。善根を植て。功德を積み。發心修行を心掛け諸佛如來の加護を得て。生死の苦を脱し。生死に自在を得て。報恩行持の道を行ひ。折角の人身を悪鬼に捨ぬ樣に用心することこそ今生の勤めなれば。忘れても悪念を起すことなく佛祖の訓戒に順ずるのが肝要であれば。朝夕に大恩教主釋迦牟尼佛の御誓願を念じ。祖師の恩德に報ゆることを致さねばなりません

◎第十席（第二章懺悔滅罪第七節）

佛祖憐みの餘り廣大の慈門を開き置けり是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり人天誰れか入らさらん彼の三時の悪業報必らず感すべしと雖とも懺悔するが如きは重きを轉して輕受せしむ又滅罪清淨ならしむるなり

サテ此賛題は。前の六節までにて佛法の道理が。知れたうへは。自身がなにゆゑに此人間に生れて來たか。何が目的であつたのか。生を明らめ死を明らめん爲めに願ひに願ふて此世へ生れて來て。最勝な人間に身を受け。逢ひかたき佛法に逢ふて。三世因果の道理も知れ。業報のおそろしきも知れて見れは。無始劫來此身かつくりためた罪のあるのも知れたであらふ。ソコデ今席から佛になる支度に取りかゝるのじや。サテ受戒入位をして佛けの中間になるには。身に罪のあることを承知して。それを懺悔して此身躰を清淨に致さにやならん。ソコデこれを發心門と名くるのじや。懺悔して罪を滅して仕舞ふと言つても。何樣してよいかわからぬから。已れに罪のあることを知つたなら。それを悔ひて詫て仕舞へよ。佛祖は我れ〳〵の爲めに憐れみを垂れさせられて。廣大とて限りの知れない大きな門を開かせられ。サア茲から這つて來いよ。是門は一切衆生。ありとあらゆる生あるもの。這入と悟りを開かせんが爲に開けはなしに仕て置くぞよ。汝等本より此門の中に入るのがいやで。そちら向いて居るにより つて、態〳〵茲に門かあると敎えてやるのじや。此門へ這入つて見よ。サア來いよ天

上の身でも人間の身でも。又は四趣の惡道の身でも。皆一同に這入つて來いよ。人天誰れか入らざらん。扨此門へ這入つて見ると。どんな功德があるといへば。彼の三時の惡業報。必らず感ずべしとはいへども。ア、惡るかつたとあやまるに於ては。重罪も轉じて輕減と輕くうくるし。地獄の苦も修羅の苦に負けるなどゝ。餘門他宗でさへいふのじやが。我宗の懺悔は事理の二懺悔あるけれども。つまり懺悔でよろしい。只惡るかつたと懺悔する一念で。此身躰を清淨にいたすことが出來る。何と大した門ではないか。譬へば自首するやうなもので。一旦おのれが造つた罪を。惡るいことをしたとおもつたから。眞實に恐くなつて。慄えるほどおそろしくなつて來て。警察署へ出かけてゆき。昨夜これ〳〵のことを働らきましたが。おもへば實に濟ないことじやから。白狀にまゐりました。宜しきやうに御處分を願ひますと。有のまゝに申しあぐると。重罪もかろくなります。併し是れは餘門のこと吾宗は。自首に依つて無罪とせらるゝことになる。ソコで懺悔のちからの廣大なことがわかる。世間の法律でさへかやうじやから。慈門の上からは無罪とならんではつまらない。ソコで吾宗の懺悔は大

したことになるのじや。昔し釋迦如來御在世の時に一人の惡い子がありました。兄弟もなければ姉も妹もありません。只一人子なるがゆゑに。父や母は手のうちの玉と愛しました。抱たりおろしたり一日もはやく大きくなれよと鞠育いたしました。夜るとなく晝となく。寒いとなく暑いとなく。風にふれないやう。雨にあたらぬやう。一通りや二通りの可愛がりやうではない。漸やく大きくなりますと。師につけて學問をさせました。しかるに其子。驕逸我意にいたして能く心ろを用ゐません。朝にうけて夕べにすて。初めよりつとめて習ひおぼえません。放蕩遊樂して山野に出かけ川澤に往く。禮讓だの仁慈だのといふことは少しも知りません。父や母はこれをうれひまして。屢〳〵惡いことだぞよ心ろを入れ替へろよと。泣く〳〵いさめますけれども毛ほどばかりも聽き納れません。つゐに師のもとを追ひ出されまして詮方なく歸つてまゐりました。サア歸されて又甘い父母の許へ來ましたから。尙ほ更ら華美をこのみ。產業も治めません。遂に零落れて仕舞ふて見るかげもなくなりましたが。其時分になりまして父母は氣を揉み〳〵死ました。棺槨をしつらゆることが出來ませんで。や

うやく人の助けをかりて式ばかりの葬りを致しました。是より一層放蕩になりまして。氣狂ひの象が鐵の檻を拔け出したやう。跳りくるふ猿が鎖りを離れたやうに。思ふまゝの惡るさをするから。最早や誰れも相手にしません。國人みな狂惡と名をつけまして。出入もさせません。かやうになつて來ましても自分が惡るいとは氣がつかず。却つて衆人を怨らみまして。上みは父母の敎育を不足におもひ次ぎには師友の敎訓を切ならずとうらみ。祖先の神靈我れを棄て福を與へずとうらみ。下には我が身のおもふまゝにならぬをうらみ。お門違ひのところばかりうらみまして。更に道理ある考へを持ちません。斯の如き有樣でありますけれども。風と善因やあらはれけん。アヽ我れこのやうに貧乏して諸人のために捨られて仕舞ふといふも。何か子細のあることだらふ。好し佛けに事へて其樣子を尋ねばやと。釋迦如來のところへ得〳〵と出かけました。佛に申していふには。佛道は寬弘にいたして普ねく一切を入れたまふと聞く。願はくは我等の如き惡人をも。打捨てたまふことなくして。御弟子となしたまへと泣く泣くおたのみ申しました。スルと佛けでございますから能くこそ慈門へ這入つて來た。

然らば弟子にして取らすべけれど。夫れ道を求めんとおもふならば。當さに清淨なる行なひを爲すがよい。其方いま俗塵につゝまれて。我が弟子になつたからとて何の益もない。たゞ疾く家にかへりて業をおさめよ。若し出家して戒を犯さば。却つて重罪を累ねて更に惱苦をまさん。誦せざれば言葉の垢となり。勤めざれば家の垢となり。嚴ならざれば色の垢となり。放逸なれば事の垢となり。慳なれば惠み施すの垢となり不善なれば行ひの垢となる。今世も亦た後世も。惡法は常の垢となるなり。垢れの中の垢といふは。愚痴なるより甚しきはない。其方つとめて此けがれを捨つべし。善人にはこの垢なしと。御親切なるお言葉をうけたまはつて。自から過失の次第を知りまして。喜んで歸りました。夫より敎えの趣むきを思惟いたして。皆な改め悔ひまして。三年の後にまた佛の所ろに往き出家して羅漢果を證得したと法句經にありましたが。又滅罪清淨ならしむるなりとある證據でございますから。自から過失と知つたならば。速やかに懺悔して滅罪清淨ならしむるがよろしいでございます。懺悔の功德にあらざれば決して受戒することが出來ぬのじや。各々無始却來の貪瞋痴によりて身口意の三業を汚し居れば。速かに懺悔清淨にして受戒する樣に致すのが第一肝要の事であります

◎第十一席

（第八節）

然あれば誠心を專らにして前佛に懺悔すべし恁麼するとき前佛懺悔の功德力我を拯ひて清淨ならしむ此功德能く無礙の淨信精進を生長せしむるなり淨信一現するとき自佗同く轉ぜらるゝなり其利益普ねく情非情に蒙ふらしむ

サテ此御贊題はいよ〳〵すゝみて。懺悔も其功德と相成りました。然あればと前席をおうけになりまして。滅罪清淨ならしむる懺悔のいたし方は。どのやうにすればよいかといふのに誠心を專らにして。前佛已のれより以前にほとけとなられてある佛の前と見てもよいが。又はたゞ佛前と見てもよい。其佛前にむかひまして。我等の惡業は實に深重にいたして。甚だ恐るべきことであると。かやうに誠の心ろから詫び入るのじや。ソコデ我宗の懺悔は惡るかつたと懺悔さへすれば滅罪清淨ならしむるので。前

席でも申す通り。余門他宗のごとく。懺悔したら地獄へ踏み込まにやならぬ身も。輕ろく輕減されて修羅道に生れるとか。又は事情を酌量するとかするのじゃない。悪るかつたと懺悔すれば。それで何程重い罪でも。秋天一片の雲もないやうに奇麗サッぱりといたして仕舞ふのじゃ。ダに依つて。前佛懺悔の功徳力我を拯ひて清淨ならしむとお示し遊ばさるゝのじゃ。前席に言ふことを忘れて居りましたが。懺悔といふことは懺は天竺では懺摩といふので。支邪に譯すれば懺を悔過といふことになるそうじゃ。つまりあやまちをくゆることで。悪るかつたとあやまるのじゃ。佛法の原則を自業自得といふのは極りで。自分であやまつて自分に身躰を奇麗にするのじゃから。佛ケ様に奇麗にしてもらうと思ふてはならぬ。一向宗のごとき易行道では。彌陀の誓願を信受せんければ佛ケにはなられない。罪は深重なりとも此彌陀は助けにや貫かぬぞよと。彌陀のかやうに言はるゝのを信受させてもらひ。シテおのれまで本願の中へ飛び込んで仕舞て。何にもかも皆阿彌陀となるのであるが。我宗は佛は只懺悔する道を教えて下さるまでのことじゃ。じやから前佛懺悔の功徳力とあるのも。佛ケ様に懺悔するの

じやない。只佛ケ様を證人に立てゝ。自分で悪るいことはいたしませんと自分に悔ひ詫るのじや。シテ詫た功徳の力はどんなものかといふに。只我れ自身を拯ひて清淨ならしむるばかりじやない。能く無礙と少しも滯ふるところなく。淨信と奇麗な信心を起して。そうして精進とどこまでも其心ろを擴め進めさせてゆく。其擴め進めさせるのがどうなるかといへば。夫れが戒徳をあらはすことになるので。淨信の極。一たび戒徳をあらはして來ると。天地萬物皆佛といふことがわかるから。其分つて來た道理から考へると。自他同じく轉ぜらるゝなり。自分が佛になるばかりでなく。他も佛に轉ずるのである。言ひ換えて見ると淨信と奇麗な心身になりたのは。ァゝ悪るかつた是からは悪るいことは致さんといふ心が。三歸戒三聚淨戒十重禁戒となるのじやから。此十六戒は過去久遠の佛より釋迦如來などの諸佛方が。みな踏み行はれた道じやから。此戒を直ぐ諸佛といつてもよろしいので。戒の外には決して佛はないのじや。此佛けとあらはれたところが。廣大な慈悲心となるので。其慈悲心から直ぐ發願利生となり。衆生濟度とあらはるゝから。自他同じく轉ぜらるゝであらふ。衆生濟度は直ちに

行持報恩となるから。其利益情非情に蒙らしむ。情非情といふは。世界の萬事萬物のことで人間より禽獸虫魚。山川草木墻壁瓦礫。我れ一人の懺悔の力で。ありとあらゆるものが利益を蒙るのじや。何と大したことではないか。譬へば寺子屋見たやうなものじや。一人の師匠があれば。五十人百人の弟子を敎えて。其弟子が又弟子を敎ゆるとすれば末には幾人の師匠が出來るか知れないことじや。それが始めは何樣かといへば。七つ八つの子供に敎ゆるに。一二三の數字からいろは四十七字を學ばせて。半年か一年もたつたところで。數字いろはが空でも書けるやうになると。寒暑の見舞文と。實語敎童子敎を敎えて。夫から古狀揃庭訓。段〳〵登つて四書五經文選といふやうに。茲まで敎えると最早や獨り働らきが出來る。如何なる書物も讀めぬものはない。尤も今の學校は仕組がちがふけれども。矢張りつまりは同じことじや。獨り働らきが出來るやうになつたところが。丁度これから先の受戒入位にあたるのじや。其順序として懺悔滅罪せねばならん。依つて今は寺子屋で修行中なので。受戒入位の下た拵らへをするのじや。(勸導簿照といふ書物に面白い噺が載せてあります。即ち左の通りじや。)

昔し鎌倉の大藏と云ふ處に。家豐かなる長者がありました。その長者が一人の娘を生みまして。其娘が七才の時に。亭主が敢なくも此世の暇乞をしました。そこで一門一家打寄つての相談には。兎角に幼なき娘の事なれば。婿といふ所でもなし。また母としても。まだ年若の事とて。此儘に打捨て置ては家の治りも附き兼ねる事もあらふから。寧の事後家入りの婿を取て相續させた方が善からふと言ふので。幸ひ一門の內に似合しき者があるので。それを迎へて亭主に立てました。歲月の闕守なく。いつの間にか早や十とせの春秋を送りました。娘は當年十七才。夫と呼ぶは此年二十八。妻は三十六と聞えました。時に此妻つく〳〵とおもひますには。我が夫はおのれより若きことなるに。且つ年上の妻を持つ身は。何となう面白かるまじ。娘めは丁度釣り合ひよき年でもあり。双方承知さへすることならば。娘の聟になつて貰ひたいものじやと。獨りつく〳〵と考へまして。是れを二人に噺しますと。夫は色々と辭退すれども。妻は頻りに勸めましたり。又賴んでも見たりして。漸やく夫の承知を得て。娘の聟になつ

て貰ひましてシテ自分は隠居して仕舞ました。スルと若夫婦は母の潔白な志しを感じて。奥底なく孝行を盡しもしたり。夫婦中も睦ましく暮しました。然るに何時の頃よりか母の隠居所の戸が閉りまして。殊に夫婦のものに逢はぬこと十餘日にもなります。二人のものは殊の外氣にかけまして。朝な夕なに外まで音つれまして。母さま御病氣でもおこりはいたしませぬか。御目にかゝりて御様子をうけたまはりたいといへど。母は中〳〵戸を開けません。隠居所の中で答えますには。いや〳〵病氣でも何でもない。必らず案じて下さるな。此頃はきつう人に逢ふのがいやになつたから。夫で夫婦のものにさへ逢はぬのじや。此れも陽氣のゆゑじやらふ。今にも逢ふ氣になられるじやらふ。必らず案じて下さるなと。どうしても戸を明けて呉れませんから。御病氣でもないとあらばお氣任せにして置くがよいと。其まゝにして置きました。去れどまた段〳〵と日も立ちますから。何様も案じられてなりません。他人ではなし二人のものをお嫌ひなさるゝは。何か子細があるじやらふと。又隠居所にまゐりまして。若しや我〳〵夫婦のものが。不孝の筋でもあることなら。打明けてお叱りなされて下され。我

〳〵どもをお嫌ひなさるゝやうなことがありては。世間へ對しても濟みませんから。何卒ぞ御様子をお噺し下されと。夫婦は戸の外で泣聲たてゝ申しますから。母も據ろなく戸を明けまして。二人のものを内に入れ。涙だをはら〳〵と落しながら。扨二人のものよ能く聞てたもれ。夫婦に何の不孝があらふぞ。何をか恨みん我が悪心。何處からおこりしか我れながら。更に合點がゆかぬほどじやが。我れながらおそろしやと。千々に心ろを責むれども。中〳〵思ひ止められませぬ。生ながらへて恥を見んより。斷食して死ぬる覺悟で。今まで堪らへて居りたるぞや。今は何をか包むべき。我が心ろより我れとかへりみ。人も教えぬ恥を知り。娘を其方に與へてより。我は隠居の身となりて。アラ心ろ安き境界やと。その當分はおもひたれども。月日のたつに從ふて。何となく曉つきの寢覺あしく。夫婦が中よくむつましく。奥底なき交りを見るに付けても。妬ましき心ろがおこりて。彼れこそ我れが夫なりしに。憎や娘に寢取られしと。我が子までも恨らみ悪む。コハ淺間しき心ろ根や。彼等が仕出したものでもなし。人の教へたことでもなし。我が心ろから我れが頼みて。聟になつて貰ふたのじや。サテ

〳〵淺間しい愚痴の悋氣。ア、此罪のおそろしや。誰れを恨みんやうもなし。思ひ切らふと思ふほど。尙ほも思ひが增して來て。妬みの罪みの重なりてや。此世からなる畜生道。蛇身を受けて來たりしぞや。恥かしながらこれ見よと。言ひつゝ兩手を夫婦の前に出しました。見れば悲しや母、の親指は。蛇となつて舌を出し。眼をいからして夫婦をにらみます。夫は更に言葉もなく。嗜なむ一刀を取り出しまして。スラリと拔て元結ひ際より髻りを切りました。返す刀で我妻の髮りの黑髮を切り落し。兩人ともに。これを緣とし。尼法師と樣をかへました。母さま是で御免を蒙むります。來世には眞の孝行をつくします。お心ろ安くねがひますと。兩手を下げれば母親も。手から髮みを切捨まして。二人のものに暇をつげて。京都をさして登りました。巡る家毎に手を出して。蛇の有樣を見せまして、娘を妬みし現業なりと。自からフ、ツリと思ひ切つて。恥といふことを知つたゆゑ。潔白に懺悔したから。いつか蛇もなくなりまして。元の身躰になりましたから。又家に歸りまして。親子三人打揃て授戒にも付たといふ。皆樣どうです懺悔の功德は大したものではありませんか。じやから懺悔〳〵。

懺悔の力によりて清淨の戒法も受られることなれば。各々懺悔して本來清淨の心に返り。先佛曩祖の護持し玉へる戒法を受けて。發心修業の本懷を遂ぐるのが何よりの肝要であります。

第十二席（第九節）

其大旨は願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて障道の因緣ありとも佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖我を憐みて業累を解脫せしめ學道障り無からしめ其功德法門普ねく無盡法界に充滿彌淪せられん哀みを我に分布すべし佛祖の往昔は吾等なり我等が當來は佛祖ならん。

サテ此御贊題は修證義の第九節。前段に「その利益あまねく情非情に蒙ぶらしむと仰せられて。懺悔の功德の廣大なことをお示に相なつたそのお言葉をお受けなされて。先づ懺悔の功德はかやうなものじやが。そんなら其懺悔の方法はどんなものぞといふに。其大旨は願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて障道の因緣ありとも。かやう

に懺悔のいたし方をお示し下さるのじゃ。先づ能く〳〵心ろ得て、置かねばならぬことは。かやうに前席にもまたこの席にも。扨は此次の席にも。メッと皆懺悔のことばかりお並べに相成つてあるが。只懺悔〳〵とばかりいふても。只々今までは悪るかつたが。是からは悪るいことは致しませんと口にばかりいふて見たところで。根から底から悪るかつたといふ氣になるのは六かしい。其心根に相成るには。先づおのれが實もつて大病にかゝつて居るとおもはねばならん。眞に病氣にかゝつて居るとおもふたら醫しやの藥りも服む氣になれるだらふが。それを病人ではないといふて。下らなく理屈をいふやうでは困る。實に私しは病人であるとおもふたら。初めて懺悔する氣にもなられるのじゃ。ソレデ漸やく悪るかつたといふことが能く〳〵知れたから。願はくば我れたとひ。いま迄造り重ねた罪咎は。何ほど深重なりとも。佛道のさはりとなるやうなことがありてもと。かやうに奇麗なこゝろに相成つて來るのじゃ。ソレから又過去の悪業の多く重なりてと仰せらるゝのは。其業報が深いに依つて。とかく其道に障りが出來て。切角人間に生れた甲斐もなく。遂に大道を聞くことが出來ぬのが多い

のじゃ。舍衛の三億と申して昔し釋迦如來が天竺の舍衛城で御説法なされた時。其城中に三十萬人の人があつたけれども。其中で親しくお説法を拜聽したものは。僅に十萬人しかないといふ。殘り二十萬人のうち十萬人は釋迦如來の御化益があると噂さには聞て居ながら。遂に一度も參拜もせず其殘りの十萬人は釋迦如來といふ御名さへ聞たことが無くてしもふたとある。親しく佛祖の大道を聽聞すると云ふことは並大底な果報ではないに。若しも過去の罪業が障りになつて一生空しくすごすやうなことがあつては實に多生の遺憾であるから。我より先きに佛道に因て。得道せられた十方諸佛。謂ゆる前佛の憐みを受けて道の障りになる悪業のわづらひを解脱させて戴きたい。其れのみならず過去の諸佛が生々世々に積みおかれたもろ〳〵の功德も修證したり。解脱したりせられた一切の法門も。無盡法界と限りもない十方世界に充滿彌淪ミチ〳〵てある大慈大悲の哀れみを。皆御分布とお分ちなされて下たさりませとねがふのじゃ。また此の御文の。をはりに。佛祖の往昔は我等なり我等の當來は佛祖ならんと仰せられてあります。此の御一言が誠に肝要の中の肝要のお言葉じゃ。コレは梵網菩薩戒經

に汝は是れ當成の佛なり。我は是れ已成の佛なり。是の如きの信を爲せば戒品既に具足すとお說きなされてあるお言葉を其まゝ我々の方から佛祖へ申あげるので。修證義三十一節の全文が只この二句にこもつて居ると申してもよろしい程のことであります。それゆゑに委しいお噺しをいたそうと思ふては。一朝一夕のことにはまゐらぬが。三世の諸佛方も其本と言つたら。吾れ〳〵と同じ凡夫であつた。然るに懺悔滅罪受戒入位で。今では佛祖と仰がれてあらせらるゝが。吾々とても只今こゝで。滅罪入位の身となつて。利生報恩の行さへ出來れば。それで諸佛と同樣の身ととなつて均しく諸佛と敬まはるゝのじや。其處の道理を固く信じて疑がはぬ。其一念に戒品こと〳〵く具足すとあつて。三聚淨戒。十重禁戒も。全然こもつてあるぞと仰せらるゝ。サア玆だ。かやうに美くしい身の上になるのも。實以て悪るいといふ病氣を知つて。實以て樂りの力で癒さねばならぬと信じて。それから此やうな結構な身の上となるのじやから。吳〳〵も自身の强情をやめて。此懺悔のお示し方を守るがよろしい。譬へば理髮床へいつて鼻や耳を剃つて貰ふやうなものだ。アノ時に理髮師の遣つて吳れる通りに

ならず。自分のおもふ通りに首を曲げたり。自分勝手に身躰を動かしたりしたらどうであらふ。ソリヤ忽ち大怪我をやらかします。だから鼻や耳を剃てもらふ時に。誰れか自儘をいたしますか。恐れ多くも。王公貴人といへども。アノ時は理髮師の意のまに〳〵でありませう。何んでも道を聞くときには。自儘を止めて師のいふ通りにならねばならぬ。師のいふ通りになるといふと。終に立派の身の上にならるゝこと。丁度顏を剃つてもらふて奇麗になり。耳や鼻の心ろ持を能くするやうなものである。明治二十九年五月二十六日の大阪毎日新聞に。奇異なる精神的發作といふ題をつけて掲て曰く。別に精神病に陷いりたるにはあらずして。或一種の事物に遭遇する毎に。一時の精神的發作をなすもの。世には往々にして之あり。英國の一雜誌の記事に曰く。停車場のプラットフオームに立つ毎に。異常の感を生じ。殆んど其身を殺さんとする一種の人々あり。記者の知れる二人の貴婦人は。プラットフオームに立ちて。列車の進み來るを見る毎に。身を軌道の上に投ずんば止まじとの感を起せるより。必らず人に手を引かれて立ち。我身の危險をば。自分には少も知らずに居りて。只知り人の助

けによりて。其胃すを豫防し。他の者は又斷崖に臨み。高き塔の上に立つ毎に。そこより身を投げんとするの激しき精神的發作を起せり。彼等の云ふ處に依るに自分は如何にするも身を投たさの念に堪へず。誰人も斯なるべく。我身も人並の望みを持るものぞといへり。故に一人して若し長くそこに立ち居るなれば。身を投るに至るや必せりと。次には又かゝる危險なる發作にはあらざれど甚だ高價なる發作をなすものあり。そは此地(倫敦)に住せる一貴婦人なり。此貴婦人は市中を歩める際若し頭に籠または其の他の物を載せて。歩める人を見る毎に。ッカ〳〵と其傍に近より。之を打落さゝれば止まざるなり。こは實に馬鹿らしく實際にはある可からずと疑ふ人もあらんかなれども。全く事實なるは記者の確く保證する處なり。彼女がかゝる精神的發作をなすに至りてより。瀦戸物類野菜肉類小間物類等種々の籠を。人の頭上より打落せし其數は甚だ多し。近日の事なるが彼女は途上を歩める際車道を隔てし彼方の人道を。頭上に鷄卵を入れたる籠を載て歩み居る丁稚を見るや否や。忽ち起る例の發作に。車道を横ぎりて其籠を打落したるにぞ。卵は落ちて破壞し。道行く人は皆立留りて。彼女の

顔を打守れり。然るに彼女は籠を打落すやいと滿足の樣子にて。滿面に笑を湛へ丁稚を連れて其主人の許に案内せしめ。鷄卵の代價十志林を支拂ひて歸れり。彼女は斯の如く他人の頭上のものを打落す毎に。喜んで其代價を償ひ。自ら滿足の意を表するを常とせり。左れば去ころより其夫は。其賠償費用の多きに堪へかね。決して彼女をして獨り途を歩ましめず。必らず共に歩行する事とせり。此際若し人の頭上に物を載せて來るものを認むるや夫は先づ確と妻の手を取り。之を引戻して發作を遂げしめざるやうにいたし。且つ敎へて其惡しき病ひなることを言ひ聞かせ。漸やくおのれの病ひなるを承知させて。カ[illegible]ロン氏の治療をうけたれば。此程は大ひに癒たりといふ。又記者の朋友に一人の精神的患者あり彼も甚だ厄介なる紳士にして。彼は殺されたる豚の。屠獸者の店先に釣下げられ居るを見るや。必らずステッキを以て若しくは平手を以て數回猛烈に憤然として之を打叩かざれば止まず。彼は多年斯る異常の誘感に逢ふて居るから。誰れが敎ゆるも耳にも入れず。中〳〵に聽かざりしが。記者が非常の熱心によりて。漸やくに其病ひを知りて。近頃は先づ人並となれり云々と。かやうな墮梅の

ものじゃから。懺悔するには心底おのれに病ひのあるといふことを承知せねはならぬ。それさへ承知が出來れば。藥りも本氣になりて服めるごとく。懺悔も心底懺悔が出來ますじゃ。此因緣は決して余所ごとではありませぬぞや。各々障道の因緣の病氣なることを知りて先佛曩祖の哀愍を求め徹底懺悔するとき。自己一段の光明は赫奕として三世十方をてらし。界法も心地に具足することを得るのじゃ。是が即ち佛々の要機。祖々の機要にして佛祖の往昔は吾等にして吾等の當來は佛祖ならんと。渉入圓融して事々無碍の自在を得る所であれば。懺悔一念の發起が成就正覺の本因なれば。各々發露懺悔して諸佛諸祖の哀愍を乞ふことが肝要であります。

◎第十三席（第十節）

我昔所造諸惡業。皆由無始貪瞋痴。從身口意之所生。一切我今皆懺悔。此の如く懺悔すれば佛祖の冥助あるなり。心念心儀發露白佛すべし發露の力。罪根をして銷殞せしむるなり

サテいよ〳〵懺悔の儀式と相なつて參りました。シテ懺悔と申しまするに。二儀兩懺とて大乘の儀式小乘の儀式との區別もあり。理の懺悔。事の懺悔など唱なへまして。隨分他宗余門ではいろ〳〵と申すやうでありますが。何にもそんなに事〳〵しくいはんでもよいのじゃ。つまり心念身儀發露と。是れだけがそろへばよろしいのじゃ。元來懺悔の儀式の場へ參つて。シテ其樣子を承たまはらねば委しくは分りませんけれど。茲ではツマリ心念といふて。誠心を專ばらにするといふのか理の懺悔。惡事は必らずいたしますまいと眞におもふ心ろの起るのが意の懺悔。身儀といふのが事の懺悔。即はち身で行なふのが事の懺悔。ツマリ合掌恭敬の有樣のことじゃ。これを身業の懺悔といふのじゃ。それから發露とは口業のことで。造り積み重ねた惡るいことを少しも隱すことなく皆白狀するのじゃ。人に聞へぬやうに口のうちで。ムニャ〳〵と言ふやうにしてもよろしい。併し人前懺悔などいふて。人の前で云々と言はせる向きもあるとかいへど。我宗では心念身儀發露白佛で。佛けさまに向つて。我昔所造諸惡業。皆由無始貪瞋痴。從身口意之所生。一切我今皆懺悔と。個樣に申せばよろしいのじゃ。

就ては身口意の三業とも誠實を專らにせんければならぬ。サテ此の我昔所造の文は本と華嚴經の偈じやが三世諸佛の御相傳の懺悔の文であるのじや。其れ故に先佛の護持し玉ふ所。曇祖の傳來し玉ふ所と申して。無始劫の昔しから造りためた諸〳〵のあしき仕業は。皆無始已來即ち限りのしれぬ昔しからの貪欲と。瞋恚と愚痴とが本とに成つて。身と口と意との三つで色々の悪をつくり。今更まことに慚愧恐怖の至りてあるに依り悉〳〵く懺悔致しますといふの意味じや。此の中で無始と云ふことゝ貪瞋痴といふことをして少々御話せんければならぬかと思ふが。無始と云ふ事は始めがないと書いてあるので。世間では皆この無始と云ふことを知らぬゆゑ。天地萬物の始まりを無理に搜して見やうとするから。色〻な不都合なことを說きたてゝ人を惑はせる事になるが佛法では最初から天地萬物に始めもなければ終りもないと申すので。委しいことは一座の說敎などで申し盡すべきことでは無いが。當節は世間の學問が追〻に開けて來て。空間や時間には限りがないと申します。空間と云ふは。虛空の間だと云ふことで實に虛空には限りが無い。其限りのない虛空に充々てある眞如法性にも限りが無い。

限りの無い眞如法性が因緣次第生滅古來と申して出來たり潰れたりするのは海の中に泡が出來たり潰れたりするやうなものであると佛は仰せられてある。泡の手前から見れば出來た時は出來たに違ひなく潰れた時には潰れたに相違ないやうなものである。即ち始めもあれば終りもあるやうに見ゆるけれども。一躰に泡と云ふものには自分の實躰が無い。全く水の上に緣に因つて起るものであるから。其本躰の水の上から見れば始めもなければ終りもないのである。吾々人間は其泡のやうな身をもつて。泡のやうな萬物に對して居りながら。何んぞ實躰でもあるものゝやうに思ふものから。氣に入つたといふては欲しがつたり。氣にいらぬと云ふては厭やがつたりするじや。其はしがるが即ち貪欲の本で。其厭やがるのが瞋意の本じや。貪欲と云ふはムサボルと云ふことで物を妄りにほしがることじや。瞋意と云ふはイカルと云ふことで妄りに腹を立つことじや。サテかやうに氣に入るとか氣にいらぬとか貪ぼるとか瞋るとか云ふ迷の起るのは畢竟眞如法性の眞の相が分からぬからじや。サテかやうな鹽梅に。貪瞋痴の三毒から。無始劫來つくりためた。罪を懺悔するときは。秋天一塵なきが如く。朝

日に霜のきゆるがごとく。奇麗さつぱりと消へてなくなるぞと仰せ下さるのじゃ。譬へば足を洗ふといふやうなものじゃ。明治時代の今日となりては。決してあることではないけれども。昔し德川時代には能くあつたことじゃが。常に百姓が悪事を働らくとか。又は餘儀ないことからして。一旦身を屈めて穢多の仲間へ入れば。先づ〳〵事は隱便に濟んだが。其仲間になつて居るうちは。隨分手酷く使はれたり。無禮なことを言はれたりして。憂き歳月を送つて居なければならぬが。サア宜いワと言ふ時分になると。幾程か金を出して足を洗ふといふ儀式をするじやが。其儀式がすむといふと。直ぐ旦那さまで立派な言葉づかひとなり。お取り扱ひが直ぐ替つて來るのじやが。今我々も懺悔の儀式がすめば是で清淨潔白なもので。これから戒を受けて佛位に入ることが出來るのじや。明治二十八年九月十日の岡山新聞に出たりとて。更に東京朝日新聞九月十四日の雜報に。哀れなる實子殺しと見出しをつけて。轉載して披露して曰く。茲に岡山縣備中國淺口郡宇常磐町に林元三郎(豐後屋事)と云へる豪家あり。その此の元三郎は歳六十路の齡を越えし老の身にて。先妻はお定と云へる一人の娘を殘し

て黄泉の鬼となり。其後おらんとて心善からぬ女を後妻に貰ひ受け。暮らす内先妻の娘お定に金平と云へる養子を取り。其當座は一家睦まじく暮しをりしが。程なくお定は三人の子を擧げしより。これまで平穩なりし豐後屋の内。風波を起すに立ち至れりさて繼母おらんに一男一女ありて。女は二十一二歳にして。男は十六七なり。又たお定の總領は餘り怜悧の方ならねど。三女は僅かに五才にして。末頼母しき利發者とて。祖父元三郎も父なる金平も。共に之を愛でいつくしみ居たり。去るほどにおらんは金平夫婦の子をチヤホヤといつくしまるゝに付き。さなきだに心よからぬ繼母の事とて。殊にこれに憎くしみをかけ。其の憎くしみは延てお定にまで當るやうになりければ。お定は此上なく之が爲めに心痛し。繼母の心にも逆はらず。我が子に退けも取らさず。何事も此の身さへ萬事忍び居らば。家に波風は立たじとて。飽まで辛抱なし居れども。繼母おらんは孫の譽め立てらるゝ程何事に限らず氣に障はり。忌々しからぬはなく。此の子さへなくばと常に思ひ居たる者と見え。お定親子を待遇かふ事日增しに殘酷を極めけれども。固より繼母の事とて斯々の所爲ありと。父親に告げなは後で我が子が如

何なる憂目に逢ふも知れず。又た百人金平に此の由を告げたればとて。元々養子の身分なれば思ふに任せず。只だ〳〵心配を掛けるのみ。さればお定の心は春の花も面白からず。秋の月も我が身獨りには澄まず。日に悲み夜に憂ひ。夢の間も我が子可愛し繼母憎しと思はぬ事とてはなし。近頃は又た獨り世に望みなきを悟りけむ。斯んな憂目を見るも。見するも此の身の有るが故なり寧その事死んだならばと。つきつめたる心に成り。兎角鬱ぎ勝ちに見えたりとか。斯て去る八月十五日は。即ち當暦の廿五日とて。同地天神祭の當日となりければ。子供心にお定の子もまた繼母の子も共に。菓子など買ふ錢をねだるがまゝに。おらんは我が子には五六錢の金を與へ。お定の子には只の一厘の金さへやらず。それさへに涙の種なるに。同月廿一日の事おらんは玉島饅頭を買ひ求め。之を先づ我が子に與へ。お定の子二人にも聊か分かち。末の娘には更らに知らぬ振りして與へざるにぞ。お定も何時もの事とは知り乍ら。見るに見兼ねてお祖母さんの所に行き。御斷り云ふて一つお貰ひと言はれて。五才になる娘は別に詫びする事のなけれど。饅頭を貰ひたさ一杯に。恐る〳〵おらんの許に行儀を正し。

兩手をついて誤り御饅頭を頂戴と云へど。おらんは苦笑ひして更らに頓着せず空嘯いて居る憎くらしさ。偶ま其の日出入の仲仕臺所にて、食事を爲しつゝありしが。之を見て如何にしても堪へ兼ねけん。飯を食ひさし戸外へ飛び出で。一錢にて二つの饅頭を買ひ來り。之を娘に與へたり。此の有樣をつく〳〵見て。他人でさへ情けと云ふもの有るものを。如何なれば斯くまでも孫の憎き事か。さりとては邪慳で厶りませうと。思はず一滴の涙を袖に置き。露と消えん心此の時いよ〳〵定まりぬ。其の後ひそかに我が子を招き。湧き出る涙を押し包み。物柔らかに邊りを憚かる小聲にて。母さんはの。是から遠いところへ行かねばならぬが。お前も母さんと其の遠いところへ一所に行くかエ。と覺悟定めしお定が言葉娘はなんの頑是もなく。母さんが行くのなら何處へでも行きますと。おとなしく答へしにぞ。お定はツとむせ返るを。此處で泣ては氣付れんと其のまゝ二階に我が娘を連れて馳せ上り。口に唱名目に涙。娘を引き寄せグット一刺。七顛八倒哀れや五歳を此の世の一期其のまゝ呼呼はたえはてたり。後れはせじ母も後から。三途の川の道走るべと。短刀逆手に持ち直し。我と我が咽喉を一

突きつきたれども。いらちし爲めか誤つてか。短刀それて左りに外れ再び刺さんとする折柄。最前よりの物音を聞いて上り來りし男二三人。刄物を奪ひ取り漸くに志づめたり。斯かる騷動を惹起せしも。詰り繼母おらんの殘酷に源因するものにて。近傍にても此のおらんの事を。譽むる者とては一人もあらずと岡山の新聞に見ゆとありましたが。今明治二十九年五月十六日の東京朝日新聞は。更に仝十二日の岡山新聞より。又一塲の物がたりを轉載し。票題は後のおらんと付たり。曰く。昨年九月十日の紙上に。哀れな實子殺しと題を付けて。豐後屋の繼母おらんの事を記したるが。此頃聞けば同人は。其後打つて替つた善人となり。お定を始じめ其子供を。少しの隔てもなく可愛がりて。家には一度の涙風もたてず。眞實まめ〳〵立ちて慈しみ。お定もまた早まりし心得違ひを悟りて。奥底なく事ふることゝなり。一家擧つて佛法の信者となり。今では世間の手本となるやうな身となりたりとは。誠とに目出度事ともなりと。手短かに改心の次第を記したるが。如何に悪人なればとて。悪るいといふことを承知すれば。後悔するに違ひない。後悔の當躰が直に懺悔の端的であれば。廻る因果の小車は。

暫しの間の隔てもなく善因善果悪因悪果と始終轉々するものなれば。懺悔の力は能く無始刼來の罪障を消除して身心清淨になること。おらんの懺悔後悔に均しく一念回向の善悪によりて最初は慳貪邪見の繼母なりしを儘かに一年を過ぎざる内に忽ち慈母の情けも深く一家の風波穏かに嫁も姑も睦じきは凡夫ながらも好き手本であります。去れば先佛曩祖の證明し玉ふ心念身儀發露白佛の懺悔は必ず能く一切の功德を增長して成佛得果の正因となるのであります。今茲に懺悔して。奇麗に滅罪を致したに付ては。是から授戒入位をして。立派な身の上になるのであるが。吳〳〵も嬉しいことではありませんか。

◎第十四席

（第三章受戒入位第十一節）

次に深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひ奉らんことを願ふべし西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり

サテ今席からは修證義の受戒入位のお噺しでござります。これが我宗に取りまして

尤とも大切なところで。此受戒入位をいたそうために。此前の懺悔滅罪をいたしたので。受戒さへすみますれば。夫れで釋迦牟尼世尊と同じ位なのでございます。それで先づ懺悔滅罪がすんだのでありますから。御文に次に深く佛法僧の三寶を敬まひたてまつるべしとの御教訓でございます。これを第一といたしまして三歸戒と申します。其次には三聚淨戒を受け其次には。十重禁戒をうけるといふ順序であります。元來我宗におきましては。かやうな順序でありますけれども。他宗といへども必らず此三歸戒をうけますのを第一といたします。易行道と唱へまする一向宗の如でさへも得度をいたします時には。矢張り三歸戒をうけると言ひます。日蓮宗などは戒壇といふことを日蓮上人が。三秘の隨一として立てゝおかれましたを。どういふ譯からのことであるか。今は戒法の沙汰もなくなりまして。只法華經を授けるだけのことになりました。けれども矢張り此三歸戒だけは受けさする樣子であります。デすから此三歸はいづれのお宗旨でも受けるのであると言ふてもよろしい。凡そ佛のお弟子となるには。三寶に歸依せんではなりませぬ。此三寶に歸依せぬものであれば。もとより此三寶に

背くものので。不謗三寶の戒を犯したものである。それでナゼ此三寶かそれほど尊といかといふと。佛といふは天竺の言葉で。具さには佛陀といひ又勃陀といひます。支那には覺者と譯し。日本の言葉でさとり又はほとけなど申します。悟とは煩惱生死を離れまして。菩提涅槃の境界となつたところを。ほとけとも覺者とも名づくるのじや。又法といふのは是れも矢張り天竺の言葉で。達摩耶と言ひます。支那に譯して法といふので日本にはのりとかきまりとかいふのです。そこで法り規則といふものは人間のこしらへた法則でさへ。キパりと極りがつくので。背けば直ぐ牢屋へおくられます。況んや天然とか本然とか。誰れか拵らへたでもない法則は。少しも暗ますところなく。毫厘も違ふことなく。キチりと當て嵌るやうに出來て居るのを。それを佛とさとりの眼こでお見ぬかれになつて。其まゝをお說き遊ばされたのが。此法といふことじや。僧というのも天竺の言葉で。僧伽耶といふのを。支那に譯して和合衆と言ひます。これは佛けの說せられた法を。傳へて敎えて下さるのを僧といふので。此佛法僧が三つの寶となるのじや。それで此三歸といふのが佛法の中でも最とも大切なことじやから。

生をかへ身をかへても三寶を供養し敬まひたてまつらんことを願ふべしとの御教訓じや。それから三寶といふに。三通りの種類があります。一躰三寶と現前三寶と住持三寶との三つであります。それで一躰三寶は設ひ釋迦年尼佛が御出世にならずとも。三世諸佛がお出かけにならずとも。此世界の始まりから此末萬劫末代たつとも。いつでも揃ふてあるもので。此道理をお知りなされたのが釋迦如來じや。それで現前三寶と釋迦如來御自身が佛で口でお說きなさるのが法で。迦葉阿難などのお弟子方が僧となるのじや。今では現前三寶はないけれども。木像畫像のやうな佛躰が佛で。經卷が法で坊さん方が僧じや。これを住持三寶といひます。かくの如く三通りの功德がありますから生れかはり死にかはりして。いつまでも〳〵。未來永劫まで。佛法僧に遭遇して。恭敬することの出來るやうに願はにやならん。西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なりと仰せらるゝのは此意味じや。初じめ釋迦如來から迦葉尊者。それから阿難陀商那和修と段〳〵と法をお傳へなされて。トー〳〵此日本の我宗の高祖大師に法がつたはり。それを斯やうにうけたまはる今の我〳〵のやうに。此後誰れでも彼れで

も生をかへ身をかへても三寶に歸依して恭敬禮拜するやう致さねばならん。此三寶に逢ふといふことは。中〳〵容易い因緣ではありません。實に第二節にもお示し下さる通り。人身得ること難し佛法値ふことは希なりでござります。然れば身を換へ生をかへても此三寶に値ふことを願はねばならぬ譯じや。値ひ難いことでなければ。何でこのやうに値ふことを願へ〳〵と仰せらるゝので。譬へは大海の水を一滴すくひあげるやうなものだ。どの位あるか知れない水じやけれども。何れの水も何れの水も。水には相違なけれども。掬する水はたつた一滴外ないのじや。其一滴の水はどのくらゐ深い因緣でもつて。すくひあげられたものじやか分りますまい。試みにおもふて御覽なさい。アメリカの桑港にある水をすくひ上やうとおもつても。オイソレとは參りますまい。地球上の水にたつた一滴の因緣をむすぶことは難いぞと佛は仰せらるゝ。じやから生をかへ身をかへても。いつまでも此三寶に逢ふことを願へと仰せらるゝのじや。明治二十九年六月十五日東北に大海嘯がありまして。宮城青森岩手の三縣下を害しました。其海嘯の及んだところは。家屋

人畜の嫌ひなく。一掃して卷き去り。同二十日の調査によれば溺死二萬七千八百廿人。なほ續〳〵とあらはれ來るにより。凡そ三萬五千人に上るべしと仝二十四日の諸新聞にありたるが。其慘實にいふべからずといふ。巖手縣の土木技手酒井鐵三郎氏は。海嘯の時同縣南九戸郡久慈湊に在り。均しく難に罹りて傷を負へるも。幸ひに死を免かれたる人なり。氏が同縣知事に提出したる具申書は。即ち自身遭難の實況を說きたることとて。慘狀目のあたり見るが如し。曰く六月十五日は朝來陰雲暗澹として。時々降雨あり。梅雨の候とはいへ。如何にも鬱陶敷非常に人意をして不快を感ぜしめたるも。市中家々舊曆五月五日に相當するを以て。端午の祝酒を催さんと。別に意に介する所もあらざりしが。晩景七時五十分に。水平の微動あるを始めとし。八時頃に至りて再び動搖あり。晩食に就く凡そ五分にして。震動の大なるを感じたれども。其度合は釣ランプの動搖は左程にはあらざりし。之に反して身躰の震動は益〻大なるを感じ。漸く其食を終らんとする頃ひ。（凡八時十分頃）忽然戸外庭前に於て。ピストルを發射したる如き音響を耳にし。益〻奇異の思を起したるが。八時十五分頃となるや。東方海

岸に當りて俄然鳴動を始め、汽船据付の機關振動の如き感あり、大ならず小ならず上下一定の微動にして。震動愈〻益〻強きを加へたり。依て瞰起して東方の海面を見るに。牛島と稱する島嶼の方面に當りて。大空朦朧として渺赤色を呈し。鳴動の方位も同一にして。右方々面には些の異狀なし。是ぞ天變地異の徵ならんと。立退の用意に掛るや否や、寄洲中に建設しある數十の納屋小屋轟然破竹の勢を以て壞倒し來りたれば。海嘯なり海嘯なり。速に戸外に出づべしと。叫びて駈け出したるも如何せん。四邊暗黑にして事物を識別する能はず。疇躇する中に身は既に數十丈の怒濤に襲はれ。兩足を拂はれて激浪に捲き込まれたるが。會々流失の土藏らしきものに衝突して。頭部を撲ち此時身躰の三四回回轉するを覺えたり。水上に泳ぎ出でんとすれば頭上には巨材と塵芥の滿ち〳〵て。身は只益々水底に押流さるゝのみ。依て到底水面に泳ぎ出ると能はざるを覺悟し。呼吸を止めて濁水を口にせざることを勉めたり。夫より五六分過ると覺ゆる頃。フト水面に首を擡げ出し。三四回呼吸するを得るや否や。又々一大家屋の前面に横はるあり。激流に逆らふ力なく。再び此廻轉中に吸ひ込まれたる後

は。只管身躰の疲勞を防がんことにのみ考へしが。併し最早此時に至りては。呼吸を止め得ず究迫の餘り。二三回濁水を吸收するや。苦痛煩悶少時も措く能はざりし。此時既に身躰の疲勞甚しく。人事不省となりしが如し。後微かに人の呼ぶ聲を聽くと感ぜしが。偶々人の來りて大材の間に挾まりしを救ひ揚げられたるが。何ぞ圖らん最初宿泊し居たりし湊村より。一里以外の久慈町大字門前琴比羅臺の下なる。一力寺に在らんとは。顧みて四邊を窺べば。只悲鳴慟哭の聲あるを聽くのみ暫らくにして人肩に憑り久慈町病院に向はんとし。下門前に至るや。警官數人に出遇ひ。警官等の最早醫師の來る筈に付暫時待つべしと告ぐるあり。或農家に憩ひ。午前二時頃に至り醫師出張負傷の檢査を受け。再び人肩にて午前六時頃久慈町病院に着したるが。實に不思議にも萬死の内に生を得たり云々と。ア、萬死の中に一生を得たるか。實に幸福中の幸福なり。三萬餘人も溺死する中に。氏の生命を保てるは實に不思議といふの外なし。今値ひ難き佛法に逢ふも。氏が三萬餘人中に一人の生を保てるとおなじことなり。誰れか値遇三寶をよろこばさらん。尙ほ末の末かけて。三寶に逢はんことを願はるゝがよろしい。歸依三寶の功德は宿殖善根の力によりて三寶に歸依し奉り三寶に歸依し奉るによりて。一切の功德を具足する次第なれば。うけ難き人身を受け逢ひ難き佛法に逢ふて發露懺悔の儀式によりて身心の懺悔をなし受戒入位の本懷に達することゝ返す〳〵も最勝の因緣なれば生々世々身を盡し心を盡して三寶に歸依し奉ることゝを願ふのが何より第一の肝要なる務めであります。

◎第十五席

（第十二節）

若し薄福少德の衆生は三寶の名字猶ほ聞き奉らざるなり何に況んや歸依し奉ることを得んや徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し或は外道制多に歸依すること勿れ彼は其歸依に因りて衆苦を解脫することなし早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脫するのみに非ず菩提を成就すべし。

前席におゐて御噺しにおよびましたる如く。三寶に値遇するといふことは。中〳〵容易のことでない。其證據にはと此十二節をお示し下さるので。世界無數の中には。ま

た無量の衆生が住んで居りますけれども。薄福少徳であつて御覽なさい。他の無數の世界は扨置き。好し此日本國に生を受けたからとて。不幸大野蠻のところへでも生れて居つた日には。迚も佛法のアの字でも聞くことは出來ません。また好しや此佛法の繁昌の東京の都こに生れたからとて。薄福のものは。佛法を承たまはることが出來ません。おもふても〳〵苦になることばかりじやから。徒づらに下らぬものに歸依して。まよひに迷ひを重ねます。實に憐然のいたりでございまする。ヤレ何處の稲荷さまじやヤレ彼處の狸きさまじや。扨は外道の制多といふ淫祠に歸依したり。錢のもうかるやうにしたい。わざはひの來ないやうにしたい。こんな鹽梅であたら日月を送つて居ります。制多といふは天竺の言葉で。支那には靈廟など申しますことで。外道といふて佛法の外の道をすゝめる族の祀る神さまでござります。こんなものは何ほど歸依したからと言つて。何で解脱が出來ませうぞ。只〳〵苦勞をかさねるばかりでございます。今時世の中を見わたしますと。何だか知らぬが下らぬ神さまが流行ます。善いことには兎角仲間の出來ぬものじやが。サテ面白ろいとか可笑いとか。又は無益のことには直き仲間が出來ます。天理教ゴサレ。蓮門教ゴサレ。ソリヤ耶蘇教じやソリヤ回々教じや。マア何といふことじやか分りません。こんな人達が何で三寶に遇はれませうぞ。お經には御親切にも此等のものをお戒しめ遊はされて。父母三寶の名字をも聞かずと仰せられた所もあるが。父母と云へばチヽハヽじや折角親子と生れて來ても父、とも母とも云ふことも知らぬものが。ドウして孝行することが出來やうぞ。マー現に犬猫などを御覽なさい。親となり子となつて生みつ生まれつ育てたり育てられたりするは。少しも人間と違ふた事はない。然るに其生み育てする方でも。自ら親じやと云ふことも知らず。況して父親に成た犬猫は。彼れが己れの子だとも知らず。子の方にも亦た其通りで父といふものゝあることを。本より知らんのみではない母と云ふ名も聞たことは無く只天然の有樣で乳房を含んで育てられるまでのことで。その乳房に用がなくなれば親とも子とも互ひに知らぬ其淺ましさは。ドンなであらふ。其れが犬猫ばかりでは無い。同じ人間の身に生れても。丸々教の無い野蠻の者は。父母の名字も知るか知らぬか。況して孝行など云ふことが有るとも知らぬ。淺ましいのが隨分世間

にないとは言はれぬ。マシテ況んや佛法僧の三寶などゝ云へる。殊勝なお名は一生聞かずに闇から闇きに迷ふてボチリとも教の光を見ずに三悪道に立返ッテ。苦患に苦患を重ぬる者は幾らあるとも知られぬ程じや。然るに斯くまで淺ましい犬猫同然のもので有ても。俚諺に云ふ苦しい時の神たのみで。病氣災難その他何事でも。苦しい悲しいことが起ると。遽かに神だのみを始める氣になるから。メコ〳〵色々な悪魔や鬼神が附け込んで馬鹿々々しいことに迷はされて。飛んでもないものを信仰するから。助かるべき命も助からず。免れられる災難も免れられないやうに成るのが多い。其事を高祖大師が愍れませられて。徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し。或は外道の制多に歸依すること勿れとのお誡めじや。そんなものに歸依せんよりは早やく三寶に歸依せよ。彼等のいふことは。何ほど皆さまが歸依信仰いたされたからとて。それで所逼と苦しい悲しいの逼つて來るのを。解脱とスッポリ拔けて菩提涅槃といふ。高尚なところへは踏み込めぬぞ。衆苦ともろ〳〵の苦しみを解脱するには。是非とも三寶の力でなければ。到底かなはぬことじやから。早く三寶に歸依いたして。衆苦を解脱するばかりでなく。菩提涅槃を成就せよとのお示しじや。譬へば山へ往つて蛤を掘るやうなものじや。何ぼ掘つたからとて蛤ぐりが出て來るものか。それと同じことで。山の神や鬼神に頼んだからとて。衆苦を解脱されますものか。然るを何程山には蛤りがないといふて聞かしても。どうしても山へ往くものが多い。實にはや困つたものじや。

明治二十九年六月廿六日の中央新聞に。天理教に迷つて居る。お利口な方の身の上かも書てありましたが。止せよ止らろよと何ほど御丁寧なおさとしがあつても。とうしてもそれ樣な教へに入りたいものか。其新聞の票題といふは。天理教會の世話人女房を盗まるといふので。名からして美くしくありません。其文に曰く。天理王の誤利生は大抵皆な斯樣なものと知れば。差して怪しむにも足らずと聞捨てにもならない不都合千萬な醜聞。淺草花川戸町一番地に田原屋といつて。搗米屋を爲て居る平澤濱吉女房おかんといふ夫婦者は。實子の無い處から勇次郎といふを養子に貰つて。育てゝ居るが。夫婦共中々の天理教凝りにて。殊に澤吉は前方同區山川町の支教會を設立する折柄。大に盡力せし廉に依り。今では同教會の世話人になり。非常な出世でも爲た氣になつ

て頻りに人々に入會を勸め居りしが。恰も其隣り番地の石工職に高橋松五郎といふ者ありて。女房のおまんは女髮結を業とし。夫婦共稼の處生憎一人の子も無ければ。先頃終におきのといふを養女に貰ひ受けしが。此兩家は平生格別親しくして居る處から。澤吉夫婦は松五郎夫婦に向ひ。天理敎會へ入會して天理王樣を一心に禱り。實子のお授けを願つては何うかと。口を酸くして頻りに說き勸めければ。石松夫婦もツヒ其氣になり。夫れよりは例も二軒の二夫婦が。一緒に敎會へ通つて往く內。何時しか石屋の松と米屋のおかんと。妙な交情になり果は手を取合つて何地へか姿を隱し。七日經つても十日經つても影を見せぬので。置き去られた石屋の女房と米屋の亭主は。ヤツキとなり近所の人々も俱々に八方行衛を搜索せしかど。皆暮れ在處も分らぬに困り果てゐる處へ。二三日前石松おかんの兩人は。突然ブラリと歸つて來り。白々しくも實は急に思ひ立つて。大和の本部へお參りに往て來たと。一向平氣で居るので。澤吉は有繋に腹に据え兼ねて。兎や角言ひ出したも大勢が仲へ入つて說き宥め。他の事とも違ひ物參りをして來たのなら。奈良ぬ勘辨をも爲て遣りなさいと。とう〳〵元の鞘へ納

めはしたが。澤吉は天理樣のお指圖なら仕方がないと口には言ふものゝ。其後は石松方へ出入は勿論口も利かず。石松の妻おまんもまた大きに天理王を怨らんで。再び敎會へ足向けもせぬといふが。天理敎會へ入つて此樣な事を厭ふは。溷へ入つて汚れるを厭ふよりもチと六かしい注文なるべし云々とありました。どうです皆さん。女房を盜られても天理敎が戀しうございますか。去りとは馬鹿氣て物が言はれぬ。斯樣なことは笑ですくふほど多いことでございます。じやから下らぬ神に歸依する勿れとお示下さるのじや。若し是に反して三寶に歸依し奉り戒法を授りて淨信を惱かにしたらんには必ず菩提を成就することである。故に此の三歸戒を授かります時には屹度餘の邪魔外道等に歸依せざれと戒しめられます。各々此の道理を篤と理解して後ともいはず今日只今此會座に於て未來永劫を盡して三寶に歸依し奉り外道の制多に從がはぬことを誓ふのが肝要であります。

◎第十六席

（第十三節）

其歸依三寶とは正に淨信を專らにして或は如來現在世にもあれ或は如來滅後にもあれ合掌し低頭して口に唱へて云く南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧佛は大師なるが故に歸依す法は良藥なるが故に歸依す僧は勝友なるが故に歸依す佛弟子となることは必らず三歸に依る。何れの戒を受くるも必らず三歸を受けて其後諸戒を受くるなり然あれば則ち三歸に依りて得戒あるなり。

サテ此御贊題に備へたは修證義の第十三節の三歸の樣子をお示し下さるので。御文相は能く分つて居ります。別にいふ程の事はなけれども。此淨信を專ばらにしてと仰せらるゝは。三歸を受けます人の爲めには。實に肝要なことであつて。清淨と奇麗潔白な。僞り飾りのない誠眞實直な信心の心ろを以て。此心の外に何んにもなく。專ばらと一筋に思ふて。それで一躰三寶の道理。謂ゆる釋迦如來が御出かけにならんでも。又說法をなさらんでも。無始劫來チヤンと備はつて居つて。火に燒いても燒けるものでなく。潰しても潰れんものじやといふことを。能く〳〵合點して。シテ其心ろを以て。釋迦如來御在世の時でも又は滅後でも。ソンなことにかけ搆ひなく。一躰三寶は

有難いものじやなと心得て。口に唱へていふには。南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧と斯やうに唱へるのじや。ソレデ南無といふは天竺の言葉であつて。支那の字に直すといふと。歸命ともいひ信從ともいひ恭敬ともいひ又は歸順歸投歸依などいふて。幾通りもありますけれども。ツマり歸は有難い道理に歸して。それに依りて安心するのじや。併し我宗の道理から言へは。高祖大師が歸順の義にお依りなされたから。茲には歸順と極めて置きます。どちらにしても道理に似て居るので。左して替りもありません。又宗々の習へで更に功德を擧げて南無無上尊と南無離塵尊と南無和合尊と申します。いづれにしても結搆なお名である。かやうに三歸を唱えます時には。清淨潔白な眞實誠信を持ちまして。シテ手を合せて御覽なさい。能く心ろが落付て。能い心ろ持になりますから。此時の心ろを何つまでも相續させたいものです。左すれば傲慢の心ろも起らす。人に向つて無禮にも。力身かへる氣遣はない。ソレから御文の佛は大師なるが故に歸依す。法は良藥なるか故に歸依す。僧は勝友なるが故に歸依す。これは後に三歸戒を一席お噺し申す時に委しく申すつもりですが。何に致せ御文の通り佛

弟子になりますには必らず三歸に依るのでありまして。何れの戒を受るも必らず三歸を受けてから。それから三聚淨戒も十重禁戒も受けるのでありますから。此三歸戒を受けますと。則はち三歸に依りて得戒あるなり。三歸は佛法僧を信するのであるから。夫れを信ぜんで外の戒を受くることは出來ん。依つて信じて三歸を受ければ。それで外の戒も受けられて。佛のお仲間入りがかなふとのお示しじや。譬へば宮内省へ往くのに門番に出逢ふたやうなものじや。コリヤ〳〵何處へ往くのじや。ハイ〳〵宮内省の内膳課の人に逢たふてまゐりました。ナニ内膳課へ往くと。内膳課はよろしいが。門鑑を持つて居るか。ハイ門鑑は持ちませぬ。ナニ門鑑を持たぬとな。門鑑を持たねば此門は通されぬ。イヤ夫れでは困ります。是非逢ひたいのでございますが。どうしても通して下さらぬか。左樣。門鑑がなければ怪しいものと思はれても仕方がなからふ。じやから此門は通されぬ。此門を出這入する人には。必らず門鑑を渡してある。それを持たぬものは何と言つても通されぬ。先づかやうな鹽梅しや。三歸戒といふて。佛法の信者でござるといふ。確かな通券を持たない人は。何で大切な諸戒を授けらるゝ

ものでで。故に三歸戒といふものは。佛法信者の通券といふてもよろしい。じやから三歸戒を受けぬ程の人ならば。必らず不謗三寶戒を犯して居るものじやに依つて。何で佛けの仲間入りが叶ひませう。明治二十九年三月十五日の萬朝報に。親子の財產爭そひといふ票題を掲げまして。面白いやうな小氣味のよいやうな。不思議な裁判沙汰が書いてありました。東海道靜岡在の小曾木村といへるに山太作右衛門といふがありまして。隨分富有な人でありましたが。大した身代を殘り少なにいたしました。ナゼ其やうな不運な目に逢つたかといへば。此人馴ない相場に手を出しまして。二年とたゝぬうちに失敗の跡をあらはしたのでありますが。けれども腐つても鯛の骨で。マダ〳〵田地も二町三畝といふを持つて居ります。負債の爲めに之れまで取られては堪らぬと考へまして。嫁にやつた娘の聟の名前にして。何知らぬ顏をして居りました。然るに二月の下旬に至りまして。フト一山當りましたから。大くの負債を片付まして。シテ娘の聟に嘶しまして。以前の田地を返して呉ろと言ひますと。聟は其樣なものを預かつた覺えはないと言ひました。利かぬ氣の作右工衛はムッと致しまして。ナニ覺えが

ないと。飛んでもないことを言ひくさると。突然聟の胸倉を取りまして。聟舅の間柄で。預かつたものを知らぬの覺えはないのと。不屆き千萬な奴もあるものだ。サア今一度吐して見ろと。息卷荒く怒鳴りますのを。聟は平氣の平左衛門で。殺すなら殺して呉れ。預からないのはどうしても預からぬと。言ひさま振り拂つて舅の腰を二ッ三ッ。骨も折れよと叩きました。スルと作右衛門は這〳〵の躰で逃げかへりまして。直樣事の由を某辨護士に噺し其上田地取戻しの訴へを靜岡裁判所へ持出しました。然るにいよ〳〵裁判當日となりまして。原被兩造が法廷へ出ますといふと。作右衛門憎さも憎しと思つたゆゑか。腰掛で直ぐ喧嘩をはじめまして。又聟殿にしたゝか叩き付けられました。巡査や小使の爲めに漸やく其場を治めて貰ひ。其中に呼び込みになりましたから。法廷へ連れ立ちて並びました。判事は尋ねて申しますには。作右衛門。其方が聟に預けたといふ田地は何程か。ハイ二町三畝でございます。それから被告は之を預からぬといふのか。ハイ左樣にございます。ウヽ左樣か。然らば被告は固より己れの田地じやな。御意の通りにございます。然らば地所の價額は何程じや。何ほど租

税を納めて居る。只今確と覺えては居りませぬ。ムヽ覺えて居らぬか。原告作右衛門は承知して居るか。ハイ能く承知して居ります。何程斯々を拂ひます。地價は是れ〳〵でございますと。ズヽ〳〵喋くつて仕舞ましたが。サア是れか元になつて。辨論も何にも角も。大抵聟の負け色でございます。即刻裁判と言ふので。即座に判事は宣告いたされまして。被告の敗訴と定められました。皆さま如何でございます。偽はりものは世間の法律でも通しませぬ。況んや不謗三寶戒を犯す罪人を何んで素通しをやらせませう。じやから三歸を受けまして。佛法の通券を貰ふのが肝要であれば。各々三寶に歸依し奉りて受戒入位の本懷を遂け未來永劫佛祖の訓戒に從ふことが專一であります。

◎第十七席　（第十四節）

此歸依佛法僧の功德必ず感應道交する時成就するなり設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も感應道交すれば必ず歸依し奉るなり已に歸依し奉るが如きは生々世々在々處々

に增長し必らず積功累德して阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり知るべし三歸の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりといふことと世尊證明しまします衆生當に信受すべし。

サテ此御贊題の御文は修證義の第十四節。三寶の功德のあらはれて來る。大層なことの道理をお示し下さるのじや。歸依三寶のことは前席にも申した通りじやが。其功德はどんなものじやといへば。三寶といふものは一躰三寶の道理を以てすれば。不可思議にして言舌のよく及ぶところでない。それが此方が淸淨潔白な誠心を以て。有難い道理のあるものじやと會得して。成ほど此道理には歸依せんではならぬと知りたから。これに歸依をいたす。歸依をいたせば先方には何樣でもなる自由自在な德分が具はつて居るから。何時何日と定めはない。今でも後でもそんな差別はない。直ぐ應じて下さる。應じて下されば此方は直ぐそれを感して自身と三寶と少しも替りのないことになる。茲の樣子を感應道交したといふので。能禮所禮性空寂。感應道交難思議じや。丁度影法師と二人のやうなもので。所禮と此方から頭を下ぐれは能禮と先方でも辭儀

をする。それが兩つながら性を尋ねて見れば不可得じや。不可得の品物じやから。一方に寄つて極まつて居らぬ。柳じや櫻じやとも極まらねば。瓦じや石じやとも定まらぬ。定まらぬものじやに依つて能禮も所禮も一つになつて。活きて働らく道理といつたら。難思議で言葉や筆に言はれたものてはない。明月が皎々と大空に懸かつて居つて。隈なく照りわたる其時分に。濁水でも淸水でも。其樣な區別は更にない。どのやうな水溜りへでも月は厭ひ嫌ふことなく。影を宿して大空のものと水の中のものと少しも替らぬ姿をあらはす。じやから設ひ天上人間地獄鬼畜なりとも感應道交すれば必ず歸依し奉るなりとのお示しあるのじや。是れが三歸のあらはれた時じや。ナ。天上の衆生で樂しみなことばかりで日を送るものも。萬物の靈長だと威張て居る人間でも。貪慾のふかい餓鬼でも。瞋恚のふかい修羅でも。愚痴のふかい畜生でも。苦しみばかりで樂しみのない地獄でも。如何なる濁水のやうな汚ない厭やがらるゝものでも。一たび月の影のうつるやうに。もろ〳〵の衆生の心水に映つて來たら。どうしても其ままには置かぬ。段〳〵と佛智を發得して。終に釋迦如來同樣になるのじや。茲の樣子

を已に歸依し奉るか如きは在々處々に增長し必らす積功累德して。阿耨多羅三藐三菩提を成就するなりと仰せ下さるのじや。阿耨多羅三藐三菩提とは無上とて是上もないといふこと。三藐三菩提とは正偏知とも正眞道とも。幾つも名こそありますれ。つまり明らかな道といふので。少しも暗らますところのない。道理の通らぬなどいふことのない。眞つ直ぐな道といふので。此道を成就するそといふのじや。言ひかへて見れば佛法を成就するのじや。依つて三歸の功德は最尊最上甚深不可思議と知られたであらふ。此理は世尊證明しまします。確かに印紙を貼用して御保證遊ばすのじや。世尊とはお德に就て十通りの次第がありますが。これは其中の一つであつて。世界廣しと雖ども。其中で一番尊とひものじやといふほどのことじや。此尊とひ釋迦牟尼世尊が保證人となつて證明して下さるのじやから。少しも間違ふことはない。二の足踏んで疑がひなど起してはならん。衆生當さに信受すべし。信じて受けてまつるがよろしい。此やうに功德を並べて。シテお勸め下さるのを。何で疑がひを起されませう。譬へば牡丹餅の功德をいふて。厭じやと冠りをふる酒飲

みにすゝめるやうなものじや。マア一つ喰つて御覽なさい。其樣なに不味ものではないから。馬などはあんな大きな身躰でも。彼れが空腹を感じた時に。僅かに一つ喰べさせても。夫れで元氣ついて何處までもあるくといふ。大した功德のあるものではありませんか。お宗旨は違つても一つあがつて御覽なさい。捨たものでもありませんからとて。骨を折つて喰べさせると。それが始めでトー〳〵牡丹餅を好きになるやうなもので。此樣な人がいくらもあるものじや。常には下らなく思つて居つて。功德を聞いて始めて喫驚りすることが多い。水はいくらもあるものじやが。水の功德を知るものは少ない。一たび水の功德を知れば。無暗に麁末には遣はれない。麁末に出來ぬばかりでない。頂いて呑む氣にもなる。佛法といふものは水と同じて。世間に充滿して居る。ありのまゝの道理を敎ゆるのじやが。それを兎角に嫌ふてならぬ。能く味はひて見るがよろしい。明治二十八年四月二十七日。東京神田一ッ橋の大學講義室に晝きまして。通俗講談會を開かれた時に。長井理學博士が食鹽のことをお噺しありましたが。イヤ聞て見て驚きました。その說に曰く。大凡鹽は工業用に使ふものと人間の生

活用に爲すものとに分ち得べし。而して食鹽は人間の生活に必用なるのみならず馬や牛や羊の如き動物の生活にも欠く可らざるものとす。今ま人間が一日幾程の鹽を食するやといふに大約十七ガラム乃至二十ガラムを食す。之を一ヶ年に見積れば人間一個七キロ半の食鹽なくては滿足に生命を繼ぎ行くとはならぬ勘定なり。以て思ふべし。鹽の人間生活に幾程大事なるものなるを。其他鹽の用せらる範圍を畧言せば時に植物の肥料となる事あり。又た工業用に消費せらるもの夥し。下等なる陶器物を燒くにも用あり當時冶金の上にも無くて叶はぬものとはなれり、更に鹽の一分子の世に用あるものを擧ぐれば苛性ソーダは染物製紙(印刷用)に用ゐられ。炭酸ソーダは石鹼に最も多く用ゐられ。クロルサンカルはマッチ製造に大なる用を見。ロルカルによりてコルタルを製し得べし、尙ほ仔細に列擧せば鹽の工業用となるもの頗る多し。鹽の社會に用ゐるもの豈大ならずや。惜むべし。是等の物多く西洋諸國より輸入し來れる事を。昨二十七年の輸入統計を見るに。苛性ソーダの輸入せし量四百六十二萬七千六百四十二磅其價二十一萬五千四百六十八圓餘重炭酸ソーダの輸入量二百二十五萬幾千磅其他

四萬六千九百六十五圓餘。クロルサンカルの輸入數二百四十九萬二千四百五十九磅其價八十四萬六千百四十圓三十八錢。以上輸入するものに於て重もなるものを擧げたるのみ。かく多大の輸入を外國に仰ぐ我國の食鹽景況は如何と曰ふに一府三十二縣六ヶ月間に殆ど百萬石の高を製造す。人間一人四匁づゝ食すとするも尙ほ四百四十萬石は餘計な鹽なり。この四百四十萬石の食鹽は果して何處に需用せられ行くぞ。別に外國へ輸出すといふも聞かねば隨分不思議千萬なり四百四十萬石の餘計な食鹽を有する鹽國にして百十八萬七千九百幾十圓の多額を外國に拂ふ。我等化學者の遺憾に堪えざる所なり。鹽の產出多量なる我國にして特に西洋に輸入を仰ぐ所以のもの畢竟化學應用を勉めざるもの其第一原因なり。鹽一石の價一圓五十錢西洋も之と大差なしと雖も。純粹のキロルと爲しては外國に於ては一合一錢八厘。西洋諸國は一錢五厘にて能く之を製するもの抑も何故ぞ。單だ西洋諸國が應用化學の上一段進歩せるものあるを以て然るのみ。現に我國に於て製せらるゝ食鹽を試驗するに。硫酸マグネシアムの多きに驚く。看よ是れ我國の食鹽を水に融して見たものなり。この濃に濁て居るならずや。是

れでは幾程汚いとが嗜な支那と雖も喜んで我食鹽を買ふとはなかるべし。我國は素と食鹽產出國なり。深く搜索せば啻に海鹽のみならず山鹽も發見し得べしと信ず。仙臺地方に鹽分を含める池を見るといへば則ち食鹽素を有する徽候なるべし。食用には海鹽を用ゐずとも工業用には山鹽にて充分なり。石油の產するところ必ず其處に山鹽あるが世間の例なれば。能く探り來れば我日本をして立派な鹽產國たらしむる豈期し得べからざらんや。戰爭に勝を得たるのみを以て漫に傲る可らず。今日の膨脹を好機會として更に化學應用の上にも一段の革新を與へよ云々とお噺しありましたが。つまるところ只大したものじやと恐れ入る外はない。我れ等は常に佛法の中に住んで居ながら。其事を知らぬから。これを何とも思はぬのじや。知つて見たら。只功德に恐れ入る外ありません。先つ今席は是で。

◎第十八席

（第十五節）

次には應さに三聚淨戒を受け奉るべし第一攝律儀戒第二攝善法戒第三攝衆生戒なり次には應に十重禁戒を受け奉るべし第一不殺生戒第二不偷盜戒第三不邪婬戒第四不妄語戒第五不酤酒戒第六不說過戒第七不自讚毀他戒第八不慳法財戒第九不瞋恚誡第十不謗三寶戒なり上來三歸三聚淨戒十重禁戒是れ諸佛の受持したまふ所なり

拙僧は都合によりまして。此諸戒を一席づゝお噺しをいたそうとおもひます。依つて更に前席の三歸戒を操り返すやうなことになりますが。何卒ぞ少しお忍び下され。

歸依三寶

前席までに三寶のお噺しはすみましたが又茲に改めて歸依三寶のお噺しをいたすやうなことになりました。併し善いことは何遍も聞くがよろしい。それで何ゆゑに改めて歸依三寶をいふかといふのに此後の諸戒に就ては。一席づゝに分けまして。不殺生戒なら不殺生戒一席といふやうに。皆わけて仕舞ましたから。夫故に順を定めて茲に三歸戒を置きますので別に仔細はありませんが。只前に申したことを。又更に言ふやうになるのが。少々御退屈かと存じます。併し只今も申す通り。よいことは何遍聞いても何遍噺してもよいもので。何度も噺したり聞たりするうちには。フと合點もゆくこ

とがあるものだ。サテ今順を立てお噺しに及びますに付ては。一寸戒法のことを言ふて置きたい。サテ戒法とは悪いことを止むるの儀である名じやから。佛樣が態ざわざ七面倒に學者らしく物知りらしい顔をして。凡夫の眼に大層らしく見せかけんが爲めに。意を搆へてお拵らい遊ばしたものかと思ふべけれと決してそうではない。是れは是れ本性本德のまゝをお敎誨下たさるので。萬事萬物人間四生。上み佛界の方々より下地獄の衆生までが。皆持つて居る德相である。夫れを迷ふて居りて知らないから佛が憐れみを深く心にかけさせられて。本德本性を破るのは悪るいぞよと仰せられたのが。此戒法じや。故に性戒ともいふのじや。實に此世界の萬事萬物をおのれの身躰おのれの心ろとして見たらば。殺すべき衆生もなく淫すべき人もなく。偷むべきものもなく腹を立つこもとない邪見を起す氣遣ひもないではないか。殊に此の本性本德を戒法といふのは。佛が御出世ならんでも無始刼來持つて居る德性じやから今でも我我が此れが悟れて。其まゝを皆さまにお諭し申せば。我れも佛けなのじや。皆さまが此戒法の道理が分れば皆さまも佛けなのじや。佛とは此本性本德を明らかに悟られた

人をいふので。別に佛といふものはない。じやから本性本德が直ちに戒法で。其戒法を本德本性と明らめたのが佛じや。一口に言へば佛とは戒法の事で。戒法とは本性本德の事じや。其本性本德とは職分といふことになる。柳の緑は本德本性で彼の職分じや。花の紅あは花の本性本德で彼れの職分じや。其職分は誰から鹽梅を容れやうもない。赫奕と光りを放つ本然の佛けじや。而るに一類の人がありて曰く。戒法を持つは甚だ六ケ志い事じや。末世の衆生は中〳〵持つことは出來ないと。其言葉は實に衆人を馬鹿にした失敬な申し分じや。衆人を地獄へでもやる考への人に違ひない。毒言にも程がある。何がゆゑに本性本德に背かぬのが六ケしいか。却つて犯すのが六ケしいではないか。殺生するには。道具も入用なれは骨も折れる。不殺生に何の道具が入用で何のやうな骨折りがある。偷盜をするには人目も忍び身心を苦しませる。不偷盜に何の人目を忍ぶことぞ。何の身心を勞することぞ。其餘の戒法少しも守れぬことはない。却つて犯すのが六ケしいのじや。シテ戒法の相を能く〳〵見よ。不殺生に致せ不偷盜にいたせ。殺すなといふでもなく。盜むなといふでもない。殺すことの出來ないや

うになつて居るのが不殺生の德相。偷むことの出來ないやうになつて居るのが。不偷盜の德相じや。其餘の戒法も皆此通りじやじやから。これを犯すのは。逆にはどうしても曲らぬ指を。無理無躰に曲げるのじやから。メレは悪いぞ。自分が其やうにされて見ろと敎ゆるまでじや。三寶は正しく此道理を敎えて下さる導師じや。サテ前〳〵より申す通り。三歸戒を改めて申しますが。我宗の信徒が。この戒法を受けて。佛の御位に入りまするには。必らず先佛法僧の三寶に歸依するのが。受戒の法則である。これを三歸戒と申すのは。佛に歸依し。法に歸依し。僧に歸依するといふ三つの歸依が。十六條の戒法の中の。最初の戒法であつて。則ち三つの戒となるので三歸と名けますのじや。これは受戒のときには今身より。佛身に至るまでは必ず三寶に歸依するといふ。誓をたてるのじやに依つて。その名前がつくのでございます。高祖承陽大師のお言葉に。各々の佛の名號を稱念せんよりは。すみやかに三歸をうけたてまつるべし。愚暗にして大功德を。空しくすること勿れ。とあるは。たゞ御一尊の佛の御名號のことじや。或は單に阿彌陀如來の。御名號をとなひたり或は唯藥師如來の御名號を

のみ稱ひたりするのは。あながちあしきことではなけれども。それがために他の佛を忌みきらひする樣なことがありましては。甚しき邪見におちゐるによつて。御一尊の佛の名號をとなへ念ずるよりは。速に三歸戒を受けたてまつりて。三寶に歸依せよとのお示じや。もしも三寶の上に於いて。妄りに取捨の見を起して。忌みきらひをいたしまするやうでは。それこそ此上もなき。愚痴迷暗と申すもので。自ら三寶の大功德を空く失なふ譯じやから。そんなあやまりの無きやうに。急いで三寶に歸依せよとの。お示しあらせられたのでございます。この三寶と申すことを。ザットお話しいたしますれば。初めの佛といふのは。三世の諸佛を總べ括つた言葉でありまするが。我宗では諸佛とは釋迦牟尼佛と信受するが。正義である。依つて佛に歸依するといふは。釋迦牟尼佛に歸依したてまつるのであります。釋迦牟尼佛に歸依し奉るのが。取も直さず十方三世の諸佛に。歸依したてまつるのじやと合點せねばなりませぬのじや。二つに法とは佛菩薩の御說遊ばされたる一切の經律論義を指したるものである。元來佛法は一味平等と申して。差別はないのじやけれども。一切衆生の根機が區々で

あるからして佛の說きたまふ所の法門も。自から種々にわかれて。遂に大乘小乘又は自力門他力門抔といふ名がついたとのである。佛の御本懷は唯一乘の法にして。一大事因緣を說き示し。衆生をして悟入せしむるの外は無いのであります。それゆへ法華も華嚴も般若も皆佛道に證り入るの法則であります。苟も己れに邪まなる。見解さへ無ければ盡く無上菩提の指南であるから。盡未來際歸依し奉らねばならぬ。三つに僧とは。佛の正法を相傳して末世の衆生を敎導する善知識のことであるじや。大乘の諸菩薩方や。三國歷代の祖師方は。申すに及ばす。苟にも佛になり代つて。衆生を敎導する程の人は。皆な僧寶であります。佛法如何に最勝とは申せ。之を傳ふる者が無ければ。其功德を世の中に。顯はすことが出來ぬじや。依てドコまでも。僧寶に歸依せねばなりませぬ。歸依といふは恰ど子供が其父母に。一身を投掛て。養育を受くるが如く。人民が國王に萬事を打ち任せて。まもりを仰ぐが如く。自分の身と心とを。佛法僧の三寶に投掛け打まかせて。少しも私の量見を容れず。唯た三寶の加護を仰といふが。乃ち歸依の意味でございます。夫から此佛法僧をナゼ三寶といふかと申すに。我れ〳〵人間仲間で譬へて見れば。丁度金錢のやうなものでござります。謂ゆる地獄の沙汰も金次第で。隨分神聖な法律をさへ曲ることが出來ます。苦を變じて樂とすることも出來るし。馬鹿者も怜悧となるし。無學者も學者となつて。大先生の真似も出來る。何が寶と言つたつても。此くらゐ重寶なものはありません。世間を見渡して御覽なさい。馬鹿でも利口に見ゆるのは。金の威光より外にありません。何でも此金で買ぬものはありますまい。此くらゐ尊い金でも實に買はれぬ品物は。たゝ〳〵佛法僧ばかりじや。シテ又只でも所有品とすることが出來るとは。實に不思議な寶ではありませんか。金では迚も買はれまいから。只で差上るとて。大きな施こし店を出して置れるけれども。貰ひ人が誠に少ないとは何たる不思議か分りますまい。實に貰はぬその心根がわかりません。早やく此無價なる三寶に歸依して。世の中の道理を會得したなら。これ程仕合はありませんぞ。明治二十八年九月廿三日の大阪毎日新聞に。妾に成込で寶物を手に入むとすと標題を付て。應化菩薩の短冊を取り戻した噺しがありましたが。其文に曰く。紛失したる寶物を手に入れむとて。種々に身をやつし苦勞

するといふ筋は。演劇や小説に能くあるが。茲に家重代の寶物を手に入れむとて。養ひ娘を妾にさせたり。自ら後家に戀を仕掛たり。種々な苦勞して。漸う寶物を手に入れた奇談あり。府下東成郡北平野邊に住て或る所へ勤むる中路仙二郎といふは。當と和州郡山の藩士にて。父なる人は爾も祐筆とかを勤め。殿の用ゐも厚かりしに。思ひ懸なき失策出來て。流浪する事となり。夫等が原因となり行きしが。フト病褥の床に着て次第に重り。六十何才といふ年に不足はあら金の土にかへらむとする折から。仙二郎を枕邊へ呼近け。和郎に未だ詳しう語らざりしが祖先より傳りて。當家の重寶となりゐる中將姫執筆の短冊ありしが官祿を離れし砌り。或人より借受し十兩の金を戻す事のならざるより。泪を呑でその短冊を抵當に渡し。頓て取戻さむ考へなりしも。金の都合悪くして。其儘となり。聞けば夫より夫へ渡り。今では行方も知れずなりしとの事。我存生の中所在を探り出して。取戻す心得なりしも。其儀かなはずして目を閉る殘念さよ。今にも我の死したらば。香華に位牌埋めんより。失せたる短冊を佛壇へ供へ呉れるが一の手向。無理なる遺言にはあれど。奈何にもして望みの品を取戻しくれよと頼みて。息を引取しゆゑ。仙二郎は身を粉にしても件の短冊を父の位牌に供へんものをと。頻りに行方を尋ねゐたれど。絶て所在の知れざるより。大きに力を落したれど猶ほ耳底に遺りし父の言葉に勵まされて。行方を探り居りたれど。身に貯金とてあらぬ悲しさ。之のみに日を送る譯にも行ず。先づ何れへなりと身を落着け。徐ろに寶物の詮議せんと。奉公口を求むるうち。傳手ありて高取藩の足輕となり。供待部屋の雜談にも。便や得むと耳寄せゐたるに。何時しか世は維新となりて。藩士は士族てふ肩書を得たれど。身は足輕の事とて祿券の恩典にも浴されず。實ては短冊のありしならば。父の事をも陳て士族の片端にも加へられんに。偖も殘念な事なりと。泪に分ぬ道踏分け。女房と共に大阪へ來り。其所此所と勤め歩きしうへ。當時の所へ通ふ事となりしが。大阪といへば諸國の人の集まるばかりか。古物を愛する紳商も多く。夫等の人の手に買れて。床の眺めになりゐる事もやと。手を盡して搜索するうち。婦しや短冊は軸物になりて。西玉造なる或る質屋にある事の分りしより。奈何にもして手に入れたしと思ひあせれど。先方では重寶として藏深く秘おくとの事ゆゑ。容易に

取戻す樣もなし。此上は主人の嗜み物を聞きて。好な道より手ぐり寄らむと。好み物を探つて見れば。圍碁にもあらず茶の湯にもあらず。容貌よき婦人なりとの事に。又た一腰折れて腕組みなせしに。天の與へか先方の主人は。近ごろ妾を探す由ゆゑ。娘のお谷といふに能く〳〵因果をふくめ。泪を呑んで頼み聞かせ。先方へ見せたるに。思ひしよりは氣に入て。當日より留おかれ。お谷〳〵と愛されるものゝ。短冊の事を言ひ出す機會なきに苦しみ。お谷は歸りて相談すると。爾いふ事なら斯ゝせよとの教へに。お谷も承知して先方へ歸り。主人へは幼少より和歌を好むものゝ如くいひなし。和歌の稽古をさせ呉れよと頼みしに。原よりお谷に目のなき事とて。主人は即座に承知して和歌の稽古をさせ初しのみか。少し目の明くやうになれば好き物を取すべし。と言はれて。お谷は心に喜び之ぞ適切例の短冊を呉れるものならむと。窃に父なる仙二郎の許へ言ひ送りて。頻りに樂しみゐたりけり、斯てお谷は旦那の某が。今に好物を與るといふは。適切中將姫の短冊であらうと喜びながら。一心に和歌を勉強してゐたところ。恐いもので一ケ年ほどの間にソッキリと。上達し。一寸が下女が坐睡ても。

水鳥のさわぐ音さへ白川に。下蜵や夜船こぎ上すらんなどゝ。詠るやうになつたので。旦那も稽古のさせ甲斐ありと。ホク〳〵喜び或る日お谷に向ひ。そなたも強う和歌が上手になつた。モウ見するとも善惡が分らふ。之は我家に先祖から傳はつてある。古本なりと取出して來た帛紗づゝみは。短冊として見えぬ嵩ゆゑ。お谷も不審の眉をひそめ。帛紗の結び目解間おそしと。中を見れば嵩の高きも道理。大本の古今和歌集にて。好事家に見せたらんには。表紙の色にも咽鳴さんと思ふばかり。古びたるものなれど。お谷は望みあつての僞風流。浩る物を得んとに非ず。願ふは一の短冊のみ。その短冊を手に入れんとて。學びたくもなき歌道を學び。詠たくもなき和歌を詠み。今日が日までもありたるに。得んと望みし短冊は。見る事もならず願ひもなさぬ古今集を與へむと言はるゝは。いと本意なしと思へと。然る如き顔も見せられず。わざと嬉し氣にしてその古本を貰ひ受け。父にも見せて喜ばしむと。程よく言ひなして北平野なる宅へ歸り。父の仙二郎へ云〻と話せしに。仙二郎もいたく力を落し。此上は時機を待より詮なしと言ひなぐさめて。お谷を質屋へ歸したるに。其後質屋の主人といふ

は。思ひ懸なく病死なし。お谷はわづかの泪金もらひて實家へ歸り。折角の望みも水の泡とならむとしたるに。お谷はさかしき者ゆゑ。斷むとしたる縁をわづかに繋ぎ。お出入だけはさせ下されと。後家のお何に頼みて。相變らず出入するうち。父に說て先方へ親附せ。いつとはなしに母に云々といふを。母も娘の發明を稱へ。且つは道ならぬ事と思ひど。夫に謀りごとをすゝめて。後家のお何と怪しき縁を結ばせたるより仙二郎は思はぬ手蔓を得て。後家へ短冊の事を頼み込しに。後家は風流氣もなき。事ゆゑ。夫は何より易き事なり。有て益なきその短冊。探して持歸らるゝが宜しとの言葉に。仙二郎よろこびて藏へ入り。首尾よう軸になりたる短冊を探し出して貰ひ受け。之さへ有らば士族にもなれむと。いそ〳〵宅へ持歸りしは。五六日以前の事なりと小說ならば此所めでたし〳〵などゝ書ませうが。世間にいふ實でさへ此通りの骨折や恥ぢを忍んで取り戻すのじや。それを恥も忍ぶ苦しみもなく。肝膽を碎いて謀りことを廻らすでもなく。無價といふて尊くて價ひつけられぬ寶を只遣ると言はるゝのに。請取らぬといふ了見では。まことに佛けに濟みますまいかな。早くお請取なさるがよ

ろしい。一たび三寶の名字を聞くときは地獄も忽ちに破れて清涼の樂土となる況んや今身より佛身に至るまで盡未來際此の三寶に歸依し奉ること並大抵の値遇ではありません生々世々の善根によりて因緣會遇の今日を得たること實に希有最勝の功德なれば。各々急ぎ發心して三歸戒を受けられよ。

◎第十九席

三聚淨戒

この三聚淨戒と申しますは。第一に攝律儀戒。第二に攝善法戒。第三に攝衆生戒の三つを名づけて申しますので。第一に攝律儀戒とは。六道より上みは菩薩聲聞と。いづれの境界にあるものなりとも。惡しき事といふたら。何に依らず爲すまじぞと誓ふ戒である。第二に攝善法戒とは。世間出世間を問はず。法と名のつく事といふたら。一切の法は何でも犯さぬと誓ふ戒である。第三に攝衆生戒とは、四生六道の一切の衆生に。利益を與へて害あることは何事に限らず爲まじぞと誓ふ戒法である。ソレから前

席に申しのべたる歸依三寶戒は。先づおのれの依りかゝるべき歸依處を定めたものであるが。此三聚淨戒は我れ〳〵が行ふて往く道の根本であるので。一切萬行の礎じや。ソレから三聚淨戒さへよく〳〵承知が出來て。これを守ることが出來たならば。それで十重禁が其中に籠つて居るのじやから。此戒が實に大切な戒である。丁度老子の開卷第一に。玄之又玄衆妙之門といふてある如く。衆妙之門から悉〳〵老子の意見が出たやうな鹽梅に。此三聚淨戒の三つから。他の戒法が生るゝのじや。指月禪師は禪戒編といふを御著述あそはされて。其中に此三聚淨戒の大綱をも示しなされてあるが。其お言葉に仰せられてあるには。當に能く其心を堅牢にし。其過ちを克越實し。其事を省察して。少惡を見て作すことなく。小善を見て作さゞることなく。必らず勤めて遂に度生に歸すべし云々と。それで當に能く其心を堅牢にしとは。此戒法を受けたる吾等は。能く其心を堅牢にすといふて。必ず自分の心を手堅く大丈夫にして置かねばならぬ。おたがひの心といふものは飜に動き安いものであつて。少かに色を見聲を聞く時は。はや其方へ心をうばゝれ。終日終夜五欲六塵の境に對して。惜い欲い惡い可愛いの煩惱に駈立てられて。一日片時も心を安じて菩提の行願に住まることは成り難いものである。或ひは金銀の奴となり。或ひは官位の牛馬となり。私情の爲めには天地の公道をも顧ず。欲望の爲めには古今の正理をも亂ださんとす。かやうなる輩らは滔々たる天下決して奇異きことではないです。折角受け難き人間の果報を受けながら。是の如く徒らに生涯を送るに於ては。たとひ百歳の壽命を保つとも。一寸の功をも樹つることが出來ませぬじや。その次に又其過ちを越實し。其事を省察して小惡を見て作すことなかれとは。萬一自身の思想又は爲した業が惡るかつたとおもふならば。早やくその過ちを改めてふたゝびせぬやうにせねばなりません。又は每平生に爲すことが。善事か惡事か。利になることか利にならざることか。深く省察と考へた上にも考へて。尙ほ疑かひがあるならば。師匠なり朋友なりに問ひ糺して。其上で實行するがよい。又次に小善を見て作さざることなく。云々と仰せらるゝは。善いと極つたことならば。縱令人の顏に墨のついて居るのを教えて遣つても宜しいことじやが。それを教えぬでは誠に濟ぬことじや。此お示しが丁度三聚淨戒の三つに揃ふの

じゃ。そも〳〵菩薩たる者は必ず四つの廣大なる誓願をおこさねばなりませぬ。第一に衆生無邊誓願度と申して。衆生は元より無邊なれども。未來際を盡して之を濟度せんとの誓願を起すこれが攝衆生戒であります。第二に煩惱無邊誓願斷と申して。吾人の心に起る煩惱の病は數限りも無いことで。之が爲に種々な惡業を作り。六道生死の大海に浮沈を致すのでありまするから。是れ又未來際を盡して斷絶せんとの誓願を起すので。之が攝律儀戒であります。第三に法門無量誓願學と申して。吾人の行ふべき善根功德の法門も。三千の威儀八萬の細行抔と云ふて。中々かざかも無い事であります けれども。未來際を盡して其法門を學び善根を行はんとの誓願を起すので。これが攝善法戒であります。第四は佛道無上誓願成と申して。佛の道は此上もなき偉ときことであるが。未來際を盡して之を成就せんとの誓願を起すので。これは最後の大目的をあげたものであります。さすれば煩惱を斷じて惡業を止むるも。衆の善を行ふて菩提を莊嚴するも。衆生を利益して功德を成就するも、皆な佛の道に回向して究竟する所は。銘々御互が佛の三身三德を圓成するが。佛敎信者の最大目的と申さねばなりませぬじゃ。且つこの三聚淨戒は前にも申せし通り、一切の戒法の根本でございますに依て。佛戒のうち何れの戒法にもこの三種の淨戒が具はつて居ります。若しこの戒法が具はつて居らぬならば。それは佛戒とは申されませぬのじゃ。例せば十重禁戒の第一が不殺生戒であるが。この一戒にも自つから三聚淨戒が具はつて居るです。先生き物の命を害せぬのが攝律儀でその生き物を憐れんで慈悲の行ひと爲すが即ち攝善法である。シテ前の二たつの戒法に依て。一切の衆生を敎へ導くが乃ち攝衆生である。かやうに申しますると大層六ッかしいやうに思はれますが。この三種の戒法は元來一躰にして。決して離るべからざるものじゃに依て。一戒を持てば自づから其の手元に三通りの戒が顯はるゝじゃ。前の不殺生の如きも。凡そ生ある者の命は恣まゝに害すべき筋のものに非ずと申もふ時は其思惟の當躰に殺生を止むるの德と慈悲の念と。衆生を保護し利益するの志とが具はつて來るじゃ。譬へば軍旅のやうな者じゃ。双方その執るところの主義を異にするが爲めに。共に已に不利を言ひ張り。イヤそれは貴國の無理と言ふものじゃ。そんなことをおつ仰れば仕方がない。自國の權利を守る爲

めには軍旅に訴へても。自國の國民を保護せねばならぬと。それから軍を起して。二年三年もまたは十年も二十年も干戈を連ねて。コレではならぬと双方和議をとゝのへ。チャンと約束を定めて守るところを明らかにし。軍を止めて國民安寧になるといふよふなもので。是れが政府の職分といふである。此三聚淨戒の本相は。丁度かやうな理悔に。他國に悪るいことをさせぬやうに。軍さをおこして。又和議をして双方法を定めて之を守り。多くの人民が利益を蒙むりて安堵するごとく。軍一つで此三つが揃ふ。ソレヲ國も泰平となれば。人民も安堵して業務を取ることが出來る。明治二十九年七月三日の萬朝報に。夫婦の奇遇と題をつけて。面白き雜報を掲げました。其文に曰く。本所區御右衛門町廿二番地に住む近藤いよと云へるは。今より六年前横濱尾曳町の或る銘酒屋に勤めて居るうち或人の世話を以て。同市居留地某商館の廚番で下總市川生れの鈴木洗二と云ふ男に嫁ぎ。石川元町へ形許りの世帯を持ちしが。素より定まりし營業なきまゝ。忽ち其日に差支へたる苦し紛れに。洗二は博徒茂林龜の群に入り。日々賭事を商賣にして。家に居る日は稀なりしを。いよは銘酒屋の女には珍らしき正直者なれば。洗二が賭博に耽るを頻りに心配し。博奕丈は止めて呉れと度々異見せしが。洗二も蒼蠅思ひしか。猶の事家を外にして飛び走き。眞金町の龜楼樓の遊女今若の許へ繁く通ひ詰め。諸方へ不義理な借を拵へた揚句の果に。行方知れずになりしかば。いよは詮方なく知己にすがり。茶焙場へ雇はれ僅の賃錢を得て漸く烟りを立つゝあるうちに。早晩洗二の胤を宿し居たる事とて。日增に勞働も出來兼ねる故。東京市本所區花町に木賃宿をして居る叔母を便りて出京し。身二つになる迄同家の厄介になつて居りしが。月滿て女兒を產み落したればふさと名けて養育し。其身は日毎に鶏卵。菓子の類を籠に入れて背負ひ。府下の町々を賣り歩くを見て。叔母おたみは一日いよに對ひ。其樣に骨の折れる稼業をするよりも。相應な家へ嫁に行つては何うだと勸めたれど。いよは承諾ず何處までも洗二の行方を尋ね當てた上で。離別るとも何うどもする積り。夫迄は土を嚙んでも斯うして居り升ト云ふに。叔母も爭ひかね其儘爲すに任せ居たるに。叔母の厄介になるは心苦しと。此春やう〳〵前の所へ家を借りて住居と定めたり。斯くて洗二は家を踏み出して諸所方々を吟行うち。風と感つき

たるはいよの事にて。ア、惡るいことをした。今頃はどうして居るか。可愛そうなことをしたと。石川元町へ立歸つて見ると。何處へ往つたか分らぬより。エ、此惡人奴かと自分をうらみ。ア、まゝよ。お國の爲めには命も惜しまぬ。何かと思ふて居るうちに。日清の戰爭が始まつたから。軍夫が入用との事を聞き。早速願ふて清國にわたり。一旦事濟となりて歸國をいたし。更に臺灣に渡りて。御用をすまし。今は全たく歸國して。靈岸島に落付て。車夫を渡世と定めたるが。今日もまた梶棒を握りて出たるが。路に子供に突當りしとて。其詫びにとて其子のうちに伴なひたり。茲においては一昨夕かた。夕飯の膳立をして居たりし處へ。一人の車夫が泣き居るふさの手を曳いて入り來たり。實に何とも相濟みません。只今急ぎの客を乘せて。此方の前を通らふとして。うつかり此のお子さん〳〵梶棒を當て突き飛し。お怪我はおさせ申さないが召物を泥だらけに致しました。眞平御免ト詫入る顏を。見れば四年以前別れたる亭主洗二なれば。ヤアお前はト驚くいよの顏を見て。洗二もうち驚き仔細を聞けば突き飛したは我兒のふさにて。永の年月女の細腕にて。やう〳〵日を過しつゝ我が行方を尋ね居たりと云ふに面目を失ひ。實は那れから諸方を彷徨ひ、軍夫となつて清國へ渡つたり。臺灣へ行つたりして。隨分金もためれど。歸朝後脚氣を煩らつてから。貯蓄は旅に遇た霜の樣に消え失せ、今では靈岸島の木賃宿に居て。見る通りの始末だト物語りて。客が有る故一端別れ、再び出直して互ひに四年越しの身の上を語り合ひ。洗二は只管昨の非を悔ひ。是れから勝負事を止めて。正直一圖に稼ぐと誓文立ての詫言に。いよは大きに悅び。此由を花町の叔母に通じ。近日元の如く夫婦になり共稼をするといふ。誠に目出度事共なり云々と。一寸した斯樣お話しでも。直ぐ三聚淨の奏が揃ふてござります。惡るいことはもう〳〵致すまいと。一心に誓ひを立て。清國へ渡つて軍夫を全ふし。歸つて來て親子對面といふのが。取りも直さず。三聚淨戒の奏たではありますまいか。あんまり長くなりますから。今日はコレヲ御免を蒙むります。

◎第二十席

第一不殺生戒

サテ是からは十重禁戒にかゝりますので。今日は第一の不殺生戒でございます。殺生とは不殺生の反對で。物の命を奪ふことでありますが。此物の命を害することは。實に正理の許さぬことでございます。天理に背き人道にそむき。仁人君子の爲すましきことでございます。總て死といふことは生あるものゝ最第一の苦痛とするところであります。足か痛いとか手か痛いとか。僅かに蚤の喰ふたほどの局部が痛んでも。ヤレ苦しいヤレ術ないといふて。悶へ騒ぐではありませんか。然るを全身まる〳〵に奪ひ取つて仕舞のじやから。どんなに苦痛が知れませんことは。銘々が身の上で考へてもおもひ知らるゝことでございませう。總て生とし生けるものは。誰れ彼れの差別なく。生を樂しみ死を厭かることは。情に於て當然のことでございます。中にも人間といふものは萬物の靈長と生れて。情もこと〳〵くの情を知りて。萬物の足らぬ考へを補ふて遣はすべき。仁愛の心ろを持ちなから。反つてアベコベに悪逆をよろこび。何も罪もないものを殺して。夫れを喜んで日を暮すとは。何たる鬼畜の了簡でございませう。近頃では放鳥射的會などといふもの起りて。鳥を放して飛ばせて置いて。それを狙らひ

打つことをやらかしますか。殺生をすると樂しみにするは殺生するもの〻常かは知らぬど。去りとは樂しみも餘程上違したものでございます。殺すものは樂しみか知らねど殺されるものはどのやうであらふ。其怨恨がどの身に報ふて往きますか。佛けは華嚴經の中に恐ろしいことを說て置かれました。殺生の罪は衆生をして地獄餓鬼畜生に墮せしむ。若し人中に生るゝも二種の果報を得。一つには短命。二つには多病。云々とあります。今人と生れがなら。胎内にて死んで仕舞ふもあれば。出生の後に日もたたぬうちに死ぬるもあり。又は少年にて死するもあり。中年にて死するもあります。扨は不具な身に生るゝもあり。難病多病の身と生るゝもあります。是等はみな殺生の餘報でございます。又佛けが心地觀經を說せられて。其中にお示し遊ばさゝるには。無始より已來一切の衆生。六道に輪轉して今に百千劫を經る。其中において互ひに父母となる。故に一切の女人は皆我が悲母一切の男子はみな我が慈父と。マア一寸勸かへて御覽なされ。アノ牛肉は甘いとかアノ肴は不味とか。勝手な熱を吹いて贅澤をいふて居るが。今此經文に依りて伺がつて見れば。其甘いといふ牛肉は。過去の父の肉

やら母の肉やら。其不味といふ者は姉の肉やら妹の肉やら。どうも計り切れぬではありませんか。眞逆膳の上に並べた肉が。これが父母の肉といふこれが知れたなら。甘いとか不味とかいふて。ムシャ〳〵喰ふ譯にはまゐりますまい。又殺生の中でも人を殺すは大殺生として戒しめられます。是等は業報のあらはるゝ時に。其輕重少しもたがふことなく。チャンと報ふて來ますけれども。畢竟大罪でも小罪でも。兎に角殺生は犯さぬが一番じゃ。此惡心一たびおこりて。苟旦にも物の命を取れば。直ぐ其怨恨が我れに結ばり。忽まち惡業の種となりまして。法界の中に充滿いたし。それより一生の間だ。他に憂目を見せたり苦惱をあたへたり。其業が次第〳〵にあつまりて。後には大成いたしますから。其時何にあらはれ出しますか。それは早や大變なことになります。如來いよ〳〵御涅槃に渡らせたまふ時に遺經をお說きなされてありますが。是れが謂ゆる末後の御遺言でござります。即はち戒法は汝等の大師である。我が諸〳〵の弟子展轉してこれを行せば則はち是如來の法身常に在して而も滅せざるなりとありますが。本來本然の仁愛の相をもつた吾れ〳〵人間にして。物の命を取るやうでは濟ませぬじゃ。今この御遺言の趣きを案じまするに。佛の戒法を相續して眞實奉行するときは。コレソ佛の法身たる智惠の御命の現はれたのである。されば佛の御悟。佛の御命と云ふも元來戒法の外には御座らぬ。それゆゑに戒法を相續さへすれば佛の智惠の御命を相續したる眞實の菩薩となるのでございます。メノ戒法は身心一如の戒とも心地無相の戒とも申まして。ツマリ銘々に身と心とに相傳するのである。適切に云へば銘〳〵の身と心とが。全然佛の戒法となるのでございます。左すれば一切衆生の身と心とを除て外に佛の智惠德相がある譯のものではない。夫故に我が高祖大師は。佛の惠命を續ぐべしと御勸め下だされて。更に衆生の命を殺すこと莫れと深く御誡めゆゑばされたのであります。この殺生罪に就きましては。種々に込入た道理も御座いまするが。先づ大概は上中下三段に分ちて說きます。國王や父母等の大恩ある人を殺したり。又は聖人や阿羅漢等を害しまするは所謂五逆罪七逆罪に當りまするに依て。此等は都て上品の殺生と申します。また通常の人間を殺しまするは中品の殺生でありまして。禽獸畜類を殺すのは下品殺生でございます。併し細かに申す時は前の二品の中

にも亦各〻上中下三つあります。例せば通常の人を殺すにも殺を謀て殺すもあり誤て死に至らしむるもあり。又怨が有つて殺すも有り怨もなにも無いのに亂りに殺すのもありますから。種々の區別があるにちがいないです。彼の禽獸畜類を殺すとでも牛馬を一々述べる時は餘り長談義に渉りまするから今は只この戒の大旨意丈げを御話致す積りであります。凡そ佛を信して身自ら成佛せむと欲する者は未來際を盡して大慈大悲を以て己れの躰といたさねばなりませぬ。熟々六道の衆生を觀じまするに皆な前生の業力に依て今生の果報を受けたものである。畜生の衆生も無始已來畜生なるにあらず。地獄の衆生も最初より地獄に住するにあらず。惡業の力强ければ今日の人間も未來は畜生道に墮落せねばならぬ。之に反して善業の因緣あれば。地獄の衆生も轉して人間界等に生を受くる事が出來ます。是の如く或は人間天上の身を感じ或は三惡道の苦を招くのは皆な因果業報の致す所であります。して見れば銘〻御互は是等惡業の衆生に對したならは。サテ〳〵不便や憐ましや本どより佛と同躰なる性を具へて居り乍

ら。カヽル淺間敷果報を受け。闇より闇に入りて更に佛法僧の名字をだも辨へざることの。氣の毒さよと。直ちに慈悲の心を運らして彼等を擁護し彼等をして佛道の因緣を結ばしむるやう方便を用ゐねばならぬ。況や人間に向つた時には。猶更のことである。然るに慈悲心抔は露程もなく。動すれば彼等の生を害し命を奪ひ。又は彼等の肉を食ひ彼等の血を啜り。而して自ら喜び自ら樂むと云ふのは。なんと無慈悲な所業ではありませぬか。唯に天地生育の道に背くのみではなく。罪業は立所に吾が身に報ひ來つて。生々世々に其苦を受けねばならぬ。夫故佛は十戒の第一に不殺生戒を立て。人間は申に及ばず。都て一切衆生の命を殺害せざれと。堅く御戒め下されたのであります。畢竟するに此戒の根本は。一の慈悲心である。其慈悲心が表面に現はれて不殺生戒と爲つたのであります。文殊問經には若し出世間の菩薩戒を受て而して慈悲心を起さゞるは是れ菩薩の波羅夷罪なりと仰せられてある。設ひ自ら殺生を致さんでも。心に慈悲といふものゝ起らぬ者は。矢張り此の戒法をば破ることになる。在家の人に向つて虫一疋をも殺すなといふても。中々實行は出來ぬ。依て必しも鳥や魚の肉を食

するなどは申さぬ。要する所は唯だ慈悲の念に住して衆生を憐み救はんとの誓願を起し。かりそめにも衆生を惱ますことのないように。深く慎しむが最も大事でございます。彼の戰爭に出でゝ敵を殺すが如きは所謂一殺他生の意である。即ち少數の命を殺して多數の人を安んずるのですから。丁度虎狼の如き惡獸を退治するのと同樣である。一昨年以來征清の役の如き又臺灣の匪徒征討の如きは。所謂仁義の師です。東洋の平和を妨害したり國家の治安を攪亂したり致す所の逆賊を討滅せねば。萬生を安んじ國家を治むることが出來ぬから。カヽル時には斷々乎として降伏の相を現じ。般若の智劍を揮て。惡魔を打殺さねばならぬ。是れ皆な慈悲心を運用する上の方便行と申すものであります。ソコデ佛敎と戰爭との關係は。軍國の各々方にも充分に心得て貰はねばなりませぬのです。併し先づこれは非常のことゝして。通例は只生きものゝ命を取らぬやうにするのが。此戒の本相じゃ。何の鎖細なとおもふて。蚤一疋でも殺すこゝろ。蚊の脛一本でも折ることゝろが。積り〳〵れば大層なことになります。譬へば雲を凌ぐやうな樹のやうなものである。是の大木のはじめを尋ぬれば。僅かに一粒の種子

である。それが地に落て生へる時は。其種に引力といふものがありて。同じ種類の分子あつめて。次第〳〵に大きくなり。終には空を衝き雲を凌ぐやうな大木となるのである。一寸考へて見ても分りませう。惡事の蔓こるやうすは。此大木のやうである。明治二十九年五月十五日の中央新聞に。聞くもおそろしき物語りを掲げました。所は武州北足立郡堀の内村二百八十九番地。人見常右衞門と申す人の妻君で。其名をおたちといひますものが。今年の三月二十九日に。玉のやうな男の子を產みました。夫婦の中の總領息子。掌の中の玉と大事にして。寒き風にも當てぬやうにして大きくしました。目出度五月の節句もすまして。間もなく其九日の朝にいたると。十年余も飼つて置く女猫が。四疋の子供を產みましたが。スルと其內儀さんか傍に居りまして。エヽ面倒くさい。嫌やなものを產みくさると。小言をたら〳〵醜しながら。一疋產むとオヽ能く產んだと言ひつゝ取つて。前の溝川へ投げ込み。又產むとオヽ宜斑だと取り上げて又投げこみ。トー〳〵四疋の子猫を皆殺して仕舞いました。親猫はこれを口惜くでも思つたか。其後間がな隙がな狙つて居たと見えて。十三日の昼の頃。內儀さん

は奥座敷に子供を寢かしておいて。少しの間裏へ出て洗濯をして居ると。子供がヒーヽ泣くやうだから。急いて駈けつけて見ますといふと。内儀さんは驚ろいた。子供の咽から鮮血淋漓として流れて居ります。オヤと言つた切り開た口も閉がらす。腰を抜して仕舞ました。漸やうのことで這い寄つて。能く〳〵あらためて見ますといふと。可愛や最早や息が絶へて居ります。何ものゝ仕業であらふと。不審かしながらあたりを見ますと。座敷の口で例の猫が。宜い氣味といはぬばかりに。ニヤーンと一聲高く叫びて。いづれへか逐電して仕舞ました。お内儀さんはあまりのことに涙だも出ず。起つ居つ間誤〳〵しながら宿の人は何處へ往つて居るじやらふと。子供を其まゝ捨ておいて。金切り聲で探して居ります。其中に常右衛門が歸つて來まして。女房の樣子が啻なりませんから。見るより何だ馬鹿め其姿は。何を騒ぎまわるのだ。イヤ何の角と其樣なことではない。アレ那のやうに可愛そうに。猫めが殺して仕舞いましたよ。どうか子供の敵きを取つて怨みを晴らして下さいましな。憎い畜生じやありませんかと。無念〳〵で言葉もまわらず。常右衛門は漸とのことで聞き取つて。奥座敷へ往つ

て見ると。是れも驚いた。畜生めが斯樣なことをしたのかと。敢なき體を抱きあげて。家中をぐる〳〵まわつて居ります。其中に近隣の人も駈けて來ました。此樣子を見ておどろきましたが。常右衛門夫婦に向つて。悔みを言ふやら慰さめるやら大層な騒ぎをやらかしましたが。扨かくて果つべきにもありませんから。其筋の檢死をうけまして。式のごとくに葬むりましたが。夫婦のものは口惜しくて堪りません。日本はおろか唐天竺。佛國英國米國でも。何處にか居るに違ひない。艸を分かつて尋ね出し。子供の敵きを取らねばおかんと。猫の行衛を探して居るといふが。何と皆さま。猫でも犬でもおなじことです。自分の子は可愛に相違ありません。產むやいなや本、宜い斑だと取りあげて。直ぐ殺されては宜心ろ持でもありますまい。先方の子を此方の親が殺して。此方の子を先方の親が殺す。何の事はない親面の敵討じや。これが殺生の現業でござりますから。斯のやうなことを記臆して居つて。殺生はおそろしいものだと思ふて。愼しんでお貰ひ申したい。前にも申す通り不殺生は人間の性德より出たる心地の戒法であれば。此戒法を犯す者は自分に具はりたる心地の德相を破るので。自分

から好て悪業を招き悪因縁を結び墮地獄の種を蒔き。佛の恵命を殺し自己の光明を眛ますのであれば。篤と性戒具足の道理を考て此戒法を滿分に持つ様に致さねばなりません

◎第二十一席

第二　不偷盗戒

今日は不偷盗戒のお話して。十重禁の第二でございます。不偷盗とは取れぬと極まつて居る他人の物を盗んだり用ゐたりするをいふので。何にも其様なに六ヶ敷ことはないか。これを犯せば大した罪となり。守れば佛にもなれる徳を持つて居るが。此戒法じや。そも〳〵此戒法の起りをたづぬるに。人間が此世へ生れて來て。貴賤貧富智愚妍醜。夭壽强弱。扨はいろ〳〵と千萬無量の差別あるは。即はち前世において此十善戒を持つのに。上中下品のいろ〳〵があつたので。今はその影法師と顯はれて來たのじや。じやから壽命も福分も智恵も容貌も。或ひは官位も俸祿も眷屬も災難も。みな

己れの前世の業報で。其業報の分々に應じて。シラ定まつた分限であるから。他人の影法師が何程尊い美くしいとて。己れがそれを羨やんだところで仕方がないではありませんか。それを羨やましく思ふなら。何故前世に福分を植なかつたのじや。今更君の類と僕の鼻を合併して。當分に分けやうじやないか。そうすれば丁度世間並の顔になるからと相談をしても。それは到底出來ぬことじや。君は金を炊しき玉を煮て喰ふて山海の珍味も飽きたらふ。僕は蔬菜白湯で腹を膨らして居るから。碌々鹽も甜られぬ。どうか經濟を合併して當分に分けて呉れまいか。然すれば丁度高くもなく低くもない五分〳〵の暮しとなるからと言ひ込んでも。是れも到底駄目なことじや。去れば他人の物と自分の物とは。元と〳〵チヤンと定まつて居るから。どうしても他人と合併する譯には往かん。又盗ることはどうしても出來ない譯ではないか。大凡本宗に於て罪といふものを定めます事には。自作の罪と教人作の罪と見作隨喜の罪との三通りがあります。初めに自作と申すは。自ら他人の財物を盗むことであつて。これには强盗だの竊盗だの。かたりだの詐欺だのと云ふ種類が澤山あります。二に教人作と申す

は他人をそゝのかして盗みをなさしむるので。所謂教唆罪です。三に見作隨喜とは。自分で盗をせんでも。又た盗みごとに關係せんでも。他人の悪事をするのを見て。隨喜贊成するの罪である。右三種のうち自作と教人作とは無論罪に相違ないが。傍り他の悪事を見て。隨喜せしのみにても。同一の罪と成ると云ふは。世の中の法理に背くやうにて。不審を抱く人もあるかは知りませんが。實に是れ佛祖正傳の戒法は心地無相の戒と申しまして自分の心地に戒法の德を注ぎ込んで心の底から了簡して之を持つのでありますから。心の中に一點でも邪惡の念があり。破戒の所存があります時は。佛さまや祖師方に向つては決して云譯はありませぬ。人の悪事を働らくのを見たり。又は人が盗難抔にあふのを見たならば。本性の慈悲心を起して之を憐み救ふ方便をせぬやうでは。其心はイツの間にやら破戒無慚の人となつて。其罪はチヤント閻魔の帳に記るされて最早取消すことが出來ませぬ。華嚴經には性不偷盗菩薩。自からの資財に於て。常に止まり足ることを知る。他においても慈恕して侵損することを欲せず。若し物として他人に屬せば。他の物のおもひを起して。終に之において盗心を生せず。

乃至草葉をも與へされば取らず。いかに況んやその餘資生の具をやと。お示し下されてある。自からの資財に於て止まり足ることを知る云々とは。正しく己れの物と定まりたる財寶に滿足して。決して他人の物を羨やまぬことじや。鶴の脛が長いからと言つても。おのれの脛と定つた以上は。鳥の脛のやうに短かい脛を欲いとは思はぬじや。山鳥がおのれの影のうつくしさに見取れて。水鏡で溺れるほど奇麗でも。烏すか只眞黑で面白くなくても。定まつた分なら仕方がないではないか。然るを烏が山鳥の羽色を欲しいからとて羨やんでも。生れ替らぬ以上はどうすることも出來ないてないか。揚句の果に鵜の眞似なんどやらかして。水を呑やうな酷い目に逢ものだ。若し物として他人に屬せば云々とは。那の店に掛けてあつた應挙の描いた鶏とりの一軸。アレを今日往つて買つて來やうと。出かけ往つて見れば。モー友達の權兵衛が買つて歸へつたといふ。其れは惜しいことをした先を越されて仕舞つたか。那の軸は如何にも欲しかつたと。いつまでも其念を積けるといふと。最早や其念が盗心となります。手を下して取らんでも。其欲しいとおもふ一念が。直ちに盗心と相成るのじや。隨分嚴しい

お示しである。じやから一旦他人の手へ渡つたものならば。直ぐ斷念めて仕舞つて。アヽおれには縁がなかつたと斷念めるのじやと仰せらるゝ。左すれば誠に氣易て宜しいものじや。乃至草葉の一枚か二枚でも。他人のものは取らぬ。かやうな鎖細なことでさへ。遣るといふ許しがなければ取れぬのじやから。其人の生を賣けて居る物拵は一つとして。手を下して取るといふことは出來ぬのじや。法華經に此趣きを說かせられて。治生産業不與實相一相違背。とお示し下されてある。人の治生の道具と言つたら。隨分澤山なものでせう。それを取られぬと固より定まつて居る實相にそむいて。盜るといふやうでは誠に濟ぬことじや。玆の道理が能く分かれば。世界に社會黨などいふ。戲氣た黨派は起らぬけれども。無佛法の國なんどになつては。社會財産の平均などいふて。時〳〵帝王を狙撃したり。宰相を暗殺したりいたします。それは萬物の實相といふものが。平均も出來なければ。取ることの出來ないと定まつて居るものじやと合點せぬからのことじや。又知らぬからのことじや。故に社會黨などは。大盜人といはねばなりません。慈雲律師の十善法師には此戒法の有樣をお說きなされて。人

から物をかりて返さぬ者も。無斷に人のものをつかふも。人の物を担じてつくのはぬも。共有物を自分計り專らもちいて人の用を妨ぐるも。皆な此戒法の罪人である。大勢と一處に働らきながら自分のみ報酬を受けたり。或は下をしいたげ上に諂らひ或は上を侵して下に交はり。或は人の上に立つものが賄賂に依りて理非の裁斷を曲るが如きは。最もおもき罪人である。日傭取りが一日の雇ひを受けて居りながら其事に怠たるは一日の盜みと云わねばならぬ。子たる者が孝行を盡くさねば終身の盜みである。臣たる者が忠義を盡さねば一家の盜みであるとまで云はれてあります。かゝる不義のともがらは何れも因果業報の理を心得ず。安りに貪欲を增長するから。種々のつみとがをも作り出すのであります。いやしくも因果業報のわけを明きらめて。天地人物各〳〵さだまりがあつて相侵すことの出來ないことを知る時は。自から天地と其德を均くして。諸佛と其道を同じうすることになる。之を諸佛同道の者なりといふ。然るに滔〳〵たる天下眞にこの戒法を持つことの出來る人が果していくらでざりませふ。世の中が段〳〵開明に進むに從つて法令が益精密になり。學術の發達につれて天理人道が明か

になるのは至極よろこばしきことでありますが。扨て困つたことには何故か人の德義が日々薄くなつて。虛名を貪り私利を營む所の人々が年毎に增加して來るやうであります。赫々たる官職に在る人が。動もすれば賄賂沙汰に其身を汚したり。堂々たる地位を有する人が往々不正の事業を起して。公衆の耳目を瞞着したり。社會の裏面は實に百鬼夜行の有樣であります。そうして此等は皆な盡く此戒法の罪人である。我が釋迦牟尼如來は遺敎經に於て少欲知足と云ふことを說かれてあるが。小欲とは非分の望みを起さゞることで。知足とは分を守りて足ることを知ることであります。譬へば寫眞のやうなもので。寫眞とあらはれた顏かたちが。如何に三平二滿でも。腰が曰のやうに大きからふが。どうも前世の業報で。おのれが注文しておのれが拵らへた此身躰であつて見れば。何と言つて恨らんでも。致し方がないわけではありませんか。故に此戒相を能く知つて見ると。少欲知足でなければならぬ。然るを分に過ぎた欲を恣いまゝにして。これでも足りない。是れでも足りない。段々欲念を增長して。終には人を倒し人を殺して盜りたいとまで進んで往きます。明治二十八年九月廿六日の大阪

毎日新聞に。探偵譚と票題をつけて。其四年前の惡事露顯を揭げました。其文に曰く。之を西洋小說に見。探偵譚りに見たるとはあれど。實際斯る謀殺を企て斯る惡事を。搆みたる者なければ。一時は東京の諸新聞紙に評判の記事となりたる者なれど。年經るまゝに人の記臆より取り去られ。誰れ云ふ者もなくなりたる今日。天網恢々疎にして漏らさず。端なくも四年前の謀殺事件露顯して。豫審廷に呼び出されたる一場の探偵譚あり。事の大畧は今を去る四年前。即ち明治二十五年の十一月。兵庫縣人北村寅造といへるものが。其再從兄なる北村寅吉に勸告して。明治生命保險會社に生命保險を受けしめたる後。之を東京本鄕の旅宿に毒殺して。保險金を詐取せんとしたる嫌疑を受け。保險會社は其保險金を支拂ざりしのみならず。寅造は拘引されて屢々糺問を受けたるも。遂に其證據不充分にて無罪と爲りし事にて。當時に在つては新聞記事の間違なるや。但しは信に證據不充分にて求刑し能はざりしやを。世間に疑はしめしが。此程に至り此毒殺一件全く露顯して。寅造は再び豫審廷に呼び出され。種々の新證據を以て審問を受くる中。當人は未だ自白せずと雖も。豫審判事は證據充分と

認定して。近々公判に廻す可しといふ。今其露顕せし次第と。如何にして彼が毒殺したるかの仔細を聞くに。彼れは曾て竊盗強盗で重刑を受け。已に三四犯の悪人として擄どころなく國を拔け出し。去る明治二十一年中東京へ出で。下谷の藥學校に入りしかど。放蕩にして退校を命ぜられたれば。翌二十二年中自ら藥劑師開業の免狀を僞造し。之を携へて國元に立歸り。大法螺を吹き立てたれば。兩親の喜び大方ならず。オヽ能く改心して呉れたと。子に甘いは親の常。寅造は茲ぞと附込んで。若干の金圓を強請り。更に但馬の出石に開業醫を營める。兄の許に出向きて。其藥局を引受けたるが。素より遊蕩三昧を好める寅造。何とて何日までも。片田舎の地に其尻の据る可き。半歳も經ざる中。早や其處此處に借財を重ねたれば。遂に兄の實印を盗用して。其地所を抵當と爲し、四百九十圓の金を搾らへて、其儘逐電なし。東京に至りて。本鄕區森川町七番地の下宿屋須田ミッといへるに止宿し。大膽にも自分が僞造の免狀を床の間に掲げて。藥劑師と稱し懐中の暖かなる儘。日夜吉原に遊興して、白痴を蠱す中。何日か同廓萬華樓の娼妓に打ち込み。末の約束迄も爲したれども。國を山奔する

時既に四百九十圓と。元金の定まりし金を持ちたるのみなれば。此時は最早懐中も殘り僅かに減少して。身受の金に差支へ。百方工夫すれ共善き分別も附かずして。思案に暮るゝ中不圖或人の勸めにて。一握千金を心掛け。北海道へ旅行して當途もなく。巡廻したれど何とて不時の僥倖に遭遇するの理あるべき。かゝり來たれば廿六年の十一月九日。寅吉を伴ひて市内各所を見物しながら。互に北海道行きの計畫を談合して。國元の親類等を彼に角と噂したるに。寅吉少しく懐郷の情を催し來りて。身の行末など心配する姿の現れたるにぞ。寅造爰處ぞと生命保險の事を說きて。互に明治生命保險會社を訪ひ。寅造先づ己れの身體に一千圓の保險を附し。形の如く手續を濟して。契約を爲したる後。寅吉にも同樣の手續にて。一千圓の尋常終身保險を爲さしめ。受取人と爲る可き寅吉の父、政五郎幷に證人なる叔父田中、柳下等の名前へは何處にて求めしか。出來合の印を捺して。保險料を支拂ひたりしが。如何なる故か歸り掛に。再び證書を改めて。寅造自身の保險金をば。三百圓に減額し。其儘旅宿へ立戻り。其翌ゝ日に至りて寅造は何日もの如く。午後五時頃寅吉を連れ出し。本鄕四丁目の牛肉

屋いろはに上りて。酒食を爲し。戻り道に竹町の寄席若竹亭へ立寄りしが。都珍らしき寅吉は。餘念もなく高座を眺めて。見物し居る隙を見澤まし。寅造は懷中より密かに。アトロヒヲといふ魔睡劑を出し。之を土瓶に投入して。寅吉に飲ませたれば。寅吉忽ち氣分惡くして。座に耐へ難しとて其儘表へ飛び出し。下宿屋に歸りて寐に附しより。枕上らず。同夜十一時頃よりは病勢益〻烈しくして。終夜眠に付ず。漸く明方より少しく眠氣を催したる樣子なりしが。此時寅造は何知らぬ顏を爲しながら。下宿屋を尋ね。寅吉を見舞ひたるに。毒藥の効目甚だしき姿を見て。大願成就と思ひたるも。爰處肝腎の場合なれば。己れの巧みを色にも出さず。甲斐甲斐しく看護して。故らに大學病院の診察を受けしめんと。病人を伴ひて午前七時頃。神田の大學第二病院へ伴ひ行き。當人寅吉の殆んど人事不省なるが爲め。寅造傍より口を添へて。容體を述て藥を乞ひ受け。再び下宿へ連れ戻り。看護婦會に依頼して。池田といふる看護婦をも雇ひ。其看護を托したるが。此時寅造は大學の藥を。中途にて容れ換へ。再びアトロヒヲを多量に用ゐて。寅吉に服用させたれば。何かは以て耐まるべき。同日の

午後二時頃非常に煩悶し。虛空を掴んで死去したり。然るに寅造は素より斯くと待設けたる事にして。心中大に喜びしも。死しての後に醫師を迎へて。死亡證を受取るは。困難ならんと考へたる故。寅吉が死に瀕して。殆んど人事不省の時。赤井源次郎といふ開業醫に使を派して。其診察を乞ひたりしが。此時赤井氏は不在なりとて。代診內村岸三及び內田元太郎の兩氏來り。交〻診察したれども。最早手遲れにて如何とも爲し難ければとて。兩醫師とも一旦其場を斷り歸らんとしたるをば。寅造無理に引止めて絕息したる。有樣をば見屆けさせ。腦漿衝にて虛脫に陷り。死亡したりとの書面を作らせ。之を以て區役所へ屆け出で。埋葬證を得て本鄕四丁目の葬具屋より棺桶を求め人夫を雇ひて其日の夕刻には。早くも日暮里の火葬場に擔がせ往き。茶毘の烟と爲し終れり。去れば寅吉が病めるは僅かに二日足らずにして。三日目の朝には既に白骨と成りたるを。壺に納め。寅造は態と悄然たる姿を裝ひ。涙片手に下宿屋に立歸りて。世話を受けたる禮など述べ。之れより己れは國元へ立歸りて。寅吉の白骨をば兩親へ屆くると稱し。明治生命保險會社へ立寄りて。保險金一千圓の支拂ひを請求せり。依

て保險會社は契約書に依り。其手續を踏んで之を渡さんと。書式を示めして受取人北村政五郎幷びに證人田中柳下等の調印を求めたるに。寅造の擧動如何にも怪しくして實際政五郎等は出京し居る如く述ぶれ共。一回すら保險會社へ來らざる故。不審益〻晴れず。遂に本籍へ電報を出し。虛實如何を突き止めたるに。全く寅造の詐僞謀計と解りたれば。之を其筋に屆出で保險金の支拂は中止して。寅造は豫審廷へ廻さるゝ事となりたるなり。是れ實に今を去る事四年前の事なりしも。其時は未だ右に述るが如き。明白の證跡上らざりし爲め。一旦無罪と決定したるに。其後又亡寅吉の父なる政五郎が。保險金の事よりして。寅造の罪惡四年目にて露顯し。目下審問中なりといふ。憐む可きは寅吉にして惜む可きは寅造なり。已れの親戚を殺して其保險金を詐取せんとは抑も人か又鬼か。呆れ果てたる人物と云ふべし。云々と。どうです皆さま。非分なことと企てゝ。强盜までした揚句に此やうな事をしても。其金を取りたいのです。呉れ〳〵も少欲知足を心ろがけて。成たけ小事を愼んで下さい。事は小さな中に愼まぬと。終には斯やうな事になるものです、不偷盜の本義は心に犯さぬ樣に注意することであれば、身には猶更のこと、本性具足の德本によりて佛祖面々の現成を致さねばなりません、佛祖面々の現成は即ち不貪の性にして布施の功德を植え慈悲の心を運びて老心大心を以て果報の世を渡り果報の身を濟度して生々世々の本懷を遂るのであります

◎第二十二席

第三　不邪淫戒

サテ今日は十重禁の第三不邪淫戒でございます。チト亂ちなやうに聞ゆる言葉も遣はにやならぬが。決してお笑ひなされてはなりませぬ。佛けさまが此戒をお說きあそばさるゝ時に若し。笑ふたものがあれば。片端から追出すと仰せられた。今も此戒法を說ますに當りて。若しもお笑ひなさるゝ方があると。片端から追ひ出して仕舞ますぞ。併し其樣なことも出來ますまいから。どうぞ讀聽してお貰ひ申したい。サテ此戒は身三の終りで。身に行なふて罪となるものゝ一ッであります。不邪淫とは他人の妻女に懸想したり。又は自分の妻といふても。多量の淫なとは決して許さぬことで。實に大

切な戒法でございます。先づ此戒法の根本をたづねまするに。世界の法性が亡び。緣起といふことが破れたら知らぬこと。苟しくも法性等流の道理があらば。諸法は必らず緣起するじや。諸法が緣起すれば。先づ最初に動くものは陰陽しや。陰は内に收まりて形ちを成し。陽は外に發散して氣となる。形氣分れて天地となり。天氣は降り地氣は昇る。相交はりて萬物あらはるゝのじや。萬物とあらはるゝ中に善根の多いものが。第一番の靈長となりて男女の形をあはすのじや。然るときは其男女につきて。自然と備はる道がありて。相犯すことも相亂ることも出來ないのが此戒法じや。互ひに親愛和睦して陰は陰の德を守り。陽は陽の德を全うするのじや。自然と備はる道といふのは陰陽あれば天地あり。天地あれは萬物あり。萬物あれば男女あり。男女あれば夫婦あり。夫婦あれば子女あり。子女あれば兄弟あり。兄弟あれば朋友あり。是れより父子の名もおこれば親戚の名もおこり。伯父伯母と呼び甥姪と呼び。本家となれば分家となる。生殖繁茂して次第〳〵に交通の道が出來て來る。故に夫婦は人倫の始じめといひます。此大切の道理のはじめじやから。戒相が具足せんければ。不具なるも

のを生み出して。業耻を晒さねばなりません。然るを他の妻女に對して亂らなことをしたり。他の子女に向つて心ろをかけたり。又は父母の許さぬことを。おのれの勝手に淫を通しては。至極宜しくないことである。併し是れは通常の邪淫なれども。伯父伯母又は兄弟子孫と通じ。甚しきは父母に對して通じたゞするものあり。是等は最上の邪淫にして。業障の實に深いことです。好し夫婦の中といへども。非支非處非時非度は許しませぬ。みな邪淫と相成りますので。實に亂らかはしきことであるが。一應は言はねばなりませぬ。非支とは男女を論せず。局部にあらざるところに行なふを言ふであらう。非處とは場所柄をいふので。佛前社前など閨中にあらざる處にて行なふことは許さぬ。又非時とは受戒の時。妊娠の時。扨は月經。又は乳哺の時。非度とは回數の量を過ぐるをいふので。凡て女の喜こばざるところは。みな邪淫となります。總じて此戒を犯すものは男女共に今生には種々の罪業に苦しめられ。後生には惡趣に墜ちて。再び人間に生るゝとも。婬奔であつたり。良い配偶を得られません。じやから男子でも女子でも。獨り身で居るうちは。最もよく色情を慎しんで。かりそめにも

猥りがましき行なひのないやうにせねばならぬ。一たび夫婦の契りを結びし上は。我が宿の花より外に手折るなよいかにまされる色香ありとも。よしや如何なる増す花があろうとも。少しもそれに貪着せんで。千代に八千代に夫は婦を愛し婦は夫に從ひ決して不義いたづらの念を生ぜんやうにするが。この戒法の持ち方でございます。然るに世の男たる者が唯だ己れの色情の爲めに妾くるいをしたり。歌妓遊女に其身を持ち崩したりする事はそも。天の德を失ふたる仕業と申さねばならぬ。又た女たる者が道ならぬ戀路に迷ふたり。或は傾城などゝいふて。色を鬻ぐ商賣を働らひたりするのは。自から地の德を失ふたる女といはなければならぬ。ましてや我が日本帝國臣民の一分たる女子に生れながら。わざ〳〵外國にまで行きて。淫賣を營なむと云ふは。惡魔とやいはん畜生とやいはん。五逆罪にも劣らぬ罪人であります。總じて人はうはべの姿かたちに迷ふて。うちはの心底を輕んずる者が多いが。天地の二たつ無きが如く夫一人婦一人といふ萬世不朽の法則に依て。男も女も其つれ合を撰らぶには。頗ぶる注意せねばならぬ。單にすがたかたちにのみ就て。親のゆるさぬいたづらごとを爲す時は。

双方共に疵ものに成つてしまふ。殊に男子たる者は一層慎しまねばならぬのである。どうしても男から仕かけるのが多いやうだ。譬へば源太か宇治川で。高綱に一杯喰されたやうなもので。此戒を破るものはどうまても男から始まる。これ〳〵景季殿。馬の腹帶か延ましたぞ。鞍かへされて怪我あるなと。甘くだまかし込んたから。正直な景季は。オヤそうでこざりますかと。氣をつけて〴〵ゆめ居る間に。馬は遂に乘り越えて。佐々木四郎左工衛門高綱。宇治川の先陣なりと名乘を揚げた。此樣な鹽梅でどうしても男からだまかすじや。私しが知つて居る家の主人たが。明治二十八年十二月二十日の中央新聞に。面白ろ可笑く書れました。其見出しは耳を揃へて五千兩といふので強分大した金でございます。其文に曰く。出さなきや少とも動かぬ〳〵と。昔羽屋張の凄い文句。並べられて困つて居るは。日本橋橘町邊の何物問屋。燒酒呑三郎といふ旦那様。おみねといふチャンとした女房と。二人の子供さへある身にて。兎角旦那風を吹かして見ては。白河夜舟を漕ぐお三の楫をとりたがり。度々の失敗も剛れて見れば。何ともなし。今年二月の初めつかた。下谷二長町宝田某の二女おきくといふを。女中に雇

ひ傾きし所。女中に過ぎた縹致好し。この花如何でお旦那の目に洩るべきや。忽ち下向の上使のお役目。鎌倉殿の嚴命なるぞと。厭がる女中を手の物にして女房の前も憚からず。圍ひもの同樣に取扱ふを。三寶荒神も目を眠つては居られず。そろ〳〵とおきくへ中りの能からぬ征矢。的となるのが苦しさに。おきくも今は後悔し。旦那を怨んで居たところ。去月の末親元から。急におきくの縁談が整ひしゆえ。暇を貰つて一日も早く歸れとの事に。旦那は彼是故障を云ひしも。丁得に兩人の中は。これ斯うで。岩戸神樂の昔よりと。緣起を話す譯にも行かねば。嘆きぶはそれを幸ひと。强て暇を貰ひ受け。歸宅すると間もなく淺草新福井町邊の[illegible]堅藏といふ惡人方へ嫁入せしを旦那は其後おきくの事を忘れかね。何家で聞きしか嫉妬なる。福井町へ折々尋ねて行きしも。好き機會とても無くて過ぐ。月日に旗を立つね弓引けども斷念り難く。轉輾反側ドッコイしよ。又も四五日以前の夜。おきくが緣家の邊へ行きし幸ひなるかな天の與へ。菊ちやん一人で居やはるのを。垣根越しに覗き見て。呼び出し猫をかけたるに。おきくは夫と察せしが。聞かぬ振りして空嘯き居れば。旦那はクットたま

りかね。戸を蹴飛ばして家へ入りしに。おきくは驚き四角四面の挨拶して。木で鼻くゝる樣な待遇ひを。短慮の旦那はムッとして。先々の恩を忘れ。殊には末々の約束まで云ひ交せしを。よくも薄情に踏みつけたなと。襟髪掴んで引摺り廻す所へ。夫堅藏が歸宅しこの躰を見て。亂暴者奴と旦那を捕へ。丁々〳〵と撲ち据へた騒ぎに。近所の人々駈けつけて。其場を無事に取鎭め。何れ愿合は後の事といふを。力に旦那はこれぞ遁げ時とコソ〳〵戻りし其跡にて。堅藏女房を膝下に抑へ。嚴しい折檻に以前の事情を打明けれど。未だ堅藏の疑心が晴れぬに。女の狹い心から一昨々夜剃刀とり出し。自殺をせんと喉元少し傷けたるに。堅藏驚き剃刀もぎとり。その丁簡で心底見えた。しかし己にも所存があると。直に羽織をフタリと引ッかけ。旦那の茶の間へ座り込み。コウ旦つく情男の爲に傷が少々つきましたが。御所望とあれば大切の女房を。今改めて進上するから。立派に輿入さして下せへと。不意を食つて丁得の旦那も。一言なく弱つて居るを。〳〵イ番頭の平六奴で御座いますが。旦那に代りまして示談の御相談。一抵この御無心は何程で。お讓り下さいますかと。算盤を出せば堅藏腮鬚捻つ

て大胡座。おうサ元より金を欲しい譯ではないが。へい〳〵お隠しなされずと決着の所を。それでは斯うして下さいと算盤とつて五球を下す番頭平氣な顔でへい。五兩ですか。馬鹿を云へ。それでは五十兩か。未だ〳〵。早く云へば五千兩。強て酒代といふならば。貰つてやらぬものでもねへヲ。それが文久一文も。欠けたら。勘辨ならねへぞと云はれて。番頭吃驚して虫を起し。眼を丸くして居るところへ。旦那も顔にかゝるからとて。内々頼みを入れるから。去れば五百兩にまけて遣らふと五百兩。受取ツてスタ〳〵歸り。翌日はおきくに向ひ。きくや。能く手前は後悔したな。何か驕ツつてやらふじやないかと。直ぐ淺艸へ連れてゆき。觀音さま〳〵後悔した。前の罪を白狀させて。二度と徒らをせぬやうに誓はせ。歸りを一直で一杯祝ひ。其足で大丸へ歸り。夫婦の着物をしたゝか拵らへ。斯樣な金を持ツてるものでないと。殘りは朋友に驕ツてやり。五百兩を奇麗につかツて。平氣な顔付で濟して居るは流石江戸兒の氣風といふべし云々とありました。此話しに依ッて考へても。男の方がどうも惡るい。まだ〳〵斯樣なことで濟んだからよいが。隨分此戒を破りますと。何處の十人切とか五

人切とか。飛んでもない話しにいたります。但だ斬たり斬られたりで濟むことなれば兎も角も。未來永劫惡趣に沈淪して業に業を重ね恥に恥を晒し。己れ一人か親戚朋友の間にも惡緣を結ぶは。大抵皆な不邪淫戒を犯したる罪であれば。各々堅固に此戒法を持ち。慈悲心孝順心を起して衆生濟度を心懸ねばなりません。先づ今日は是れで。

◎第二十三席

第四　不妄語戒

サテ今日は十重禁の第四。口四の初めの戒不妄語とて虚言を吐ぬ戒でございます。聞しこと見しことを。在りのまゝにさへ言へば。夫れで濟むのじやが。扨その虚言偽はりを言ふほど六ケしいことはない。ナゼに好んで虚言を言ひたいものか。その心底が分りません。聞しこと見しことを在りのまゝにいへと言ふが。鎖細なやうに聞ゆれども。扨その功德は廣大なもので。此戒一ッを持つたばかりでも。佛になるゝほどの功德があるのでございます。一寸考へて御覽なさい。人を殺したならば決定しておの

れも殺され。偷盗を働き邪淫を行なふても。皆なそれ〳〵の罪が廻て來ますから。何とかして虚言をいふて。妄語を押し通さねばならぬ。よしや世法の咎ぬ綺語のごときも。無いことを有つたやうに。奮いことを新らしくして。虚言を面白可笑く言はぬときは。人の笑ひを買ふことが出來ぬから。それを面白〳〵面白がッて。矢鱈に言ふ時は。其中には悪口兩舌にわたりて。人に中違ひをさせたり。交際の道を妨げたりいたしますものじや。斯やうな場合になると。取り敢ず妄語を以て取りつくろはねばならぬ。たとひ他人に關係いたさぬおのれの心の中の貪欲瞋恚をおこしてさへ。これを見つけられては一大事じやから。左あらぬ躰に虚言で隠さねばならぬ。邪見を立つるも妄語をもつて。いかにも正知見のごとく言ひ。眞實らしく言はぬときは。人の信は取れぬから。勤めて妄語をいたします。シテ見れば十悪の存するところには。どこまでも此妄語がついて廻ります。そういたさねば悪を掩はれませぬから。仕方がありません。先づ一大活眼をひらいて法界を御覽なさい。天地山海艸木禽獸。ありとし有らゆるもの。一つも不妄語の戒相ならざるはありません。柳のみどり花の紅ゐ烏すのか

ア〳〵。雀のチウ〳〵。猫のニヤア〳〵。犬のワン〳〵。皆なウソ偽はりのない不妄語の相てはありませんか。然るを人間はどうしたことか。餘程な君子と言はれ。賢人と呼はるゝ人でも。程〳〵な妄語をいふて。シテ自分にさへ妄語とは知らぬ有様じや。是れ妄語界の習ひに染みて。妄語をして世渡りの上手とおもふが故であらふ。行儀上人は言はれました。世中に何が六ケしいといふても。虚言をいふほど六ケしいことはない。直に尻りが破れて仕舞ふものじやと。實にそうでございます。シテ虚言を吐くには先つおのれを欺むかねばなりません。夫れはマア搏はぬとして。人を欺むいたところで。その罪はどんなものか。天地の本性にそむき。神明の教へにそむき。甚だ宜しくないではありませんか。「心ろだにまことの道にかなひなばいのらずとても神やまもらん」。然るを此節からの人〳〵を見ると。「正直の頭に神がやとるなら。宿なし神がたんとあるらん。」一寸お笑ひ艸じやが斯樣なもので。宿のない神さまがたんとありませうよ。譬へば不妄語の相は子に對する親の愛のやうなものじや。歌に。「かくまでに偽り多き世の中に。子の可愛さは誠なりけり。」眞實にそうでございます。他人にも虚

言をつき。親類にも虚言をつき。女房にも虚言を吐けど。子に對しては口ばかりでない。意にも虚言をつかぬ。オヽ、浮雲と氣をつけて。怪我をさせぬやうにするも。乃至は寒いにつけ暑いにつけ。着物の薄き厚きを心ろ付くるも。一つとして僞はりのことはない。然るを他人に對すると直く虚言じや。鼻をたらして居る子を見れば。汚ない子供とおもひつゝも。それを鼻の出る子は壯健じやそうでござる。サア此虚言が段〳〵募ると。大きな虚言をいふことになつて。終には天下國家を亂して仕舞ます。日清の戰爭も支那が。虚言をついて天津條約を反古にしたからトふ〳〵大戰が始まつて。終にはあやまり閉口して。賞金を出して土地を分けて。甚だ痛い目に逢つたのです。戰には貧け人民を多く殺して。世上に恥をさらしたのは。是れ妄語の罪の報ふたのでございます。明治二十九年六月二十五日の。東京朝日新聞といふに。近來での妄語者があらはれました其票題は奇怪なる精神學者の拘引とありまして。四日續の長物語りでございます。其文に曰く。自ら精神學者なりと誇稱し。無聲なる妄語を說いて婦女子を誑らかし。或は他人を損傷して害惡を逞しうしたる。奇怪なる走れ者こそ顯はれた

れ。牛込區天神町六十六番地に寄留する。飯野吉三郎と云る者にて。是まで再々惡むべき不德義を働らき。終に增長して日本橋區通一丁目の呉服屋白木屋より百五十圓程の物品を詐取せし事顯はれ。昨朝東京地方裁判所檢事局より令狀を發し。牛込警察署の手を經て捕縛となり。目下取調中なるが。今其惡事の顚末を聞くに。此精神學者と自稱する吉三郎は。岐阜縣美濃國惠那郡岩村町番地不明飯野盛憲の弟にて。幼年の頃同郡岩村在の玉泉寺に剃度を受けて。經卷漢籍を學びしが。俏侶は出世の目的なしとて。半途同寺を逐電して還俗なし。夫より耶蘇敎に入りたるも左して思はしき事もなければ。是亦半途にて斷念し。去る廿一年中飄然東京へ出たるに折柄世間に廢娼論起り。各所に演說講談等をなす者頻りなりしかば。吉三郎も此演說者の内に加はり。島田三郎氏等と共に各所を演說し巡りたるが。程なく廢娼熱も立消となり。果は之を口にする者もなくなりしかば。止む事を得ず牛込區市ヶ谷佐土原町一丁目に居宅を構へ。新聞記者となつて身を立んと。頻りに奔走なしたる末。神田邊の某新聞社へ入りたるも。忽まちにして放逐せられ。玆に生計の道を失ひしかば。更に一策を案じ出し。

自から精神學者と名乗り。自宅には日本精神講談の看板を掲げて。生徒を募り教育家の間を往來し。殊に知己を麹町區上六番町の明治女學院に求めて。屢々同院に出入し。終に同院女生徒の宿所名簿を探り得て。之を寫し取り其生徒中有力なる者を欺むいて。何ぞの用に供せんものをと。密かに其策を講じ居たり。左れば其内幕を知らぬ男女の若者は。吉三郎の贋込の大なると。生徒募集の廣告の立派なるに欺むかれ。續々其講義を聞きに行き。就中明治女學院の女生徒は。多く吉三郎の門に入り。日毎其家へ通學なしたり。斯りしかば吉三郎は其女生徒等の國元より。百圓二百圓と送り來る多額の學資を種々の名義を以て。我懐中へ卷上げ。己れの費用に供するより。女生徒中十四五名は早くも其精神學の奇怪なるを知り。袖を列ねて退去したるにぞ。吉三郎もコハ一大事なり。斯る所に長居しては。不信用を招くの基と。終に前記の天神町へ引移り玄關構へ嚴めしく。卓子椅子等を列べ。執事には嚴手縣西閉伊郡吉野町三百廿六番地安之助長男笹村三平と云へる。元の法科大學生を說付けて。屈ひ入れ。雜用人には岐阜縣可兒郡伏見村字伏見百廿四番地小栗藤十郎。下女には埼玉縣入間郡越生村大字

大谷一番地澤田半五郎長女お由と云へる明治女學院生を召使ひ。又府下西多摩郡平井村三百六十七番地農高原野治右衛門三女お梅といへる美貌の婦人を妻同樣にし。尙又愛知縣丹野郡穗澤村大字西大海道卅八番地鈴木市三郎の姪鈴木おげんと云る是亦明治女學院の生徒なりしを。才貌共に美しゝとて我家へ引入れたり今吉三郎が平素頗ぶる贅澤を極めたる一斑を記さんに。其居間は奥まりたる八疊の座敷にて。室内の裝飾菁美を盡し。身には常に白七子の衣服を着して。自から生たる神なりと僧稱し。家内の者は勿論出入の者にまで。お上〳〵と敬まはせ。其朝夕の食事の如きも通常の膳を用ひずして三寶を用ひ。先づおげんが菜飯の指揮をなして。之を白木の三寶に載せ。衣服を着換へ手を洗ひ。白紙を口に咬へて之を眼八分に捧げ。恰かも神前に供ふる如くになして。吉三郎の前に供ふれば。吉三郎は勿躰さうに。拍手三度して。而る後に食事に掛るを例となせり抑此おげんは多年和洋の學を修め。卒業後一先づ國へ歸りたるに。吉三郎は同女の美貌なるを見て。深く思ひの胸を焦し。豫て秘藏せし名簿により て。其國元へ尋ね行きしに。思ひの外の豪家にして。下男小則も數多く召使ひ。頗ぶ

る富貴に暮し居たれば。如何もして那の娘おげんを連出し。兩親を說付けて我喰物にせんと考へしが。夫にはおげんの手を以て兩親に昵近を求め。舌一枚の資本を以て首尾よく瞞着して呉んものをと。種々に策略を廻らしたる末。遂に母親お八重より一通の委任狀らしきものを取上たり。其文に「今度私娘げん事。先生へ身分の儀一切御願申上候上は。神に誓ひても違約は申間敷候に付。本人一身上の事は如何相成候とも。御自由たるべし。萬一其儀に背き候節は切殺しても。苦しからず云々」。吉三郎は此證書を得て仕濟したりと喜び。おげんを伴なひて東京へ歸り。尙同女の學資其他の費用として。親より渡されたる六百圓の金をも請取り。是にて望は叶ひたりとて。頻りに我意を振ひ居りしがおげんは之に逆らふ事叶はず。若し逆らはゞ約定通り切殺して終ふとて。拔刀を以て脅かす故。止む事を得ず從がひ居る內。何時か怪しき中となり遂に全く吉三郎の掛罠に陷りたるぞ淺猿し。又おげんのみならず尙安藏おたねといへる。是亦學問修業の爲に。入門したる女子をも。誑らかさんとし。おげんと同樣の契約書を取り。其學費及び諸入費を卷上げたるより。おたねは早くも此精神學者の曲者なる

事を悟り。如何もして同人の手を脫せんと謀りしかど。吉三郎は近來追々信用を失なひ。入門の生徒も殘り少なになりたる折なれば。容易に退學を許しくれず。爲にお種は進退谷まり。或夜密かに同所を逃出し。斯く學事の方向を誤まりし上は。死するに如かずと大川筋より身を投んとなしたるを。通行の人に助けられ。吉三郎の許へ送り返されたるに。吉三郎は此處ぞ世間の信用を買ふ所と親切らしくおたねを勞はり。旅費を與へて國元へ送り返したるなんど。其他種々に外見の躰裁を飾りながら。折々は其部下の者を巡査と僞らしめて。惡策を廻らせし事もありて。其術計の巧なる事。實に驚く計りなりき。斯くする內昨年九月中おげんは。吉三郎の胤を宿し。一人の女子を擧けたるが。乳の乏しきより里子に遣はさんとて。牛込區改代町の雇人受宿木村康治方へ周旋を賴み。木村は早速其の口を探し。預り人同道にて吉三郎方へ赴むきしに。吉三郎は打つて替つた權幕をなし。乃公の家に乳呑兒抱は無いぞ。何を間違へて來たか。無禮者めと。散々に罵られ。木村も預かり人も呆れ返り。そこ〳〵にして逃歸つたるが。此事近所の評判となり。前の夜まで居たる乳呑兒が急に見えなくなりたるは。

大方絆殺せしものならんなど取々に噂するを。刑事掛が聞知り種々探偵を壷したるに。全く殺せしにはあらずして。豊多摩郡内藤新宿加藤某方に預けある事が分りたれど。如何にも怪しき家なれば。尚此上とも注意せんとて。密かに眼をつけ居たり。斯くとも知らぬ吉三郎は。其後信用次第に落ちて。今は新入の生徒もなければ。勝手元日増に不如意となり。家賃は四ヶ月分滞ほり。八百屋魚屋は。勿論諸商人の負債重なりて。日々に催促を受れども。一向驚く色もなく。毎時執事の三平を應對に出し。お上には手前達の催促を。浮立腹なるぞ。何れ時機あらば拂つて遣はす間。先づ夫までは差控へて居よと。云はしめ。若し強て督促するものある時は吉三郎抜刀を以て脅やかし。切も殺さん權幕を示すにぞ。何れも之に戰き怖れて。そこ〳〵に逃歸るより。吉三郎は愈々圖に乗り己に不利なる者の來る時は。發狂の眞似して抜刀をひらめかし。是を唯一の良計として。出入の諸商人を惱ましたる爲。果は一人の同家へ貸賣する者なく。活計日々に困難なれば。終に一策を案じ出し吉三郎が曾て懐中の饒富なりし頃。日本橋區通一丁目の呉服店白木屋事大村和三郎方より。三四回衣服を買と〳〵のへし事あれ

ば。此際例もの手段を以て白木屋を瞞着し遣らんと企みたり。いよ〳〵去る七日同家へ注文して紹の羽織。鹽瀬の女袴。博多男帶其他木綿反物等代價百二十圓餘の品を買入れ。去る十八日に此仕立等も出來して。白木屋の手代が飯野方へ持參したるに。同人は此拂はなさずして。又他の女物を注文せし故。同廿日には白木屋の手代牧野峰松。速水久三郎外一名が飯野方へ赴むきて。代金の請求をなしたるに。飯野は晩になられば金が來ぬと。平氣で答へ軈て夕刻になると三口の刀を持出して。手代等の前にて引抜き。傍らに有合す柳行李に切付け。又は湯殿に在る風呂桶を切りて。何やら咒文を唱へるので。手代三人は薄氣味悪るく思ひ。如何かお早く勘定を願ひますと云へば。飯野は未だ金が來ぬから。最少し待て喧しく云ふと切殺すぞと威し附け。果ては刀の鞘にて峰松を擲りたるゆゑ。久三郎は堪へ兼ねて矢來町の派出所へ訴出で。巡査の說諭を願ひたるも。飯野は彼是と云紛らして。尚ほ金を渡さぬので。手代三人は其夜の二時頃白木屋へ引返したるが。然るに刑事掛の方では。如何にも彼れは怪しき奴と弟子となりて樣子を探り。いよ〳〵證據を得たるところへ。今詐僞取財の訴へありと聞

き直捕縛したる次第にて。如何にも憎き奴なり云々とあります。どうです。斯んな人も世にあります。成程近來での妄語者でございます。併しいつまで妄語で居らるゝものではない。行誡上人の言はるゝこどく。忽ち尻か破て仕舞て。此通りの細目でございますから。どうぞ妄語は慎しんで下さい。尤もハヤ斯る大妄語は離れか見ても。恐ろしい悪い事と分りますが。些細の妄語でも妄語は舌の功徳を失ふて信用を害し。今生の罪を顕はし未來の業因を造り善根佛種の芽を枯すものであれば返す〳〵も此戒に持たれるのが肝要であります

◎第二十四席

第五　不酤酒戒

サテ今日は不酤酒戒でございます。不酤酒とは酒を賣るなといふ戒でございますが。是れは根を斷つて葉を枯らすといふ御工夫とおもはれます。賣ものがないといふと。自然飲たうても飲めない道理じゃ。飲むなといふよりも賣るなと戒めたまふは。難有

い。併し賣なと仰せ下さる中には。飲むなといふことも自づからあるので。酒は百藥の長なとゝあれども。藥りになるかは知らぬけれども。どうも害になる方が多い。梵網經には菩薩は應さに一切衆生。明達の慧を生せしむべし。而るをかへつて更に衆生顛倒の心ろを生ずるは。是れ菩薩の波羅夷罪なりとありまして。實に此戒の相をお說きなされたのでございます。一躰酒といふものは。飲めは醉はせるといふの能なので。どうしても飲めば心ろを錯亂させて。萬事の悪行を働らかせる媒たちいれをします。じやから菩薩たるものは。一切の衆生は能いことを勸めて功徳を積せこそすれ。飲ませて心を錯亂させるやうでは。菩薩の大罪と申すものじや。顛倒の心ろとは火を冷たくおもひ。水を熱くおもふやうなもので。一切萬物を有のまゝに見ることが出來ぬのじや。ソウでございませう。或る親父が飲んだくれの子を持て。毎日〳〵飲んでばかり歩行て居るに依つて。手前のやうな飲助では。乃公の跡は取らせられぬ。氣の毒だが妹とに聟を貰つて。此家は聟にやるといふたら。悴はおどろいて改心して飲みませぬとでも言ふかとおもへば。何此家を聟にやる。私しや斯樣なうちは入りませぬ

よ。何だ馬鹿〳〵しい。こんなグル〳〵廻る家があるものかと言つたといふが。此通り顚倒して居ります。自分の眼のまわるのを知らないで。家のまわるやうのが。顚倒でなくて何でしやう。此やうなものじやから酷るなといふて。其根元を斷ち切つてお仕舞なされたでござりませう。經には酒を飲めば放逸多し。現在には常に愚痴なり。一切の事を忘失して常に智者に呵せらる。來世には常に闇鈍にして多くもろ〳〵の功德を失すとあります。どうじや恐ろしいほどのお戒しめではないか。又長阿含經には酒に六通りの害が說かれてある。一つには財を失なふて。酒の爲めに費やす所の金錢は中々澤山なものです。若し制限なく酒を用ゐる者は終には家も倉も皆んな呑でしまふじや。二つには病を生するのである。凡よそ如何なる種類の酒でも必ず亞爾古兒と名づくるものを含んで居る。この亞爾古兒が人間の腹の中に入る時は躰中のあらゆる機關を狂はして。つゐには靈活なる智覺神經をもしびれさし。からだ中の能力を害するやうになりますことじや。この酒が人間の健康に大害あることは。醫學上及び健全學上より見まするも明らかなることでありますから。近年に至りましては禁酒會じや

の節酒會じやのと云ふ組合が出來て。世間でも頻りに心配して居るものがあります。三つに鬪爭と云ふて。酒の上から喧嘩をしたり口論をしたり。つかみ合ひやら。ぶちあいやら。果ては大騷動をひきおこすことが。澤山あるじや。四には惡名流布と云ふて自分の名譽を損じ世間の信用を失ない安いじや。酒呑みと申すものは兎角に分量を守ることが出來ぬものと見へて。一杯が二杯となり。二杯が三杯となり段〻と後とを引いて。終には約束をも打ち忘れ思想をも取亂して。自然惡しき許判を立てらるゝやうになります。五には怒りをおこして生をそこなうと云ふて。酒を飲むと大概な人は。氣持があら〳〵しくなつて來て。人を。ナグリつけるやら犬猫をたゝき散らすやら。總じて生物の取扱かいが慘酷に成たがるじや。六つには智惠日々に損ずと云ふて。一日增しに段々と精神が馬鹿になるじや。前にも申したとほり亞爾古兒の毒は甚だ恐るべきもので。之れが爲に身躰所〻のからくりがくるひまするからして。自然と智覺神經が。にぶくなつてしまうじや。殊に又智度論には三十五通りの失をあげ。沙彌尼戒經には三十六通りの失をあげてありますが。いやどうもおそろしいほどでございます。

かほどまで世を害し人を害し。家を亂す毒物は。又と外にあるまいとおもふ。譬へば醜い蛇の如きや。毛虫尺取虫の類見たやうなものぢや。誰しも一目見たらぶる〳〵厭になりませうが。只嘶しに聞いてさへ。身の毛の彌立ほどじや。酒にも個ほどの毒があると知れたら。ブル〳〵厭になる譯じやが。それを質を置き裸躰になつてまでも飲みたいものと見えます。明治二十九年五月一日の中央新聞に。母子三人鐵道往生を謀るといふ票題をつけて隨分善くない人のことを書いて置ましたが。マア一つ讀んでお目にかけませう。其文に曰く。麹町區紀尾井町三番地。森勝次郎といふは女房おとくとの間に二人の子供もある程なれど。性來兎角酒と賭博に餘念がなく。毎日毎晩諸所方々を徘徊歩きて。打つと飲むとにたわいがなければ。僅か計りの家財道具も忽ちの内に無くして仕舞ひ。今は妻子が其日の事にも差し支ゆれば。女房おとくも幾度か辭を盡して。意見もしたれど。勝次郎は空吹く風と聞き流し。更に相手にせぬのみならず。強ていへば蹈んだり蹴たり。手荒な所業に及ぶので。おとくも今は我慢が出來ず。據ところなく成らず別れ同樣の姿にて。里方なる北豐島郡日暮里村千三番地千草川四郎

方へ。二人の子供を連れて立ち歸りしが。里方とはいへ我が實家も。今では養子に嫁なれば。丸で他人も同樣にて何んとなく氣が置けて。居るにもいと居難くけれど。幸ひに養子夫婦が。極く氣立の好い親切者なれば。萬事姉〳〵さん姉さんと。骨肉の如く親みて。少しも迷惑な樣子もなく。始終手厚く世話するにぞ。おとくも却つて今迄より。稍や安樂な樣にはあれど。流石に他人同士の事とて。斯く大切にせられゝばせらるゝ程尚ほ〳〵氣毒も心配もすくなからず。我れながら肩身も狹く暮し居りしが。夫れに就けても朝夕に。別れし夫の事をのみ。思ひ續けァ、彼の人が苛酷に。堅氣にさへなつて呉れゝば。斯うした苦勞もあるまいに。今頃は何うして暮らしてゐる事かと。案じぬ日とては無かりしが。爰に又彼の勝次郎は。女房子供に別れてより。厄介拂をした氣になり。結句此方が氣樂でよいと。夫れより後ちは尚ほ一倍。蕩樂に現を抜かせば。遂には元の處にも住み兼ねて。世帶を疊み所〻方〻と安宿を泊り歩き。破落戸同然の境界と成り果てしが。去四月二十五日には不忍に於て臺灣戰死者の追吊祭を行はれ。いろ〳〵餘興もありとの事に。女房おとくは二人の子供に餘所ながら。其

賑ひを見せて遣らんと。お畫前より出掛けしに。生憎同處へ赴きてより。ポツ〳〵雨が降り出したるにぞ。ソコ〳〵にして引返し。谿谷の邊迄來りし頃は。益す雨も強くなりしに。據ろなくやゝ暫し。森の木蔭に雨宿りして居りし所。今しも向ふの方よりして。二三人の破落戸共と。一杯機嫌の好氣持に。濡るゝも厭はず來掛りしは。常に心に掛つて居た。以前の夫勝次郎にて。流石子供は目も早く。ヤア阿爺が居らあ〳〵あアレ阿母ア阿爺だよ。〳〵と。我れを忘れて喜ぶを。見るにつけても女房おとくは。先づ早や胸さへ塞がりて。暫し辭も出でざりしが。勝次郎は夫れ也見るより。忽ち親子の身形に目を附け。無事であつたか丈夫で居たかと。尋ねる事はさて置て。ヤア恰と好い處で出逢つた。實は此頃廻りが悪く。旨い酒さへ充分に呑む事も出來なかつたが。幸ひの此の羽織。借りて行かうと理不盡にも。着て居るおとくの羽織に手を掛け。引つ剝がんとなしたるにぞ。餘りの事と女房は。呆れながらも其手に縋り涙と共に搔き口説けど。勝次郎は耳にも入れず。ヱ、其樣な事聞て居る暇はない。羽織を脱せば用はないのだ。早く渡せと爭ふに二人の子供はおろ〳〵涙だ。阿爺ヤア勘忍

してお呉れと。右左りより取り縋るに。傍で見た同伴の男も。流石に氣の毒とや思ひけん。色々勝次郎を說き和め。羽織を脱がせる事だけは。僅に思ひ止まりしが。ヱ、此奴等の顏を見るのも穢らはしいと。其儘女房を蹴飛ばして。鼻唄交りぶら〳〵と。何處ともなく立ち去りぬ。跡におとくはやう〳〵と。起き上りは上りしかど。泥塗れの此形で。今更家へ歸るにも歸られず。餘りといへば邪慳な非道な胴慾な。斯んな夫を持つたのが。此身の因果といひながら可愛さうなは二人の子。何んにも知らず朝夕に暮ひ焦がれて居るものを。悶然とも思はずして。まだ其上に往來中で。着て居る物迄脱がさうとは。ホンニ無慈悲な其心。ヱ、口惜しい腹が立つと。夫の跡を睨み詰め。暫し涙に暮れたるが。餘りの口惜しさ哀しさに。自づと氣分も取り逆せてや。モウ此上は死んで夫に面當てせんと。其儘兩人の子供を引き連れ。ブラ〳〵と立ち出でつ。何處を如何に徘徊ひけん。遂に其夜の十二時過ぎ。目白停車場脇なる鼠山添ひの。鐵道線路を親子三人。彷徨き居りしが幸ひ此處へ。北豐島郡練馬村七百九十一番地の瀧川熊次郎といふ者。親戚の病人方へ見舞ひに往つた歸り路。線路傳ひに來掛りつゝ。

早くも此躰を見て不審に思ひ。先づ兎も角も。我が家へ連れ來り。段々心を落ち着けさせて仔細を聞けば右の次第に。マア〳〵短氣はせぬがよいと充分意見を加へた上。其夜は自宅に一泊させ。翌朝日暮里村なる千草川方へ連れ行きたるに。同家にても昨日親子が不忍へ出掛けた儘。歸つて來ぬに深く案じて。色々諸方を捜索して居た處故。深く有處の知れしを喜び。其以來は尚ほ一層氣を附けて。親子の者を懇切に世話して居るとは。いとも感心なる夫婦と云ふべし云々と。どうです。斯樣な眞似をいたしても。酒呑みたいものでせうか。若し此席に酒好きのお方もあらば。成たけ慎んでお貰ひ申したい。よしや個ほどの自墮落飲でなくとも。中風や胃嵐のやまひを防きたばかりでも。至極結搆ではありません。先づ今日はこれで。

◎第二十五席

第六　不説過戒

此戒法は人の過まちを言はぬ戒で。至つて早ややさしいことじや。此位なことは何でもないことじやけれども。扨人の過ちは言ひたいもので。兎角人の過ちを擧げてならぬ。實に佛法の道理が少しでも分つたものには言へといふて言へないことたが。それを言ふ人があるから此戒も茲にあるのでも隨分世間を見渡したり。又世間を歩行いて居るうちには。澤山に出つ喰はすものじや。四十二章經といふお經には。穢ないものを口に嘲んで。人に吐きつけるやうなもので。向ふの人を汚さぬうちに。おのれの口が先きに汚れると仰せられてあるが。隨分面白いお噺しである。抽僧先年或る會社の社長と懇意にしたことがあるが。或時用事かあつて其會社へ尋ねましたが。何だか支配人見たやうな人が頻りに大聲をあげて。騒ぎちらし。下々のものどもを叱つて居ります。成ほど會社の支配人となり一課の課長となつたら。整理の爲めには叱りつけもしたり小言を言つたりするが。當然のことじやらふが。何とか愛語をもつて言はれそうなものじや。其叱りつける樣子を聞て居ると。更に聞いても居られぬ程の氣の毒な思ひであつた。何を小言をいふのかとおもへば。オイ痴君。君此の蚊帳は君が受持じやらふ。此蚊帳に何某の宿所が書いてないが。是れは一躰どうしたのだ。ハイ私

しは臺帳ばかり受け持ちでありません。様劵の記名書換も受け持つて居ります。然るに此頃は其變換が多くありまして。中〳〵忙がしいことでありますから。一人で中々かやり切れませんから。實はモー一人入れて頂戴いたしたいと思つて。立番に出やうとして居るのでムいます。其人の宿所を書き入れやう〳〵として。只今もふばかりでまだ書入れませんから。終にお叱りをうけますやうなことで。ソウカ。夫れでは忙がしからふが。今夜は夜業して書入れて呉れたまへ。夫れから此八兵衛は私しの友達であるから。能く八兵衛の町所番地は知つて居るが。是れは違つて居るか是りや何様したのだ。オヤ違つて居りますか。ツイ氣が付かんでムります。ナニ氣が付かん。癇君一寸茲へ來たまへ。君は一躰何の爲めに飯を喰つて居るのだ。氣が付かんで濟むか。夫から番地の違つて居るばかりじやない。月日も違つて居るではないか。君は何の爲めに飯を喰ふて居るか。此會社で雇ふて居るのは過ちを知らないで濟ませるとて。月給を出しては置かぬぞよ。斯樣なことで飯が喰へるなら。何處へでも往つて喰つて見るがよろしい。サア辭職したまへ。此方から退社せよといはぬのは。君への情けじや。

サア辭職したまへ。斯やうな鹽梅に頻りに怒鳴つて居ります。其時拙僧は考へた。ナセ癇君といふかとおもへば。其叱られて居る人の眉間に、栗をくつ付けたやうな少さな癇が出來て居ります。ア、癇君とはこれが爲めじやな。ア、氣の毒なことじや。盲目を盲目といひ。不具者を不具者といふ。醜女を醜女といひ菊石を菊石といふ。何に も當然のことで。差して不思議はなからふけれども。サテ言はるゝ方から考へたら何樣なものじや。癇君と無理矢理にいはんでも。其名を呼んだらよかりそうなものじや。其人は氣の毒にも癇君〳〵で渾名を呼ばれる。滿座の中で帳面の過ちを正すものは。ソリヤ大勢のものに氣を付けさせる爲めでもあらふが。それよりか影へ呼んで。愛嬌をもつて諭したなら。其人どんなにうれしいか知れません。頻りに辭職しろ辭職いたせと。大聲たてゝ言ひますから。社長はそれへ出て仲裁いたし。難なく其場は治まりましたが丁度退社の刻限が來ましたし。又用事も濟ましたから。外へ出まして以前の叱られた男を待つて居りまして。何んにもないが拙寺でお夕飯を差しあげたいがと。辭退するのを無理に連れて。寺へ歸りまして色〳〵と慰さめました。スルと其人涙を

流しまして。ナニ私しが悪いのでムりました。併し那の人は新聞屋あがりでありますから。中〳〵悪口でムります。常のことだと思つて断念めては居りますが。三度に一度はムッとしまして。子供もなく妻もなく。一人ものなら何でもないこと。止めろと言はれたなら止めますけれども。少〳〵な月給でも社から貰はにや大勢の口が乾きますから。ッと堪らへて辛抱して居ります。去りながら那のやうな人に限ッて。随分落度もたんとあるものでムります。自分の失策は棚へ上げておいて。やかましくばかり言ひますから。影では人が善く言ひませんと。涙と共もに口惜しがりつゝ嘶しましたが。此人の心ろを察しまして拙僧も感涙いたしました。併し是れは面と向つて過ちを挙げたのじやが是の嘶しより悪いのは影で悪る口を聞くものがあります。那の人は何處の槇を盗んだとか。那の人は誰れそれと通じて居るとか。其子供は十圓つけて余所へ遣つたとか。種々雑多なことを言ひます。能くないことじや。譬へば剃刀のやうなもので大人が持てば顔を奇麗に剃り項も足をつけて立派につくるけれども。子供が持てば大層な怪我をする。大人が此戒を守れば愛語となりて。多くの人が歸伏すれども。小人は此戒法を破ぶるから。兎角世間に怪我人が多い。先頃本所の緑町に住む拙僧が友人の又友人。東海林某がしの一人娘。可愛そうな死にやうをいたしました。抑も世の中に術ないことじやといふ言葉があるが。何が術ないと申したところ死ぬほど術ないことはなからふ。過ちを人に言はれ。且つ短所を罵られて。シテ此娘は死んだといふ。鬼も十七といふ何ぼふか見榮えする年紀になりたれども。不幸此娘めはますます醜く〳〵。二親もまた此娘を不憫におもつて。殊更可愛くいたしました。あれやこれやと物取らせて。或ひは着飾るまてにもと。うつくしい着物など買ふて遣りますと。娘はこれで却つて涙だをこぼします。大方其心ろでは。ア、斯樣なうつくしい着物を着て。淺草へでも往つて見たら嘸面白い事であらふが。此顔で斯樣な着物を着たら。他人は化物でも通ふるとおもふだらう。ア、厭やじや〳〵。斯のやうな着物は見たくもないと。却てこれを見て泣くのであらふ。又一つにはア、不孝なことじや。此やうに兩親を苦るしむるか。お痛はしいことであると。かやうなおもひも起すであらふ。何にしろうつくしい着物を見て。泣く心ろ根がおもひやらるゝ。世間にいづる心ろも

なく。人に見らるゝを物憂くおもひ。本意なきものよ悲しき世やと。只管我身の醜くきを耻らひ。きのふよけふよと暮し居りしが。其隣の嫁なる人が。此娘の私かに井戸端に來たりて。我家の盥ひとおもひてか。只ある盥で洗濯を始じめ。着物一つ洗つて引返むのを見まして。突然下女を呼んで盥を指さし。おさん其盥を清めてお呉れ。今子隣りの化ものが汚ない着物を洗つて往つたよ。那の面を見ると嘔吐が出るワ。早く清めてお呉れと。下女に言付ましたから。下女は相槌を打ちまして。那の化物が家の盥で。ヘイー。それで禮も言はないで。眞成に憎らしい化物ですね〳〵。かやうなことを申しつゝ鹽を振つて居りますのを。運もわるく其娘が聞きまして。アヽ那の盥が隣りの盥ひであつたか。濟まないことをいたした。ドレ謝まつて來やうとそれ〳〵出まして。丁寧にあやまりました。ところが其晩の夕飯の時に又娘の噂をして家内中に嘲して居ますを。又此娘が聞きました。悪るい時には悪るいもので。立聞する心ろでもないが。此家の雪隱は。丁度隣の勝手の側だから。其雪隱に居るとき。直ぐ手に取るやうに聞えたのじや。サア是れを聞た娘はたまらない。其夜縊れて死にました。アヽ人の過ちをいふのは悪いもので厶ります。皆さまもわけないことじやから。此戒くらゐはつゝしんで貰いたい。特に此の不説過戒は人々日用の左右にして徳を積むも徳を損ずるも此戒の持犯にあるのじや。元來他人の過失を説くことは自分の過失を掩ひ蔽し又は他人の評判を妬むと云ふ。極めて卑劣な根性から起るのであれば。人々の品位の上から見ても他人の過失を説くことの不可なるは道理上にも實際上にも同じ事であれば。必ず〳〵注意して此戒を犯さぬ樣に致さねばなりません。

◎第二十六席

第七　不自讃毀他戒

サテ此戒も別に六ケ敷ことはない。少し道理の分つたものには。自分を讃めて他を毀らうくるやうなことは致さん。去れども兎角世間に馬鹿ものが多くて。此の戒を破りたがる。まことに困つたものじや。オイ〳〵關取。今日の角力はどうであつたな。ハイ今日の角力でゴンスか。今日は先方が強くゴンした。ヤヤア貧けたのじやな。ハイ貧

けました。負けたも負けた尤も見事に負けまして。四つにまで渡ッて見事土俵の眞中へ。ヤレ〳〵それは氣の毒じや。是れなれば確かに此戒を守ッたのじやが。オイ關取。今日は大層な出來であつたじやないか。名に負ふ横綱の大關。小錦ども言はれるものを。見事に投げて仕舞ふたじやないか。ハイ今日は宜あんばいに私しの得意にかゝりまして。流石の小錦も尻餅を搗きました。ハイ私しの彈きには小錦の鐵砲も叶はぬと見えます。是れなれば確かに此戒を破ッて居りますけれども。横綱の大關。小錦を負したら。通例な力士は自讃毀他をやらかします。流石は大關。東京日々新聞に出て居るのを見ますといふと。甘いことを言つて居ります。其文に曰く。明治二十九年五月十一日は。回向院大相撲の初日に當りて小錦の爲めには。厄日か又は吉日か。横綱を許されたほや〳〵の大關。幕下から這ひあがりの狹布の里と取組んで。一突强く鐵砲を喰はしたら。狹布の里は翦れて横に走りつゝ。其手を伸して彈きたれば。力あまりて横綱大關。土俵の眞ン中に尻餅搗きたり。如何にも氣の毒のことゝおもつて。翌十二日は雨となりて相撲は休んでも稽古はあるじやらふと。高砂の稽古場へ押して行き。

稽古も濟んだから小錦にむかひ。昨日の負けたのを慰さめますと。小錦は笑ひながら。ハイ有難う存じます。昨日の負けは全く摩利支天の御冥戒でゴンスわい。抑も横綱と申すものは。力士としては此上のない名譽のものでゴンス。然るに拙者如きの腕前では。まだ〳〵張られんところであれど。御贔負さまのおすゝめやら。又自分もうれしくおもつて。横綱を許されたれど。摩利支天さまが承知なされず。初日天ッ邊に御冥戒あらせられました。實以て狹布關は摩利支天さまの御化身とおもはれます。大層な働らきでゴンしたといふた言葉に。其れを褒めて又書きますには。好し小錦。其心ろは以て横綱たるに耻ぢず。其心ろを擴めば。横綱を全うするに足るべしと評した。如何さまそうでもあらふ。かやうな鹽梅に言ふのが。少しも道理が分かつたものゝ。當然の言葉であるのじや。是れはマア些細なことじやが。隨分人を殺し國をも亡ぼすのが自讃毀他の破戒といふのじや。人の功を奪ッて己れの功としたり。人を毀つけておのれを立たり。いろ〳〵なことを致しますから。諸大名のうちなどでも。此逆臣がはびこりて。お家騷動を起したり。天下に御迷惑をかけたりする。かゝる例しはいく

らもあることじや。譬へば水のやうなものじや。風さへなければ至つて靜かじやけれども。一度風が起つて御覽なさへ。船をも覆がへし津浪も起す。其騷ぎはどうじやらふ。人をも殺せは陸をも崩して。お負けに家藏まで持つて往つて仕舞ふ。水の靜かで居るのは不自讃毀他の相じや。風の起つたのは自讃毀他を犯したのじや。守りて居れば水じやけれども。犯して來ると激浪となつて大騷ぎを始める。茲の道理か分つたなら。些細な氣の付けやうで濟むのじやから。此位なことは守らにやならぬ。今頃神田の錦輝館で或人が演說をやりましたが。拙僧も佛敎演說といふのであるから。先づまづ何がな材料にもと。これを聞きにまゐりました。スルと一人の辯士かあらはれまして。第九議會まで議員を勤めて居られた。其氏が辭表を出して。議員を止めて仕舞ふたり。職分の辯護士も止めて仕舞ふたと。下らなく落ふれた噺しをやります。元來此代議士の身の上は。萬朝報といふ新聞に。三十回ばかりつゝけまして。何ぼ新聞の職分とは言へ。隨分酷く叩きまして。此代議士に辭職もさせ。辯護士も止めさせるはどに。惡事を書き立てました。其惡事の次第といふは。日本國中知らぬものないはどし

やから。拙僧は皆樣御存じのことゝして。茲には愼しんで申しませんが。彼の辯士は何事でありませふ。最早萬朝報が。糞味噌に叩きまして。代議士自身に代議士を恥ちて。其職を自から退ぞき。辯護士も頼む人がないから。これも自身で止めて仕舞。零落して何を爲すことも出來ないやうにしたから。夫れてよいではありませんか。それを又更に擔ぎ出して。大衆の前に披露するとは。抑も何の事であらふ。其癖よく〳〵聞いて見れは。御自分も其樣なに人のことを言はれぬそうだ。此演說が始まるといふと。其仲間の辯士達が。心ろを注けて止めたまへ〳〵といふたが。辯士は一向聞き入れずに。トー〳〵仕舞までやりました。それがサ又妙なもので。惡るいことゝいふは誰れも喜ぶものと見えて。大衆は手をパチ〳〵叩きまして。ヒヤ〳〵で聞て居ります。拙僧等は自讃毀他の罪人とおもつて。甚だあはれを感じました。此やうな人〴〵には何卒ぞ此の不自讃毀他戒をすゝめて。斯樣なことは言はせたくないものじや。前席でお噺しにおよびました。不說過戒もよろしい。此不自讃毀他戒もよろしい。どちらも其樣なに六ケ敷ことではない。此位ゐなことはすゝめたなら。分らぬ人でもなからふ